

判事 小村壽太郎

書記 味岡禮實

要領 子孫其祖父母ヲ毒殺シタルモノハ刑法第三百六十二條ニ據ルヘキモノトス

住所身分職業畧之

光末キ

年齡畧之

右「キヌ」カ被告事件ニ付明治十六年三月七日廣島重罪裁判所ニ於テ被告ハ父仁兵衛ニ鼠取藥ヲ施用シ毒殺セシ所爲ハ謀殺ノ罪トシ刑法第三百六十二條ニ依リ死刑ニ處スト言渡タル裁判ニ對シ「キヌ」ハ上告ヲ爲シタリ其要旨ハ七十歳餘ノ老父ニ對シ毒殺セシムルコトハ情理上萬爲スヘカラサルコトハ論ヲ俟タス然ルニ原裁判所ニ於テ前書ノ如キ判決ヲ下サレタルハ不當ナリト云フニ過キス同裁判所檢事加納謙荅辨ノ要旨ハ到底自己ニ不利益ナル事實ノ判定ヲ不當トナスニ止ルモノ

キヌハ上告ノ理由ナキモノト云フニ在リ被告代言人浦田治平ハ被告カ所爲ハ刑法第三百六十二條及ヒ第三百九十三條ヲ適用スヘキニ原裁判官カ單ニ三百六十二條ニ依リタルハ法律ノ適用ヲ誤リタルモノナリト辨論セリ玆ニ立會檢事池上三郎ノ意見ヲ聽キ判決スル左ノ如シ

本案上告ノ主要ハ事實裁判官ノ職權ナル心証判斷ニ對シ徒ラニ不服ヲ鳴ラシ事實ノ覆審ヲ試ミントスルニ外ナラス何トナレハ原書類ヲ鑑査スルニ判定上一トシテ違法ノ廉アルナシ將テ被告代言人浦田治平ハ原裁判官カ被告所爲ニ對シ刑法第三百六十二條及ヒ第二百九十三條ニ依ラスシテ單ニ三百六十二條ニ問擬シタルハ法律ノ適用ヲ誤リタルモノト論陳スルモ刑法第三百六十二條子孫其祖父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ストアリテ別ニ毒殺罪ノ法律ナケレハ其尊屬親ニ對スル謀故殺罪ハ總テ同條ニ依ラサルヲ得ス故ニ原裁判官祖父母父母ニ對スル罪

カ之ニ問據セシハ素ヨリ相當ナリトス到底上告ノ旨趣相立タス因テ
治罪法第四百二十七條ニ從ヒ本案上告ヲ棄却スルモノ也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

裁判長判事 土師 經典 專任判事 石井 忠 恭

判事 高 木 勤 判事 黒岩 直 方

判事 小村 壽 太郎 書記 味 岡 禮 賢

〔要領〕(一)自カラ養家ノ氏ヲ冒シ養母ト唱呼シ又戸籍上養子ノ名義ヲ

登記シフルニ於テハ養母子ノ事實完全ナリトス

(二)故ラニ証人ノ呼出ヲ請求スルニ非サレハ之ヲ呼出スヲ要

セス又假令其呼出ヲ請求スルモ之ヲ許否スルハ裁判官ノ權

内ニ在リ

住所身分職業畧之

寺 田 善 吉

年 齡 略 之

右善吉カ被告事件ニ付明治十六年三月七日滋賀重罪裁判所ニ於テ被
告ハ明治十五年九月一日ノ夜養母「カノ」ヲ謀殺シタルモノト判定シ刑
法第三百六十二條ニ照シ死刑ニ處スト言渡シタル裁判ニ對シ被告善
吉ハ之ヲ不法ナリトシ上告セル其要領ハ被告カ戸籍上養子ノ名義ア
ルモ未タ完全ナル養母子ノ事實成立サルヲ及ヒ犯罪企圖ノ前靜思熟
慮セシニアラス飲酒酩酊シ精神常ヲ失ヒ一時憤怒ノ餘リ忽然殺意ヲ
生シ娘「タマ」ヲ殺害セントシテ誤テ母「カノ」ヲ殺シタル事實ナレハ故殺
ニシテ謀殺ニアラス尙ホ原諒ス可キ情狀アルヲ以テ減輕セラル可キ
モノナリ又公判廷ニ於テ証人等ノ呼出ヲ請求スルモ採用セラレズ且
之ニ對シ判決ヲモ爲ハスシテ漫リニ刑法第三百六十二條ヲ適用セラ
レシハ事實ノ理由ヲ缺キ及ヒ擬律ノ錯誤ニ係ル不法ノ裁判ナルヲ以
テ破毀ヲ願フト云フニ在リ對手人檢事平川楨ハ被告カ養子タルノ事

祖父母父母ニ對スル罪

實完全セシコトハ戸籍上其他明瞭ニシテ且娘シマヲ殺害ス可キ存念ニ
 アラサルコトハ最初警察官及ヒ豫審判事ノ取調ニ對シ一モ其事ヲ供述
 セサルノミナラス養母カノニ對シテハ殺害ノ原因アルモ却テシマニ
 於テハ其原因ナク又豫メ謀レハコソ實家ノ脇差ヲ持參シタルモノナ
 レハ素ヨリ謀殺タル論ヲ俟タス故ニ該上告ノ旨趣ハ不當ナリト答辨
 セリ爰ニ大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ上告代言人内藤五郎ノ
 陳述及ヒ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ判決スル左ノ如シ
 本案上告論旨ノ最モ主眼トスル被告カ養母子ノ事實ハ曾テ戸籍上登
 記シタルノミナラス上告趣意書其他一件書類中散見スル處ニ於テモ
 亦明瞭ニシテ現ニ被告自カラ養家ノ氏即チ寺田ヲ冒シ實父養母ト唱
 呼セリ況ンヤ殺害ノ起意專ラ離縁セラルハニ原因スルニ於テナヤ且
 証人等呼出請求ノ點ニ於テハ公判始末書ヲ閱スルニ辨護人辨論中ニ
 「門谷藤次郎若村幸七ヲ御尋ナレハ分リ可憫ノ情アラント思考ス」トノ

ミアリテ故ラニ請求ヲ爲シタルモノニアラス假令ヒ請求スルモ之ヲ
 許否スルハ裁判官ノ權内ナレハ許可セサルトテ之ヲ以テ上告ノ原因
 ト爲スコトヲ得ス其他誤殺或ハ精神錯亂シ故殺ナリト云フカ如キハ原
 書類中果シテ其情況アリト信テ措クニ足ル可キモノアルコトナシ然レ
 ハ則チ原裁判官カ衆証ニ據リ被告犯罪ノ事實ハ豫メ謀テ養母ヲ殺害
 セシモノト判定シ刑法第三百六十二條ニ照依シタルハ事實ノ理由及
 ヒ法律ノ適用ニ於テ毫モ瑕瑾アルコトナシ仍テ該上告ノ旨趣ハ總テ相
 立サルモノトス
 右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七條ニ依リ本案上告ハ之ヲ棄
 却スルモノ也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月三日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 黒岩直方

祖父母父母ニ對スル罪

判事 中島 盛有

判事 土師 經典

判事 吉本 知幾

書記 味岡 禮質

〔要領〕衆証ヲ採擇シテ犯罪ノ有無ヲ決スルハ專ラ裁判官ノ權内ニ在レ
ハ事實認定上ノ當否ヲ論告スルモ上告ノ理由トナラス又醫師ノ
鑑定ヲ請求シタルニ裁判官ニ於テ化學士ヲシテ鑑定セシメタリ
ト雖モ是亦其職權内ニ屬スル處分ナレハ敢テ不當ト爲ステ得ス
住所身分職業畧之

柳井 鶴松

年齢畧之

明治十六年四月十六日神奈川重罪裁判所ニ於テ右柳井鶴松カ被告事
件ヲ審判シ娘父母ヲ謀殺シ其罪ヲ隱蔽セシ爲メ火ヲ放テ家屋ヲ燒燬
シタル者トシ刑法第百十五條刑法第三百六十二條刑法第四百七條刑
法第四百八條ニ照シ二罪俱發スルヲ以テ刑法第百條ニ依リ一ノ重キ

刑法第三百六十二條ニ依リ死刑ニ處スト言渡シタリ

柳井鶴松ハ右ノ裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲スハ原裁判所
警察官カ作リタル調書即チ被告ハノ白狀燒死人ノ檢視書醫師ノ診斷
書及ヒ其申立証人ノ陳述稻荷神社ノ下ヨリ發見シタル物件ニ依リ被
告人ヲ謀殺及放火ノ犯人ナリト見認ラシタリト雖モ被告人ノ白狀ハ
拷問ニ依テ成立タル者ニシテ任意ノ白狀ニアラス其証據ハ事實ト白
狀ト符合セサルヲ以テ沙カラサル是ナリ何トモレハ公判廷ニ於テ檢察官
ハ明治十五年十月十四日午後八時ニ在テハ已ニ被告ハ兩親ヲ毆殺シ
且放火シ終リタリトノヲ述ヘ原裁判所モ其陳述ヲ容レシタルモ
ノ、如シト雖モ此八時ニ在テ犯罪ヲ終リタリトノハ白狀シタル
トシ假リニ八時迄ニ犯罪ヲ終リタリトセンカ被告ノ家屋ハ茅屋ニシ
テ石造ニモ非ス八時ニ放タル火ノ十一時ニ至リ發火スヘキ道理アル
トナケレハ八時ニ在テ兇行シ終ラサル明ガナリ又八時後ニ兇行シテ

娘父母父母ニ對スル罪

リキセンガ柳井傳左衛門ト同行シタル事實アリ高橋トナ方ニ於テ入浴シタル事實アリ飯島鐵藏方ヘ行キタル事實アリテ八時後ニ至テ兇行シタル時間アルコトナシ又檢視書ニハ親父ノ死體ニ負傷一ヶ所アリト記載アルモ証人結城靜淵ノ豫審調書ニ依レハ死后ノ傷所ナルコト明瞭ナリ又親父ノ形狀恰モ熟眠中頭腦ヲ破碎セラレ、カ如ク臥床ノ上ニ仰向キニ死シタリト雖モ是等ハ決シテ怪ムニ足ラズ何トナレハ其死スルヤ炭酸中毒ニ因テ死スル者アリ驚怖ニ因テ死スル者アリ此二者ハ其煩悶ノ狀ヲ顯ハスノ違ナクシテ死スル者ナルカ故ニ恰モ熟眠中ニ死スルカ如キ形ヲ顯ス者ナリ又燒火中ニ死シタリトセハ煩悶ハ免シサルヘシト雖モ煩悶中ニ死シタル者ハ必スシモ仰向キニ死スル道理ナシトスヘカラス又檢視書中殺害ニ係ルノ痕跡ナク且証狀附着部ニ些少ノ肉色ヲ存シ水泡及充血ノアルヲ見レハ生存中火傷シタル者ナリ云々又親母ノ死體ニ付テハ又眼ヲ開キ死シタル形狀其死スルノ

際煩悶察スヘキナリ云々兩醫ノ檢査ニ依レハ致命ノ原因トナルヘキ點ヲ見ス是全ク動作中烈火ノ爲メ燒死シタル者ナリト云テアリテ親父ハ暫ク措キ養母ハ被告ニ於テ毆殺セサルコト明瞭ナリ醫師ノ診斷書及其申立ニハ被害者兩名ノ屍ニ水泡及ヒ充血ノ存在シタルコト明記セリ之ヲ識者ニ問ク其充血ハ生活器ノ働ニ因テ成立ス者ニシテ動物ノ如何チ問ハス既ニ死シタル者ナリトセハ生活器ノ働アルナク隨テ血液ノ運動全ク止マルモノナルカ故ニ仮令ヒ火中ニ投スルトモ充血ヲ生スヘキ理ナキモノナリト果シテ然ラハ親父母ノ死屍ニ水泡及充血アリシ以上ハ毆殺シタル者ヲ火中ニ投シタルニアラサルコト明瞭ナリ証人ノ陳述稻荷社ノ下ヨリ發見シタル被告ノ所有物トアル其証人ノ陳述トハ物件ノ所在ヲ被告人ヨリ聞キタリトノ陳述ナルヘシト雖モ被告人カ物件ヲ稻荷社ノ下ニ藏匿シタルコトアルナク隨テ其事項ヲ親屬等ニ告語シタルコトナシ思フニ親屬ノ中故アリテ被告人ヲ讒敵

親父母ノ母ニ對スル罪

夫ルモノアルヲ以テ或ハ爲メニ冤枉セラルルニ原因スルモ知ル可カ
 ラス又被告ノ養父母ハ貯蓄家ニシテ親屬等ニ於テハ其金圓ヲ借ラサ
 ルモノナキヲ以テ今被告人カ刑セラルルニ於テハ或ハ其返金ノ責ヲ
 免ガルトノ想像ニ原因スルカ又被告人果シテ冤枉ノ中ニ瞑目セハ
 其財産ハ擧テテ近親ノ所有ニ歸スルナラントノ目的ニ因テ冤枉セラ
 ルルモノカ是又知ル可カラズ又反對ノ點ヨリ論下セハ其物件ハ養父
 カ生存中盜難若クハ火災ヲ避クル爲メ社内ニ藏セシヤモ知ル可カラ
 サルナリ以上ノ事實及ヒ反對ナル情供證據ニ依レハ被告人ハ養父母
 ヲ毆殺シ及ヒ放火シタルヲナキハ明瞭ナルニ原裁判ハ其反對ナル事
 實情供ニ拘ハラズ容易ク被告人ヲ兇行者ナリト認定シタルハ不當ナ
 リト云フニアリ

胸奈川重罪裁判所檢事瀧美友成カ善辨ノ旨趣ヲ被告人ノ白狀ハ拷問
 ニ依テ成立タルモノニシテ任意ノ白狀ニ非ラズト云フモ檢察官ヨリ

檢事ニ送致シタル當時檢事ノ訊問スル際毫モ拷問ヲ受ケタルヲ陳
 述セス而シテ豫審判事カ數回ノ訊問席ニ於テモ亦拷問ヲ受ケタル等
 ノ言ハ嘗テ述ヘサリシ畜警察官ニ對シテ爲シタル白狀ハ被告人ノ不
 利益ナルヲ覺リテユリ種々之ヲ抹殺シ去ラント試ミタルモ遂ニ其捏
 造作爲ノ僞言ナルカ爲メ首尾ヲ結フヲ能ハスシテ最終ノ訊問ニ及テ
 ハ精神錯亂シテ此數回ノ陳述ニ何事ヲ述タルヤ心ニ之ヲ記セスト瞞
 着セリ之ニ依テ見ルモ被告人カ警察官ニ對シ爲シタル陳述ハ眞實ノ
 白狀ナルヤ明ナリ又檢察官カ十月十四日午後八時ニ於テ犯罪ヲ了リ
 タル者ト述ヘタルハ事實ニ當ラストノ事ハ檢察官ハ必スシモ正八時
 ナルハシト証言スルニ依リ被告人カ傳左衛門方ニ至リタルハ犯罪ヲ
 了リタル后ナリト認定スル旨ヲ論シタルナリ良シヤ之ヲ正八時トス
 ルモ決シテ不當ニ非ス如何トナレハ被告カ犯罪ノ日時ハ曆ニ依テ見
 ルモ此候ニシテ日没スル時ハ午後五時三十分ナリ而シテ被告ノ白狀

祖父母父母ニ對スル罪

ニ就キ見ルニ被告カ山ヨリ歸リタルハ未ダ日ノ暮レサル時トスルハ
 遅クモ五時前後ナリシナラン夫ヨリ八時ニ至ル三時間ニ於テ兇行ヲ
 遂クルハ甚ク難キニ非サルナリ又八時ニ放火シタル火ノ十一時ニ至
 リテ發火ス可キ謂レナシトフテ主張スレモ是亦怪ムニ足ラズ何トナ
 レハ被告人カ兇行ノ最終ニ火ノ付キタル薪ヲ椽ノ下ニ入レ松葉ヲ積
 ミタルトノ事ナレハ椽下ニ一ヶ所火ヲ放タルニ相違ナシ然ラハ其火
 ノ漸次燦延シテ床下ヨリ障壁ニ欄間ニ天井ニ遂ニ屋上ニ燒及シ遠近
 之ヲ知ルニ至リシハ殆ント三時間ヲ經タリトスルハ實ニ相當ノ時間
 ナリトス又檢視書及醫師ノ診斷書ニ就テ縷々陳辨スト雖モ被告人ノ
 白狀ニ五郎左衛門ハ其場ニ散在セル四布蒲團ヲ以テ包ミ疊ト敷板ヲ
 起シテ椽下ニ落シタリトアルニ符合スル點ハ檢視ノ際五郎左衛門死
 體ノ背部ニ蒲團ノ殘片カ付着シアリトノ一ニ是果シテ被告人白狀ノ如
 シ敷板ヲ起シ死屍ヲ直チニ地上ニ密着セシメタルヲ顯然タリ又死屍

ナシテ火ニ燒タルモノトスレハ水泡充血ヲ生スルヲナシト陳スレモ
 横濱司藥場化學士「クロンケトル」カ學術上ノ經驗說ニ依レハ其軀
 ニ血ノ殘リアル間ハ膨レルヲアリト云ヒ又火ノ熱度ニ隨ヒ黒クモナ
 リ又タ赤クモナルヲアリト説キシニ依レハ假令水泡充血アルモ死屍
 ナシ燒キタルモノトスルニ何ソ之ヲ誣言トセンヤ而シテ死屍ノ潰爛焦
 化シタルニ付テハ又打撲傷ヲ檢舉セントスルハ到底爲シ能ハサル者
 トス又物件ヲ稻荷社ノ下ニ藏匿シタルヲアルヲナシ云々ト云ト雖モ
 只是架空ノ妄說ニ過キス何トナレハ被告人ノ親戚飯島安兵衛以下二十名ノ者ハ連
 モナキ而已ナラス現ニ被告人ノ親戚飯島安兵衛以下二十名ノ者ハ連
 署シテ被告人ノ刑罰ヲ宥恕サレノヲ歎願シタルニ付テモ知ル可キ
 ナリ上告ノ趣旨ハ專ラ事實ニ涉リ法律ニ定メタル處ノ原由ナキニ付
 到底無効ニ歸スヘキ者ト思惟スト謂フニ在リ上告代言人田中晉ハ上
 告ノ旨趣ヲ擴張論辨シ且原裁判所ニ於テ水泡充血ノ點ニ付醫員ヲ召

喚シ學術上ノ鑑定ヲ請求シタルニ化學士ヲ喚出シ鑑定セシメタルハ
不當ノ處分ナル旨ヲ論告セリ依テ本院檢事林三介ノ意見ヲ聽キ之ヲ
判決スルハ左ノ如シ

治罪法第四百十六條末項ニ被告人ノ自狀官吏ノ檢証調書證據物件証
人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ストアリ
テ衆証ヲ採擇シテ犯罪ノ有無ヲ決スルハ專ラ裁判官ノ權内ニ在ル者
ナレハ事實認定上ノ當否ヲ論告スルモ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スト
ヲ得サルモノトス本按上告ノ趣旨タル要スルニ採証法及ヒ事實認定
上ノ當否ヲ論難スルニ過キサルモノナリ又上告代言人ニ於テハ原裁
判所カ醫員ヲ召喚セスシテ化學士ヲ喚出シタルハ不當ナリト論辨ス
ト雖モ本按水泡充血ノ如キハ專ラ醫學士ノ鑑定ヲ主要ナリトスト雖
モ化學モ亦其部分ニ屬シ且裁判官カ必要ナリト信シ化學士ヲ鑑定
セシメタルハ亦其職權内ニシテ敢テ不當ト爲ストヲ得サルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七條ニ從ヒ上告ヲ棄却スル者
ナリ

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年七月十一日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 大塚 正男

判事 山根 秀介 判事 高木 勤

同 昌谷 千里 書記 山縣 武男

(要領)養父母ヲ殺害シタル罪ヲ斷スルニ付キ其謀殺ナルヤ故殺ナルヤ
ヲ明示セスト雖モ其結果ハ等シク死刑ナルノミナラス其謀殺ノ
罪全ク成立タル事實ノ理由ヲ明示シタルニ於テハ敢テ不當ト爲
スヲ得ス

住所身分職業畧之

會田 佐十郎

祖父母父母ニ對スル罪

癩父母ヲ謀殺シタル被告事件ニ付明治十六年六月四日神奈川重罪裁判所ニ於テ會田佐十郎カ所爲ヲ審理シ被告人ハ養父母カ毎ニ酒ヲ嗜ミ己ヲ嘲罵叱責スルノ嚴ナルヲ遺憾ニ思ヒ居タル處明治十六年三月三日亦太甚々罵辱セラレ是ニ於テ遂ニ癩父母ヲ殺サント決心シ實家八木下濱吉所藏ノ脇差ヲ竊カニ持出シ之ヲ匿シ置キ其翌三月四日午前一時右脇差ヲ携ヘ癩家ノ裏口ヨリ忍ヒ入先ツ癩母カヲ斬殺シ續テ癩父清五郎ニ數ヶ所ノ重傷ヲ負ハセ爲メニ死ニ致シタル罪証明白ナリト判定シ刑法第百十五條同第三百六十二條ニ該當スルニ因リ死刑ニ處スト言渡タリ

被告會田佐十郎ハ之ヲ不當トシ上告ヲ爲シタルノ趣旨ハ本年三月四日午後十時頃養父母等ト口ヲ極メテ自分ヲ罵リ親不孝ノ者ニ付切殺スモ差構ナシト言ナカラ庖丁ヲ以テ打掛リ自分頸部ニ二ヶ所負傷セ

シニ付其庖丁ヲ捻取リ之ヲ携ヘ居タル處癩父清五郎癩母カヲ俱々コロシキ來テ其庖丁ニ觸レ即死又ハ致命傷ニ至リタル者ナレハ決テ殺害シタルニ非スト陳辨セリ對手人檢事渥美友成ハ上告ノ趣旨ハ前供ヲ反異シ徒ニ其刑ヲ免レント謀ル窮策ニ過キスシテ法律ニ定メタル上告ノ原由ト爲ル可ラス其誤殺ノ事實ハ衆証ニ由テ瞭然タレハ本件上告ハ當然棄却アル可キ者ト答辨セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百廿一條及ヒ第四百二十五條ノ成規ニ原キ院長ノ選任シタル代言人太田信光ノ辨論ヲ聽クニ被告人ノ性質温順ナルコトハ近隣舉テ稱揚スル處ニシテ明治十三年會田清五郎カ養子ト爲リタル以來拮据勉勵其勞力ヲ以テ養父母ヲ奉養シ實ニ孝子ト稱スヘキ者ニシテ何ソ殺意ヲ生スル如キ者ナランヤ然ルニ其爰ニ至リタルハ或ハ父母醉魔ノ致ス處ナラン歟是レ上告趣意ノ盡ス處ナレハ今其趣意ヲ擴張シ破毀ヲ求ントスルノ要點アリ曰ク刑法第三百六十二

條ニハ子孫其祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ストアリ原
 裁判言渡ハ被告人ノ所爲ニ對シ刑法第一百五條全第三百六十二條ニ
 該當ストノミアリテ其謀殺ナリヤ故殺ナリヤチ判定セス或ハ說ヲ爲
 ス者アラソ其結果同シケレハ刑ニ影響ナシト然レモ法律ハ其結果ノ
 ミニ依據ス可ヲサル者アリ治罪法第四百十條第九ニ定メタル法律ノ
 理由ヲ付セサル時トアル是ナリ因テ充分上告ノ理由アリト信スト檢
 事池上三郎ハ上告趣意及ヒ擴張論旨ノ不當ナル理由ヲ辨明シ法ニ依
 リ棄却ノ言渡アル可シト陳述セリ仍テ判決スルヲ左ノ如シ
 謀殺ノ罪ハ三個ノ原因アリテ成立ツ者ナリ曰ク犯罪ノ決心其豫備及
 ヒ着手是レナリ本件被告人カ爲ス處ハ原裁判言渡書ニ列舉シタル如
 ク已ニ養父母ヲ殺サント決心シ豫メ實家所藏ノ脇差ヲ取出シ而シテ
 養父母ヲ殺害シタル者ナレハ即チ謀殺ノ所爲ナルヲ判然ナリトス此
 事實ニ對シテハ上告人カ口頭無証ノ陳辨ヲ以テ動カス可ラサル者ナ

シハ固ヨリ上告ノ理由ナキ者トス而シテ代言人カ論告スル處原裁判
 所ハ刑法第三百六十二條ニ該當ストノミ揭ケ謀殺ナリヤ故殺ナリヤ
 チ明示セスト云フト雖モ其結果ハ等シク死刑ナルノミナラス前ニ辨
 明スル如ク被告人ノ所爲ハ全ク謀殺ノ罪成立タル者ニシテ其理由ハ
 裁判書ニ之ヲ証明シタリ事實已ニ謀殺ト判定シタル以上刑法第三百
 六十二條ヲ適用シ單ニ死刑ト言渡シタルハ敢テ不當ト言フチ得サル
 者トス
 右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七條ニ從ヒ本件上告ヲ棄却ス
 ル者也
 大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月二十三日

裁判長判事 大塚正男 專任判事 山根秀介

判事 高木勤 判事 昌谷千聖

祖父母父母ニ對スル罪

判事 小村壽太郎

書記 津田重照

〔要領〕謀テ父ヲ殺害シタル情供明確ナルニモ拘ハラヌ故殺ト判定シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

溝口太郎吉

年齢畧之

謀殺被告事件ニ付明治十六年七月三日静岡重罪裁判所ニ於テ刑法第三百六十二條同第七十七條第三項同第二百九十八條同第二百九十四條同第一百條同第一百十二條ニ照ラシ死刑ニ處スト言渡シタル裁判ニ對シ同所檢事高津雄介ハ之ヲ不當ナリトシ上告セリ其要領ハ被告カ父大次ハ平日妹「キン」ヲ偏愛シ被告夫婦ヲ待遇スルノ情甚冷ナルヲ積怨シ且當日父カ叱責ヲ受ケタルト共ニ憤懣シ寧ロ父ヲ殺サント之ヲ心ニ謀リ一旦其場ヲ去リ杉山由藏方ニ至リ詐テ兇器ヲ借り之ヲ懷ロ

ニ秘シ家ニ歸リ父ノ怒リヲ挑ミ遂ニ父ヲ殺シタル情供ニ據レハ確キナル謀殺ノ所爲ナルニモ拘ラス原裁判所ハ皮相外觀ニ拘泥シ輕々速了ノ策ヲ執リ故殺ト判定シタルハ事實ノ理由ヲ付セス擬律ニ錯誤アルヲ以テ破毀ヲ求ムト云ニアリ

對手人溝口太郎吉ハ答辨書ヲ差出サス

大審院ニ於テ專任判事園田弘ノ報告ニ據リ立會檢事林三介ノ意見上被告代言人高橋一勝ノ陳述ヲ聞キ以テ之ヲ審判スルニ

原裁判言渡ニ(前畧)口ヲ極メテ叱責セラレ一時ノ憤怒過度ノ酒氣ニ乘シ忽然殺意ヲ生シタルモ自家ノ刃物ヲ用フレハ未然ニ發露センコトヲ恐レ(中畧)杉山由藏方ニ到リ出刃庖丁ヲ借得テ懷中ニ秘シ家ニ皈リ(中畧)更ニ祭費ノ出金ヲ請求シタルニ當ニ應セサル而已ナラス大ニ憤リテ却テ父ヨリ殺シテ仕舞フツト極言怒立スルヲ以テ(中畧)直ニ秘スル所ノ庖丁ヲ以テ其頭部ヲ亂刺シ云々トアリ此事實ハ則謀殺ノ所爲ナ

祖父母父母ニ對スル罪

リト判定セサルヲ得ス何トナレハ父ヲ殺害スル惡念ハ當初父ヨリ叱責ヲ受ケタル際已ニ決定シ而シ一旦家ヲ立出杉山由藏方ニ到リ詐言ヲ以テ兇器ヲ借り得之ヲ懷中ニ秘シ家ニ皈リタルハ則チ其豫備ニシテ父ノ怒ヲ挑マンカクメ更ニ祭費金ヲ請求シタルハ則チ其着手ノ端緒ニテ殺害ヲ遂ケタルハ犯罪ノ結果ナリ夫レ如是着々之ヲ心ニ謀ラサルハナシ尙一件書類ニ就テ徴スルニ平生父大次カ被告ノ妹キンヲ偏愛シテ被告夫婦へ待遇ノ苛酷ナルノ積怨ト當初叱責セラレタルト共ニ憤懣殺心ヲ生シタリト被告カ豫審庭ノ供出ニ於ルモ明瞭ナレハ敢テ一時偶然ノ憤怒措ク能ハサルニ出テ事玆ニ到リタルニアラサル事實ノ理由アルノミナラス被告カ詐テ該兇器ヲ借り得テ懷中ニ秘シ及ヒ再ヒ父ノ怒ヲ挑ムカ如キハ純然タル謀殺ノ所爲ナルヲ証スルニ足ル最モ著明ナルモノニシテ故殺ニアラサルコトハ毫モ疑ヲ容ル可カラス故ニ原裁判言渡シハ擬律ニ錯誤アル裁判ニシテ本按上告ハ治罪法第

四百十條第十項ニ適當セル原由アルモノトス因テ同法第四百二十九條ニ從ヒ之ヲ破毀シ直ニ判決スル左ノ如シ

溝口太郎 查

右ニ説明スル如シ事實ノ理由及ヒ證據ニ因リ父ヲ謀殺シタル罪ハ明確ナリ之ヲ法律ニ照ラスニ刑法第三百六十二條子孫祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ストアルニ該ル母ヲ誤傷シタル罪ハ同法第七十七條三項ニ罪本重カル可クシテ犯スル知テサル者ハ其重キニ從テ論スルコトヲ得ストアルニ依リ誠七キツテ誤傷シタル罪ト同ク論シ共ニ同法第二百九十八條謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀殺故殺ヲ以テ論ストアリテ同法第二百九十二條塚ヲ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ストアルニ當ルモ同法第一百十三條罪ヲ犯サントシテ已ニ其コトヲ行フト雖トモ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未ダ遂ケサル時ハ已ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二

祖父母父母ニ對スル罪

等ヲ減ストアルニ依リ一等ヲ減シ無期徒刑トナルニ罪俱發スルヲ以テ同法第百條ニ基キ一ノ重キ父ヲ謀殺シタル罪ニ依リ死刑ニ處ズルモノ也

但犯罪ノ用ニ供シタル庖丁ハ同法第四十四條ニ依リ本主へ還給ス大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年十月二十五日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 園田 弘

判事 伴 正 臣 判事 薄井 龍之

判事 小村 壽太郎 書記 香田 能興

〔要領〕(一)兇器ヲ以テ父ヲ殺サント脅迫シタルモノハ舊法ニ在テハ改定律例第二百三十八條ニ該ル然ルチ同第二百四十六條不應爲重キニ依リ以テ新法ニ比照シタルハ擬律ノ錯誤ニ係ルモノトス

(二)新舊法ヲ比照シ新法ノ違警罪ニ該ルモノハ六月ヲ以テ期滿

免除トス

(三)治罪法第二百六十六條ハ被告人一名ニ辨護人一名ヲ用フル

コヲ得ルノ精神ニ外ナラサレヒ之カ制限ヲ揭ケス又事ニ害ナキ以上ハ裁判官ニ於テ二名ノ辨護人ヲ聽可セシモ敢テ不當ト爲スヲ得ス

住所身分職業畧之

神田 善 右衛門

年齡畧之

明治十五年十一月十三日浦和輕罪裁判所ニ於テ右被告人ヨリ事實辨護ノ爲メ代言人二名ヲ撰定シ差出シタル事件ニ付檢事補關義幹カ爲シタル異議ノ申立ヲ判決シ治罪法第二百六十六條ニ其制限ヲ定メカル以上ハ乃チ辨護ヲ重スルノ點ヨリ見ルトキハ二人ヲ撰任スルヲ得

祖父母父母ニ對スル罪

夫トシテ之ヲ抑制スルヲ得サル者トノ言渡ヲ爲シタリ又本案祖父
 母父母ニ對スル被告事件ハ明治十五年十一月十六日同裁判所ニ於テ
 右被告善右衛門カ所爲ハ實父芳右衛門ニ對シ憤懣不平ノ事故アルニ
 リ袖搦ヲ取出シ自宅裏ノ林中ニ於テ突殺スト言ヒナカラ其形様ヲ示
 シ爲メニ恐懼セシメタル事實ト其祖母コノノ頭部ヲ手ヲ以テ毆打シ
 タル事實トヲ證明シ而シテ其所爲ハ俱ニ新法施行前ニ係ルヲ以テ刑
 法第三條末項ニ依リ其兇器ヲ持シテ父ヲ脅迫セシ罪ヲ舊法ニ照セハ
 雜犯律不應爲條不應爲ノ重キ懲役七十日ニ該リ新法ニ於テハ刑法第
 三百二十六條同第三百二十七條同第三百六十三條同第九十九條同第
 七十條同第七十四條ニ照依シ一月二十五日以上十一月七日以下ノ重
 禁錮三圓七十五錢以上三十七圓五十錢以下ノ罰金ニ該ルヲ以テ明治
 十四年第八十一号布告ニ從ヒ單ニ一月二十五日以上七十日以下ノ重
 禁錮ニ處ス可キ者トス其祖母ヲ毆打セシ罪ハ舊法ニ照セハ改定律例

第二百二十八條改正ニ依リ懲役十年新法ニ於テハ刑法第四百二十五
 條第九項ニ依リ三日以上十日以下ノ拘留又ハ壹圓以上壹圓九十五錢
 以下ノ科料ニ該リ飭ホ刑法第三百六十三條ニ從ヒ二等ヲ加フルモ新
 法輕シ依テ刑法第一百一條ニ照シ一ノ重キ刑法第三百二十六條及ヒ第
 百二十七條第三百六十三條ニ依リ重禁錮七十日ニ處ス但明治十五年
 五月十七日言渡ヲ受ケタル重禁錮四十日ノ刑ハ刑法第二百二條ニ照シ
 之ヲ控除スル旨言渡セリ
 原裁判所檢事補關義幹ハ前二個ノ裁判ニ對シ上告ヲ爲シタリ其要旨
 ハ第一凡刑法治罪法中特ニ二人以上或ハ數個ノ交字ヲ掲ケサル者ハ
 渾テ一人一個ニ限レル者ト解釋ス可キヲハ法理ノ當ニ然ルヘキ所ニ
 シテ今之カー一二ヲ例證セシニ刑法第百條以下及ヒ治罪法第四百十六
 條同第四百十九條ノ如キ是レナリ本案被告人カ辨護ノ爲メ二名ノ代
 言人ヲ撰定シタルヲ裁判官ハ一人ニ限ルトノ明文ナキヲ以テ法律ノ註

所ト爲シテ之ヲ認可シタルハ治罪法第四百十條第十一項ニ掲ケヌ
 ル越權ノ處分ナリトス第二被告人カ祖母ヲ毆打シタル所爲ヲ刑法第
 四百二十五條ニ依リ處斷スヘキ者トスレハ違警罪ニ止ルヲ以テ輕罪
 以上ノ刑ニ適用ス可キ刑法第三百六十三條ニ照シ加等スルコトヲ得
 サルノミナラス治罪法第十一條ニ照セハ既ニ期滿免除ヲ經タルニ因
 リ免訴ス可キ者ナルヲ數罪俱發例ニ依リタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリ
 ト思考ス又兇器ヲ携ヘ實父ヲ殺害セント脅迫シタル所爲ニ對シ舊法
 雜犯律不應爲條ヲ適用スト雖トモ是亦擬律錯誤ト謂ハサルヲ得ス如
 何トナレハ改定律例第二百三十八條凡子孫祖父母父母ヲ罵ル者ハ流
 三等ニ處スル律ヲ改メ并ニ懲役三年トアレハナリ夫レ尋常ノ非理汚
 辱ノ言ヲ以テ其所生ヲ誹毀凌辱スル者スヲ如此況ンヤ兇器ヲ以テ殺
 害セント威逼シタルニ於テチヤ是豈罵詈ノ最モ太シキ行爲ニシテ不
 孝ノ極ト言ハサル可ケンヤ宜シク本條ト刑法第三百二十六條以下ト

之比照シ其輕キ新法ニ從テ處分スヘキ者也然ルチ原裁判茲ニ出サル
 ハ俱ニ失當ノ裁判ナルニ付破毀ヲ求ムト謂フニ在リ
 大審院ニ於テ治罪法第四百廿五條ノ定式ヲ履行シ檢事池上三郎ノ意
 見ヲ聽クニ上告第一ノ主眼トスル一名ノ被告人ニシテ二名ノ辯護人
 ヲ用フル能ハス云々及ヒ被告人カ父ニ對スル脅迫罪ハ舊法例第二百
 三十八條ニ比照ス可シトノ論點ハ其理由ナシト雖モ祖母ヲ毆打シタ
 ルノ所爲ハ新法違警罪ニ該ルヲ以テ其刑ヲ加重ス可ラサルノミナラ
 ス既ニ期滿免除ヲ經タルヲ以テ單一罪ニ過キサレハ數罪俱發例ヲ
 適用ス可キ者ニ非ストノ論旨ハ同意ナルニ付其一部ヲ破毀シテ更正
 アラントヲ望ムト辨明セリ仍テ之ヲ審理スルニ
 上告第一ノ趣旨タル一名ノ被告人ニシテ二名ノ辯護人ヲ差出スヲ得
 得ルヤ否ノ論點ニ就テハ治罪法第二百六十六條ニ定メタル所ハ被告
 一名ニ代言人一名ヲ用フルヲ得ルノ精神ニ外ナラサレトカ制限

ヲ搦ケス又事ニ害ナキ以上ハ裁判官ニ於テ其二名ノ辨護人ヲ聽可セ
 シト云フヲ以テ敢テ之ヲ不法トシ上告ノ原由ト爲スヲ得ス其第二
 被告人カ祖母ヲ毆打シタル罪ニ對シ裁判官ニ於テ新法ニ從ヒ刑法第
 四百二十五條違警罪ノ項目ニ當ル者ト判定シナカラテ治罪法第十一條
 ニ定メタル期滿免除ヲ經過セシニ拘ハラス數罪俱發例ヲ用井且輕罪
 以上ニ適用スヘキ刑法第三百六十三條ヲ適用シ本刑ヲ加重シタルハ
 據律錯誤ノ裁判ナリトス又被告人ハ兇器即チ袖搦ヲ携ヘ自宅裏ノ林
 中ニ於テ實父芳右衛門ニ對シ突殺ゾト罵リナカラテ其形様ヲ示シ脅迫
 シタル者ト認定シ而シテ法律適用ニ至テハ舊法改定律例第二百四十
 六條ニ依リ不應爲重キニ問擬ス可キ者ト爲シタリ夫レ舊法ニ於テ不
 孝ノ罪ヲ大ナリトスルハ勿論改定律例第二百三十八條凡子孫祖父母
 父母ヲ罵リ云々流三等ニ處スル律ヲ改メ並ニ懲役三年ト明示アリテ
 乃チ被告人カ行爲ハ父ヲ罵辱スルノ最モ酷キ者ナレハ當サニ本條ト

刑法第三百六十三條トテ比照シ處斷ス可キ者ナリ然ルニ原裁判玆ニ
 出サルハ是亦據律錯誤ノ裁判ナリトス依テ本件上告第一條ハ其理由
 不相立ト雖ニ其第二條祖母及ヒ父ニ對スル罪ノ原裁判ハ治罪法第四
 百十條第十項ノ場合ニ相當スル上告ノ原由アルニ因リ治罪法第四百
 二十九條ニ從ヒ浦和輕罪裁判所カ明治十五年十一月十六日被告神田
 善右衛門ニ言渡シタル裁判ヲ破毀シ大審院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ爲
 スコト左ノ如シ

神田善右衛門

前ニ辨明スル理由ナルニ因リ被告人カ祖母コノノ頭部ヲ手ヲ以テ毆
 打セシハ所犯新法施行前ニ在ルヲ以テ刑法第三條末項ニ依リ新舊ノ
 法ヲ比照シ舊法ニ於テハ改定律例第二百二十八條凡子孫祖父母父母
 ヲ毆テ云々律ヲ改メ毆ツ者ハ懲役十年トアリ新法ニ於テハ刑法第四百
 二十五條第九項ニ人ヲ毆打シ創傷疾病ニ至ラサル者トアルニ該リ其

祖父母父母ニ對スル罪

刑ハ三日以上十日以下ノ拘留又ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス可キ者ナルニ付新法ノ輕ニ從フ可キ者トス而シテ其所爲ハ明治十四年九月中告訴ニ係リタルニ付治罪法第十一條ニ違警罪ノ公訴期滿免除ハ六月トアリテ已ニ期滿免除ヲ經過シタルヲ以テ其罪ヲ論セズ又袖搦ヲ以テ父ヲ罵辱脅迫シタル所爲ハ同シク刑法第三條末項ニ從ヒ新舊ノ法ヲ比照スルニ舊法ニ於テハ改定律例第二百八十八條凡子孫祖父母父母ヲ罵リ云々流三等ニ處スル律ヲ改メ並ニ懲役三年トアルニ該リ新法ニ於テハ刑法第三百二十六條人ヲ殺サント脅迫シ云々一月以上六月以下ノ重禁錮貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス刑法第三百二十七條兇器ヲ持シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フトアルニ因リ刑法第九十九條及第七十條ニ照シ本刑ニ一等ヲ加ヘ一月七日以上七月十五日以下ノ重禁錮貳圓五拾錢以上貳拾五圓以下ノ罰金ニ該ルモ仍ホ刑法第三百六十三條子孫其祖父母父母ニ對シ

毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹謗ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ二等ヲ加フトアルニ因リ一月二十五日以上十一月七日以下ノ重禁錮三圓七拾五錢以上三拾七圓五拾錢以下ノ罰金ニ該ルヲ以テ新法ノ輕キニ從フヘキ者ニ付明治十四年第八十一號布告第二條及ヒ第六條ニ照シ被告人ヲ重禁錮十一月七日ニ處スル者也

但明治十五年五月十七日處斷ヲ經タル重禁錮一月十日ノ刑ハ刑法第二百二條ニ原キ本刑ヲ控除ス可シ又犯罪ノ用ニ供シタル袖搦ハ所有主神田芳右衛門ニ還付ス
大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十七年三月四日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 山根秀介
判事 大塚正男 判事 山本昌行

祖父母父母ニ對スル罪

判事 薄井龍之

書記 上田庸熙

○竊盜ノ罪

(要領) (一) 從犯ナルヤ正犯ナルヤヲ論究スルハ犯罪事實ノ部内ニ在テ
專ラ原裁判官ノ權内ニ在レハ他ヨリ之ヲ動かスヲ得ス

(二) 年齢二十ニ滿タサルモノハ刑法第八十一條ヲ適用シ其罪ヲ
減輕ス可キモノトス

住所身分職業畧之

石橋隣

年齡畧之

全

石山惠勤

全

竊盜被告事件上告ニ付專任判事鳥居斷三ノ報告ニ因リ大審院檢事澄

川拙三ハ尾道輕罪裁判所ノ裁判ハ被告石山惠勤ニ對シテハ相當ナル
モ石橋隣ニ對シ刑法第八十一條ヲ適用セサルハ原裁判其當ヲ得ス檢
事補村田繼述上告ノ趣相當ナリト論辨セリ本案上告人檢事補村田繼
述ハ惠勤カ被告事實ハ從犯ニアラス二人共謀シ現ニ罪ヲ犯シタル者
ナレハ正犯者ナリト論告スト雖モ其從犯ナルヤ正犯ナルヤヲ論究ス
ルハ犯罪事實ノ部内ニアツテ專ラ原裁判所ノ權内ナレハ其認定セシ
事實上ニ齟齬ナケレハ破毀ヲ用フヘキ限リニアラストス然リ而シテ
隣カ被告事實ニ對シテハ檢察官ノ論告ノ如ク年齢二十ニ滿タサレハ
刑法第八十一條ヲ適用シ減輕ノ處分ニ及フヘキニ原裁判ノ玆ニ出テ
サルハ擬律ニ錯誤アル不當ノ裁判ナルニ因リ破毀セサルヲ得サルモ
ノトス

右ノ理由ニ基キ明治十五年一月十六日尾道輕罪裁判所カ石橋隣石山
惠勤ニ宣告シタル裁判ノ中治罪法第四百三十一條ニ依リ石橋隣ノ本

竊盜ノ罪

罪ノ部分ヲ破毀シ大審院ニ於テ其一部ヲ裁判スル左ノ如シ

石橋隣

前ニ辨明スル如クナルニ依リ刑法第八十一條罪ヲ犯スル者ニ滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ストアルニ依リ隣カ本刑重禁錮二月以上四年以下ヨリ一等ヲ減シ一月十五日以上三年以下トナルニ依リ重禁錮一月十五日ニ處スル者也
大審院ニ於テ檢事澄川拙三立會宣告ス

明治十五年八月一日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 鳥居斷三

判事 兵頭正慈 判事 土師經典

判事 木付義路 書記 河波秘雄

〔要領〕事實ノ認定ニ對シ不服ヲ唱フルモ上告ノ理由ト爲ステ得ス

刑期ノ範圍内ニ於テハ共犯ト雖モ所犯ノ情狀ニ由リ其刑期ヲ區

別スルハ裁判官ノ權内ニ在ルモノトス

住所身分職業略之

織田安太郎

年齡略之

同

前田太三郎

同

右兩名カ被告事件ニ付明治十五年三月十一日京都重罪裁判所ニ於テ被告兩名共謀シテ明治十五年一月十五日各自兇器ヲ携帶シ角道元造居宅ニ忍入り金員物品ヲ竊取シタル者ト認定シ刑法第三百七十條同第二十二條第二項ニ照シ安太郎ハ輕懲役七年太三郎ハ輕懲役六年ニ處スト旨渡シタル裁判ニ對シ被告兩名ハ右ノ裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲シテ其要旨ハ安太郎ハ角道元造カ屋内ニ忍入り金品竊取

竊盜ノ罪

シタレハ脇差ヲ携帯セシコトナシ太三郎ハ元造方職工場迄立入り安太郎カ行盗ノ幫助ヲナシタルモ屋内ニ侵入シ金品ヲ自己ニ盜取シタルニアラサレハ安太郎ハ尋常ノ竊盜犯ニシテ太三郎ハ其從犯者ナリ然ルニ原裁判所ハ實際ノ事實ニ相反シタル判定ヲ下シ共ニ持兇器竊盜犯ナリト認定セラレタルハ只ニ推測上ノニシテ一ノ證據ニ依照ナキハ治罪法ノ成文ニ悖リ不當ナリ故ニ被告共ノ所爲ハ刑法第三百六十六條ニ該ル罪ニシテ太三郎ハ同第九條ニ照シ仍ホ本刑ヨリ減輕アル可キニ刑法第三百七十條ニ問擬セラレシハ擬律ノ錯誤ニ出テタル者ナリト思考ス假ニ三百七十條ニ適當スル犯罪トスルモ兩名共刑期ヲ同セラルヘキハ當然ナルニ安太郎ハ七年太三郎ハ六年ト期限ニ區別アルハ即犯情ニ輕重アル勿論ニシテ太三郎ハ從犯ナリト判官モ認メラレシナラン果シテ然ラハ其理由ヲ付セラル可キニ之ヲ明示ナキハ事實ノ理由ヲ付セサル不當ノ裁判ナリト云フニアリ茲ニ大審院刑

事公庭ニ於テ專任判事ノ報告ニ由リ上告代言人田村訥カ上告旨趣ヲ擴張スルノ陳述及ヒ本院檢事如納久宣ノ意見ヲ聞キ判決スル左ノ如シ

治罪法第四百十六條第二項ニ被告人ノ自狀官吏ノ檢証調書證據物件証人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ストアリテ證據物件及ヒ各証人ノ陳述等ヲ取捨採擇シ犯罪ノ事實ヲ推究シテ之ヲ認定スルハ原裁判官ノ特權ナリ茲ニ本件ヲ審按スルニ宣告書ニ明記アル如ク相當官吏ノ各調書證據物件被告兩名及ヒ辨護人ノ陳述等ニ依リ其事實ヲ判定セシモノナレハ治罪法ニ背戾シタル廉アルコトナシ然レハ則其事實ノ判定ニ對シ不服ヲ唱ヘ上告ヲ爲スモ治罪法第四百十條ノ各項ニ明示アル以外ノ事項ハ上告ヲ爲スヲ得サルモノナリ而テ其確認シタル犯罪ノ事實ニ付テハ刑法第三百七十條ヲ適用シタルハ至當ニシテ擬律ニ瑕瑾ナシ又刑法第二十二條第二項ニ重懲役

九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ストアヤテ該範圍内ニ於テハ共犯ト雖モ所犯ノ情狀ニ由リ其刑期ヲ區別スルハ裁判官ノ權内ニシテ其情從犯ノ減等スルモノト同一視ス可キモノニアラザルナリ故ニ原裁判ハ適法ノ裁判ニシテ破綻ス可キ理由ナシトス因テ治罪法第四百二十七條ニ依リ上告ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ檢事加藤久宣立會宣告ス

明治十五年十一月廿七日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 土師經典

判事 兵頭正慈 全 小村壽太郎

全 木付義臣 書記 松本正利

〔要領〕新舊法ヲ比照スル場合ニ於テ舊法ノ贓罪ニ係ルモノハ之ヲ節次合算ス可キモノナリ然ルニ所犯三次ニ亘ル竊盜罪ニ付キ舊法ノ

刑期ヲ定ムルニ其合計ノ贓數ヲ示サ、ルハ事實ノ理由ヲ明示セサルモノトス

住所身分職業畧之

永 倉 ミ ナ

年齡畧之

右「ミナ」カ被告事件ニ對シ明治十五年四月廿日東京輕罪裁判所ニ於テ被告「ミナ」ハ明治十三年二月七日及ヒ九月廿七日同區平野町北村善吉方ニテ女帶壹筋單衣一枚ヲ兩度ニ竊取シ仍ホ明治十四年六月十日同區万年町二丁目須田スキ方ニテ駒下駄一足竊取シタルモノトシ舊法ニ在テハ二罪俱發以重論條ニ照シ一ノ重キ賊盜律竊盜條贓金一圓以下懲役五十日ニ相當シ新法ニ在テハ第三百六十六條二月以上四年以下ノ重禁錮ニ相當スルヲ以テ第三條第二項ニ從ヒ懲役五十日ニ處スルトノ言渡ヲ爲シタリ檢事補山中幸義カ上告ノ要旨ハ被告「ミナ」カ三

竊盜ノ罪

次ノ竊盜犯ハ凡テ新法實施以前ニ係リ其贓數ハ合金壹圓七十五錢ナルヲ以テ舊法ハ懲役六十日ニ該リ新法ハ二月以上四年以下ノ重禁錮六月ノ監視ニ該レリ因テ明治十四年第八十一号布告ニ照シ重禁錮二月ニ處セサルヘカラス然ルニ原裁判所ハ舊法ノ二罪俱發例ニ依リ前記ノ言渡ヲ爲シタルハ事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ附セサルノヨナラス擬律錯誤ノ甚クシキ者ナリト云フニ在リ本院檢事堀田正忠ニ於テハ原裁判ノ舊法二罪俱發ニ依リタルハ尤モ不當ナリ然ルニ舊法ノ刑期ヲ定ムルハ各次ノ贓數ヲ合算セサル可カラス之ヲ合算スルハ事實ノ取調ニ屬スルヲ以テ原裁判ヲ破毀ノ上他ノ裁判所ニ送付アラントシ冀望スルトノ陳述ヲ爲シタリ依テ判決スルト左ノ如ク

抑モ舊法ノ贓罪ニ係ルモノハ之ヲ節次合算スヘキハ新律綱領七贓例圖及ヒ名例律二罪俱發以重論條等ノ明示スル所ニシテ被告カ竊盜ノ如キ所犯三次ニ亘ルト雖モ其贓數ハ決シテ各別ニ之ヲ算スヘキモノ

ニ非ス今之ニ反シ合計ノ贓數ヲ示サ、ルハ素ヨリ法律適用ノ錯誤ニ出ルモ到底事實ノ理由ヲ付セサル不當ノ裁判ナリトス然ルニ其一件書類中評價人ノ評價書有之ニ付實際ニ在テハ其事實ヲ判定シ得ヘキモノ、如シト雖モ之ヲ判定スルハ承審官ノ特權ニシテ本院ノ職權上取テ爲シ得サルノ事タルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ依リ原裁判言渡ヲ破毀シ横濱輕罪裁判所ニ移シ更ニ審判セシムルモノ也

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立會宣告ス

明治十五年十二月廿二日

裁判長判事 岡内 重俊 專任判事 木付 義路

判事 大塚 正男 判事 兵頭 正慈

判事 小村 壽太郎 書記 味岡 禮賢

〔要領〕甲官有地ノ土ヲ取リ乙官有地ノ堤防ニ用ヒタル如キハ固ヨリ竊盜ト名ク可キモノニ非サレハ刑法上之ヲ罰スルヲ得ス

住所身分職業畧之

石村増五郎

年齡畧之

同

石村嘉三

同

堤防修繕ノ爲メ官有地ノ土ヲ竊取セシ被告事件ニ付明治十五年四月十日岡山輕罪裁判所ニ於テ右兩名ニ對シ刑法第百五條同第三百七十三條第三百七十二條同第三百七十六條同第八十九條同第九十條ニ照依シ各重禁錮十五日監視六月ニ處斷セリ被告石村増五郎外一名ニ於テハ該裁判ニ對シ各上告爲シタル旨趣ハ官林地字中池ノ土ヲ掘取リ安甘村字奥地ノ堤防修繕ノ用ニ充タルハ舊藩政度ヨリノ慣習ナリ且奥地堤敷ハ中池ト等シク官有地ナレハ到底甲官有地ノ土ヲ取リ乙官

有地ノ堤防ニ用ヒタルマテニテ決シテ罪トナル可キ所爲ニ非ス加之
上告人カ掘取リタル土ハ產物或ハ礦物ト稱ス可キ者ニ非サレハ刑法
第三百七十三條ニ該ル罪ニ非スト云ニ在リ大審院檢事澄川拙三ニ於
テモ本件被告人ノ所爲タルヤ公益ノ爲メニシテ私利ヲ圖リタル者ニ
非サルヲ明ナリ蓋シ刑法第三百六十六條以下ノ竊盜罪ハ一已ノ私利
ヲ圖リテ他人ノ所有權ヲ侵害シタル者ヲ罰スル正條ニシテ本案ノ如
キ公益ヲ謀ルカ爲メニ出テタル場合ニ適用ス可キ者ニ非ス故ニ刑法
ニ正條ナキヲ以テ罰スルヲ得サル所爲ナレハ治罪法第四百十條第十
項擬律ノ錯誤アル者ト思料スルニ因リ破毀シテ直チニ相當ノ裁判ア
ラントテ冀望ストノ意見ヲ陳述セリ仍テ之ヲ審按ルニ凡ソ竊取トハ
他人ノ所有物ヲ不正ニ引取リ己ノ所有ト爲スノ義ニシテ本件被告
人カ所爲ハ原裁判言渡書ニ載スルカ如ク居村奥地堤防破損ノ折柄該
地係リノ者一同協議ノ上修繕ノ爲メ同村字中池官有地ノ土一坪餘ヲ

竊盜ノ罪

人夫ニ堀取ラセ云々所犯一己ノ私慾ノミニ非スシテ多衆ノ爲メニ爲
 セシ者トアリテ毫モ不正ノ所爲ヲ以テ自己ノ所有ト爲シタルニ非サ
 ルヲ明カナリ上告ニ所謂ル甲官有地ノ物ヲ將テ乙官有地ニ移轉シタ
 ル迄ニシテ敢テ竊盜ト名ツク可キ者ニ非ス其斷リナシ他所ノ土ヲ堀
 取リタルハ不條理ト云フニ止マル者ナリ故ニ本院檢事カ刑法ニ正條
 ナキヲ以テ罰スルヲ得サル所爲ナリト云フハ法ノ原則ニシテ允當ノ
 論旨ナリトス仍テ治罪法第四百十條十項ニ所謂ル擬律ノ錯誤ニ係ル
 不法ノ裁判ナレハ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ大審
 院ニ於テ直チニ裁判スルヲ左ノ如シ

石村 增五郎
 石村 嘉三

右ノ理由ナルニ因リ被告人カ所爲ハ刑法第二條ニ依リ罰ス可キ正條
 ナキヲ以テ各無罪ヲ言渡ス者ナリ

大審院ニ於テ檢事澤川拙三立會宣告ス

明治十五年十二月廿七日

裁判長判事 中島 錫胤 專任判事 山根 秀介

判事 關 義 臣 判事 鳥居 尊三

判事 昌谷 千里 書記 澤野 潛藏

要領竊盜ヲ爲スノ目的ヲ以テコモ垣ヲ破毀シ尙ホ壁ヲ切破リ居ル際
 事主ニ覺知セラレタル如キハ已ニ其事ヲ行ヒ未ダ遂ケサレ得
 ンニ豫備ヲ所爲トナスヲ得ス

住所身分職業露之

田 中 由 藏

年齡露之

右由藏カ被告事件ニ付明治十五年七月二十二日高松輕罪裁判所ニ於
 テ被告ハ曩キニ重禁錮二月監視六月ノ處斷ヲ受ケタルモ仍ホ盜監ヲ

特盜ノ罪

四三五

爲サントシテ携ヘタル鑿ヲ以テ中富觀慶方大手門ノ横ヨリ忍入壁ヲ破壊セントスルニ容易ニ破壊セサルヨリ傍ノコモ垣ヲ破リ居室裏ヘ立入りシモ戸締ノ堅固ナル故ニ最初破壊セントセシ壁ヲ切破リ居ル事主ニ覺知セラシ右鑿ヲ捨置キ逃走ノ途中捕ニ就キタルハ被告ノ自狀司法警察官ノ作りタル調書被害者ノ告訴證據物件等ニ依リ事實明白ナルヲ以テ其所爲ハ刑法第三百六十八條同第一百十二條同第九十二條同第八十一條同第三百七十六條ニ依リ重禁錮二月二十三日監視六月ニ付スト言渡タル裁判ヲ不法ナリトシ檢事補大井信本カ上告ヲ爲スノ要旨ハ未ダ其事ヲ謀リ又豫備ヲナスニ止マルモノハ其事ヲ行フタリト云フヘカラス即チ本案被告カ所爲ハ單ニ人ノ住居ヲ侵シタル罪ニ過キサルモノナルニ變シ易ク動クヘキ意思ノミニ拘泥シテ前言渡ヲ爲シタルハ不法ノ裁判ナリト云フニアリ因テ專任判事ノ報告立會檢事ノ意見ヲ聽キ判決スル左ノ如シ

本件被告カ竊盜ヲ爲サントシテコモ垣ヲ破毀シ尙ホ壁ヲ切破リ居ル際事主ニ覺知セラレタルコトハ原訴訟書類ヲ監査スルニモ判文ニ示セル如ク事實證據明白ナリトス而シテ右所爲ハ竊盜ノ事ヲ行ヒ未ダ遂ケサルモノナレハ原裁判所ニ於テ即チ刑法第三百六十八條同第一百十二條等ヲ適用セシハ共ニ不相當ノ裁判ニアラサレハ到底上告ノ旨趣立サルモノトス因テ治罪法第四百二十七條ニ從ヒ該上告ハ之ヲ棄却スル者也

於大審院檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年八月七日

裁判長判事 中島盛有 專任判事 石井忠恭
 判事 兵頭正慈 判事 土師經典
 判事 高木勤 書記 伊藤珠樹

〔要領〕檢張棒ヲ以テ戸締シタル雨戸ヲ押外シ忍入り竊盜ヲ爲シタルモ

竊盜ノ罪

刑法第三百六十八條ヲ適用ス可キモノトス
住所身分職業略之

黒沼龍次郎

年齢畧之

有龍次郎ガ窃盜被告事件ニ付明治十五年八月十九日朽木輕罪裁判所ニ於テ被告ハ明治十五年七月七日午後十二時頃八下田仙吉所有機織場ノ雨戸ヲ外シ忍入り該場ニ織掛ケアリタル糸入木綿縞反物ヲ切斷竊取シタルモノトシ刑法第三百六十六條第三百七十六條ニ照シ三月ノ重禁錮ニ處シ六月ノ監視ニ付ス旨旨言渡アル裁判ニ對シ同裁判所檢事補牛込喜一カ上告ヲ爲スノ要旨ハ被告カ所爲ハ機織場雨戸ノ栓張棒ヲ以テ固鎖シアルヲ押外シ忍入り織掛ケアル反物ヲ竊取シタルモノナレハ刑法第三百六十八條第三百六十七條第三百七十六條ヲ適用ス可キモノナリ然ルテ原裁判此ニ出ツルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ

在リ依テ本院檢事加納久宣ノ意見ヲ聽キ之ヲ審按スルニ本案原裁判所カ判定スル所ノ事實ニ對シテハ刑法第三百六十八條ヲ適用ス可キモノトス何トナレハ該條ノ所謂鎖鑰トハ其鎖具ノ金屬又ハ木製等タルニ拘ハラズ都ヘテ他ノ排入ヲ妨拒ス可キ方法ヲ以テ戸締リヲ爲シアルモノ、謂ナレハナリ今公判始末書ヲ檢スルニ栓張棒ヲ以テ戸締リヲ爲シアリタルハ被告ノ自供スル所ニシテ原裁判官ニ於テモ既に之ヲ採取シナカラ獨リ刑ノ適用此ニ出サルハ便ナ擬律ノ錯誤ナリトス依テ原裁判ヲ破毀シ治罪法第四百二十九條ノ規則ニ照シ本院ニ於テ直ニ裁判スル左ノ如シ

黒沼龍次郎

右ノ理由ナルヲ以テ刑法第三百六十八條第三百六十七條第三百七十六條ニ照シ六月ノ重禁錮ニ處シ八月ノ監視ニ附スル者也
六審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

窃盜ノ罪

明治十六年八月九日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 兵頭正慈

判事 中島盛有 判事 土師經典

判事 園田弘 書記 岩田鍊

〔要領〕(一)原裁判官カ認定シタル事實ヲ并疏シテ不服ヲ訴フルモ上告

ノ理由ト爲スヲ得ス

(二)竊取シタル物品ヲ手ニ入レ盜所ヲ逃去ル途中捕押ヘラレタ

ル如キハ既ニ竊盜ノ目的ヲ遂ケタルヲ明瞭ナリ

住所身分職業畧之

鵜飼嘉七

年齡畧之

竊盜犯罪被告事件ニ付明治十五年八月八日名古屋輕罪裁判所ニ於テ右被告人ノ所爲ハ明治十五年七月十二日夜名古屋區常盤町席貸茶屋

星野幸七方ニ於テ駒下太一足ヲ竊取シ逃走スルヲ直ニ捕押ヘラレ其目的ヲ遂ケサル者トシ刑法第三百六十六條同第三百七十五條同第一百十二條ニ依リ再犯ニ付刑法第九十二條ニ照シ重禁錮二月ニ處シ刑法第三百七十六條ニ從ヒ監視一年ニ付スト言渡シタリ
被告鵜飼嘉七ハ之ヲ不當トシ上告ヲ爲シタリ其趣旨ハ自分用事有之
行步途中女紅場横手ニテ突然巡查ニ捕押ヘラレ石原タワ方ニ於テ下
駄一足竊取致シタルヘント訊問セラレタレモ固ヨリ覺ヘ無之ニ付其
旨相答ヘ且証人石原タツニ於テモ確カナル証據ハ無之ト申立ルニ原
裁判所カ竊盜犯ト爲シ處斷シタルハ不服ナリト謂フニ在リ
對手人檢事補青木素カ答辨ノ要領ハ被告人ノ所爲ハ現場ニ於テ捕押
ヘタル巡查ノ告發調書其他証人ノ手續書ニ因リ犯罪ノ証據著明ニシ
テ原裁判相當ナル旨開陳セリ
大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ依リ檢事加納久宣ノ意見ヲ聽クニ上

竊盜ノ罪

告ノ趣旨ハ事實ノ論點ニ過キサルヲ以テ辨明ヲ要セスト雖原裁判ハ擬律ノ錯誤アルヲ以テ茲ニ附帶ノ上告ヲ爲サント欲ス其趣旨ハ凡竊盜犯ノ未遂ト已遂トヲ判別スルハ乃チ其目的ノ物件ヲ己レノ手中ニ入レタルト否トニ因リ之ヲ定メサルヘカラス本案被告人ノ所爲ノ如キハ既ニ其物件ヲ手ニ入レ占得シタルノ事實明瞭ナル者ナレハ竊盜已遂ヲ以テ處斷セサル可ラス然ルニ原裁判官ハ被害者ノ追跡ニ因リ物件ヲ取還セラレタルヲ以テ未タ其目的ヲ遂ケサル者ト誤見シ未遂犯罪ノ例ニ因リ處斷セシ者ノ如シ故ニ不法ナル原裁判ヲ破毀シ更ニ相當ノ裁判アラント望ムト陳辨セリ茲ニ之ヲ檢案スルニ

被告鶴飼嘉七カ上告ノ論旨ハ竊盜ヲ爲シタルヲナシト云フノ事實ヲ辨疏シテ原裁判ニ不服ヲ訴フルニ外ナラサレハ固ヨリ上告ノ理由不相立者トス而シテ被告人ノ所爲ハ竊盜未遂ナリヤ已遂ナリヤノ點ハ已ニ物品ヲ手ニ入ル、ノミナラス盜所ヲ逃走シタルヲ以テ其已遂タ

ルヲ言テ候ス然ルニ原裁判官ハ被告人ノ所爲タル星野幸七方ニ於テ駟下駄一足ヲ竊取シ逃走スルヲ直ニ捕押ヘラレタル者ト事實ヲ証明シナカラ竊盜未遂犯ナリト斷定シタルハ擬律錯誤ノ裁判ニシテ附帶上告ノ趣旨ヲ允當ナリトス依テ治罪法第四百二十九條ニ照シ原裁判ヲ破毀シ大審院ニ於テ直ニ裁判スルヲ左ノ如シ

鶴 飼 嘉 七

前ニ辨明スル如クナルヲ以テ被告人ノ所爲ハ竊盜已遂犯ナリト判定ス依テ刑法第三百六十六條ニ依リ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ刑法第三百七十六條ニ從ヒ六月以上二年以下ノ監視ニ付スヘキ處再犯ニ付刑法第九十二條ニ照シ本刑ニ一等ヲ加ヘ二月十五日以上五年以下ノ重禁錮ニ該ルヲ以テ被告人ヲ重禁錮二月十五日ニ處シ監視一年ニ付スル者也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

竊盜ノ罪

明治十六年八月廿五日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 山根 秀介

判事伴 正 臣 判事 高木 勤

判事 黒岩 直方 書記 津田 重照

〔要領〕共有山ニ立入り林間散亂セシ落葉ヲ竊取セントセシ際他人ニ見

答メラレ其所業ヲ遂ケサルモノハ刑法ニ問フ可キ正條ナキヲ以テ無罪トス

住所身分職業畧之

森 子ノ

年齢略之

右森「子」カ竊盜被告事件ニ對シ明治十五年二月二十三日彦根輕罪裁判所ニ於テ被告ハ長谷川「スチ」兵々伊香郡田邊村共有山ニ立入り落葉ヲ竊取セントシテ未タ其所業ヲ遂ケサル科刑法第三百七十三條同第

三百七十二條ニ依リ重禁錮一月以上一年以下ニ該ル處未タ其所業ヲ遂ケサルヲ以テ同第三百七十五條同第一百十二條ニ照シ二等ヲ減シ十六歳未満ニシテ是非ヲ辨別シタルヲ以テ同第八十條ニ照シ又二等ヲ減シ同第七十條同第七十一條ニ照シ七日ノ拘留ニ處スト言渡シタル確定裁判ニ對シ本院檢事長渡邊驥ハ明治十六年十月二十五日治罪法第四百三十五條ニ從ヒ非常上告ヲ爲シタリ該要旨タルヤ本院ニ於テ明治十五年十月十一日被告長谷川「スチ」カ共有山ニ立入り落葉ヲ竊取セントシテ捕押ヘラレタル所爲ハ產物ヲ竊取スルノ類ニ非サレハ刑法ニ問フヘキ正條ナシトシテ原裁判ヲ破毀シ更ニ無罪放免ノ言渡ヲ爲シタリ然レハ共犯森「子」カ所爲タル右「スチ」ト同一ノ事件ナレハ「スチ」ノ所爲ニシテ果シテ法律上罰スヘキナクハ則チ「子」ニ於テハ法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ナルヲ論テ俟タスト云フニ在リ茲ニ大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ據リ立會檢事ノ

竊盜罪

意見ヲ聽キ之ヲ審接スルニ被告ハ地上ニ散亂セル落葉掻集竊取セシトセシ者ニシテ竹木礦物其他ノ產物ト云フヘキニ非ス又他人ノ積置タル者ニ非ス又出入ヲ禁止シタル場所ニ非サレハ被告ガ該所爲ハ刑法第二百七十三條ノ支配スル所ニ非ス其他現ニ刑法問フヘキノ正條ナキナリ然ルチ原裁判所カ右第三百七十三條其他ニ問擬シ拘留ニ處シタルハ擬律錯誤ノ裁判ニシテ破毀ノ原由アル者トス因テ治罪法第四百二十九條ニ據リ明治十五年二月廿三日彦根輕罪裁判所ニ於テ森「チノ」ニ言渡シタル裁判ヲ破毀シ直テニ裁判スルコト左ノ如シ

被告人森「チノ」カ田邊村共有山ニ立入り林間ニ散亂セシ落葉ヲ竊取セシトセシ際山岡吉右工門等ニ見咎メラレ其所業ヲ遂ケサルノ所爲ハ刑法ニ問フヘキ正條ナキヲ以テ無罪赦免ス

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年十一月十三日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 中島盛有

判事 伴正臣 同 土師經典

同 薄井龍之 書記 清原真弓

〔要領〕刑法第三百七十條ニ所謂兇器トハ刀劍銃鎗等ノ如キ武器ヲ總稱スルモノニシテ刀劍ノ如キハ其把柄等ノ外飾有無ニ論ナシ又刃尖ノ稍缺鈍ナルニモセユ之ヲ携帶シテ竊盜ヲ爲シタルモノハ本條ノ支配ス可キモノトス

住所身分職業畧之

安田鐵之助

年齡畧之

右鐵之助カ竊盜被告事件ニ係ル豫審終結ノ故障ニ付明治十五年十月二十八日東京輕罪裁判所會議局ニ於テ豫審判事カ被告ニ對シ持兇器竊盜事件遂豫審處云々中略明治十五年八月二日兼テ所有ノ古短刀ヲ

竊盜ノ罪

懷中シ日本橋區濱町二丁目十一番地湯屋渡世七海喜太郎方板塙ヲ越
 へ兩戸ヲ明ケ忍入二階ニ有之同家雇女川上ヨシ所有ノ金六錢衣類三
 枚ヲ盜取タル事實ハ被告カ自白植村常吉外二名ノ始末書贓品買取
 ル川名新六ノ始末書巡查桐原彦吉ノ告發書等ニ依リ證據充分ナリト
 シ而シテ其短刀ハ刀身ノミニシテ刃及ヒ鋒鈍且缺ケ僅ニ劍体ヲ存スル
 モ兇器ノ性質ヲ具有セスト爲シ刑法第三百六十六條第三百六十八條
 第三百六十七條ニ該當スヘキモノナルニ依リ東京輕罪裁判所へ移ス
 トノ終結言渡ハ相當ナルヲ以テ之ヲ認可ストノ判決ニ對シ同裁判所
 檢事補菊池武夫カ上告ヲ爲シタル要旨ハ被告カ所爲ハ刑法第三百七
 十條ニ該ル重罪ナルニ原會議局ハ被告カ攜帶セシ短刀ノ刃尖ノ缺損又
 ハ把柄ナキ等外部裝飾有無如何ニ依テ兇器トセサルノ理由ヲ以テ之
 ヲ刑法第三百六十八條第三百六十七條ニ該當スヘキモノトシ東京輕
 罪裁判所へ移ストノ管轄違ナル豫審終結言渡ヲ認可シタルハ不當ナ

ヲト云フニ在リ茲ニ大審院ニ於テ專任判事ノ報告及ヒ立會檢事ノ意
 見ヲ聽キ之ヲ審按スルニ刑法第三百七十條兇器ヲ攜帶シテ人ノ住居
 シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ストアル其兇器ト
 ハ刀劍銃鎗等ノ如キ武器ヲ總稱スルモノニシテ刀劍ノ如キハ把柄等ノ
 外飾有無ニ論ナク又刃尖ノ稍缺鈍アルニセヨ之ヲ攜帶シテ人家ニ入
 リ竊盜ヲ爲シタル者ハ本條ノ支配スヘキモノナリ本件被告カ犯罪ノ
 事實ハ短刀ヲ懷中シ七海喜太郎二階へ忍入金品ヲ竊取シタルハ豫
 審判事モ之ヲ認ムル所ニシテ即チ刑法第三百七十條ニ該ル重罪ナル
 ハ勿論ナリ況ヤ其證據品タル短刀ヲ檢審スルニ刀尖少シク缺ケ把柄
 ハ之レナキモ歷然劍体ヲ存シ殺傷ノ用ニ供スルニ足ルニ於テチャ然
 ルニ原會議局ハ豫審判事カ之ヲ東京輕罪裁判所へ移ストノ管轄違ナ
 ル言渡ヲ認可シタルハ不當ノ判決ナリトス因テ治罪法第四百三十一
 條ニ則リ原判決ノ管轄違ノ一部ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ言渡ヲ爲ス

左ノ如シ

安田鉄之助

右ノ理由ナルヲ以テ被告犯罪ノ事實及証據物件ハ原判官カ認メタル所ニ依リ東京重罪裁判所へ移スモノ也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年十一月十五日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 土師經典

判事 中島盛有 判事 鳥居斷三

判事 上山惟清 書記 味岡禮質

〔要領〕(一)一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ之カ判決ヲ爲スニ

當リ前科ノ有無ヲ取調ヘスシテ後發ノ罪ニ刑ヲ科シタルハ擬

律ノ錯誤ニシテ且相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタルモノトス

(二)兩席裁判ノアリタル場合ニ於テ故障ニ先チ上告ヲ爲スハ法

律ノ許サ、ル所ナリ

住所身分職業畧之

山崎治平

年齡畧之

山林盜伐被告事件ニ付明治十六年九月三日大津輕罪裁判所産根支廳

ニ於テ右被告人カ明治十四年中ニ三次明治十五年四月ニ一次各地山

林ニ於テ松杉檜等ヲ竊取シタル所爲ヲ審判シ明治十四年中ノ犯罪ハ

刑法第三條末項ニ依リ新舊ノ法ヲ比照シ明治十五年中ノ犯罪ハ單

ニ新法ニ從ヒ數罪俱發スルヲ以テ刑法第百條及ヒ明治十四年第八十

一號布告ニ照シ一ノ重キニ從ヒ刑法第三百七十三條同第三百七十六

條ヲ適用シ重禁錮二月十日監視八月ニ處ストノ兩席裁判ヲ爲シタリ

被告山崎治平ハ該裁判ニ對シ上告ヲ爲シタルノ趣旨ハ本件第一乃至

第四ノ犯罪ハ相違ナシト雖モ其後明治十六年一月廿五日官林ニ於テ

竊盜ノ罪

松木盜伐シタル所爲ニ付明治十六年三月七日同廳ニ於テ重禁錮一月十五日監視六月ノ處斷ヲ受己ニ執行相濟タリ然レハ這回ノ裁判ハ刑法第百條同第百二條ヲ適用シ處斷アル可キ者ナルヲ單ニ刑法第三百七十三條同第三百七十六條ヲ適施セラレタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリト論辨セリ

對手人檢事補吉川雅都カ開陳ノ要旨ハ被告人ニ於テ若シ原裁判ニ對シ上訴セントスル時ハ宜ク治罪法第三百五十六條一項以下ノ制限ニ從ヒ故障ヲ爲サ、ル可ラス然ルニ其手續ヲ爲サスシテ裁判確定ノ後チ上告ノ申立ヲ爲シ且其申立ハ期限後ニ係レハ旁該上告ハ成立サル者ト思考スルニ因リ其趣意書ニ對シテハ答辨ヲ爲サスト謂フニ在リ大審院檢事長渡邊驥ハ治罪法第四百三十五條ノ規則ニ從ヒ非常上告ヲ爲ノ曰被告人ハ曩ニ大津輕罪裁判所彦根支廳ニ於テ明治十六年一月廿五日官山ニ立入り松樹ヲ盜伐シタルノ罪アリトシ刑法第三百七

十三條同第三百七十二條同第三百七十六條ニ依リ重禁錮一月十五日監視六月ノ處斷ヲ爲シタリ然ルニ其後ニ至リ餘罪即チ明治十四年及ヒ明治十五年中數次同一ノ罪ヲ犯セシヨ發覺シタルニ因リ同廳ニ於テ之ヲ審理シ其承審官ノ異ナルヨリ前判アリタルヲ知ラヌシテ遂ニ新舊ノ法ヲ比照シ一ニ從ヒ刑法第三百七十三條同第三百七十六條ヲ適用シ重禁錮二月十日監視八月ノ刑ヲ閉廬ノ儘言渡シタリキ而シ其前判後判共ニ定期内上訴者ナクシテ確定シタルヲ以テ被告人ハ其兩判ノ刑ヲ受ケサルヲ得サルノ場合ニ遭際ス然レハ刑法第百二條ニ一罪前ニ發シ己ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ストアレハ其重キ一罪ニ從テ處刑シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ除棄ス可キト明瞭ナリトス然レハ則原裁判所ニ於テ其餘罪ノ後判ヲ爲スニ當リテハ必ス前判ノ有無ヲ調査シ果シテ其前判アラハ刑法第

百二條ヲ適用シ相當ノ處斷ヲ爲ス可キヲ無論タルニ該審理技ニ出サ
 ルカ爲メ前後兩判ノ刑ニ處セサルヲ得サルノ不法ヲ來シタルハ即チ
 擬律錯誤ニシテ法律上相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡セシモノト論セサ
 ル可ラス依テ後判ノ言渡ヲ破毀シ更ニ正當ノ裁判ヲ求ムト茲ニ治罪
 法第四百二十五條ノ規則ヲ履行シ之ヲ審案スルニ被告山崎治平カ上
 告ノ申立ヲ爲シタルハ明治十六年九月廿日ニシテ本件關席裁判言渡
 書ノ送達ヲ受ケタルハ明治十六年九月五日ニ在リ此場合上訴ヲ爲サ
 ント欲セハ宜ク治罪法第三百五十六條第一項以下ノ規則ニ從ヒ其言
 渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲サ、ルヘカラス然ルニ其
 之ヲ爲サス裁判確定ノ後ニ至リ突然上告ノ申立ヲ爲シタルノミナラ
 ス其故障ニ先チ上告ヲ爲スコトハ法律ノ許サ、ル所ニシテ到底上告ノ
 成立ヲサル者ニ付其趣意書ノ當否ニ拘ハラズ之ヲ棄却スル者トス而
 シテ本院檢事長渡邊驥カ爲シタル非常上告ノ趣意ハ允當ニシテ破毀

ノ原由アル者トス抑被告人カ前發ノ罪即チ明治十六年一月廿五日官
 林ニ於テ松木一本盜伐シタル所爲ヲ明治十六年三月七日大津輕罪裁
 判所彥根支廳ニ於テ刑法第三百七十三條同第三百七十六條ヲ適用シ
 重禁錮一月十五日監視六月ニ處シタル者ナレハ後發ノ罪即チ明治十四
 年五月ヨリ明治十五年四月迄ノ間四次各山林ニ於テ樹木ヲ竊取シタ
 ル所爲ヲ明治十六年九月三日ニ至リ處斷ヲ爲スニ當リテハ前科ノ有
 無ヲ調査シ本件ノ如キ一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シタ
 ル場合ハ刑法第二百二條ニ照シ宜ク前後ノ刑ヲ較量通算スヘキ者ナル
 チ其茲ニ及ハサルハ乃チ擬律錯誤ニテ且相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡
 シタル者トス依テ治罪法第四百三十一條ニ原キ同第四百三十五條末
 項ニ從ヒ原裁判所カ明治十六年三月三日被告人ニ言渡タル裁判ノ内刑
 法第三百七十三條同第三百七十六條ヲ適施シ重禁錮二月十日ニ處シ
 監視八月ニ付ストアル部分ヲ破毀シ大審院ニ於テ直ニ裁判スルコト左

ノ如シ

山崎治平

前ニ辨明スル如クナルヲ以テ被告人カ犯シタル數次ノ犯罪中更ニ刑法第百條ニ照シ單ニ新法ヲ適用ス可キ明治十五年四月中ニ犯シタル罪ヲ重トシ刑法第三百七十三條ニ照シ仍ホ同第三百七十六條ニ依リ重禁錮二月ニ處シ監視八月ニ付ス可キ處一罪前ニ發シ已ニ重禁錮一月十五日監視六月ノ處斷ヲ經タルヲ以テ刑法第百二條ニ從ヒ前刑ヲ控除シ後刑ニ通算シ剩ル重禁錮十五日監視二月ノ刑ニ處スル者也
大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十一月廿八日

裁判長判事 大塚正男 專任判事 山根秀介

判事 中島盛有 判事 高木勤

判事 昌谷千里 書記 上田庸熙

〔要領〕(一)竊盜ヲ犯スノ目的ヲ以テ人ノ家宅内ニ忍入リタルモ意外ノ

障礙ニ因リ其目的ヲ遂ケ得ザリシモノハ竊盜未遂犯ニシテ

單ニ人ノ住居ヲ侵シタルモノヲ以テ論スルヲ得ス

(二)凡ソ從犯トハ犯罪ノ着手以前豫備ノ所爲ヲ以テ其成就ヲ容

易ナラシムルモノヲ謂フ其執行中幫助ヲ爲スモノ、如キハ

則チ正犯ニシテ從犯ト謂フヲ得ザルナリ

住所身分職業畧之

佐々竹次郎

年齡畧之

同

小川末吉

同

同

竊盜ノ罪

小島松次郎

同

同

橋本初次郎

同

竊盜未遂犯罪被告事件ニ付明治十五年六月十六日名古屋輕罪裁判所
 ニ於テ被告等カ所爲ヲ刑法第七十二條ニ據シ其各項ニ照シ一等ヲ
 加ヘ佐々竹次郎ハ重禁錮一月七日ニ處シ小川末吉ハ犯時二十歳未滿
 ナルヲ以テ刑法第八十一條ニ依リ本刑ニ一等ヲ減シ重禁錮二十七日
 ニ處シ小島松次郎橋本初治郎ノ兩名ハ刑法第九條ニ依リ正犯ノ刑
 ニ一等ヲ減シ仍ホ犯時二十歳未滿ナルヲ以テ刑法第八十一條ニ照シ
 本刑ニ一等ヲ減シ各重禁錮二十日ニ處スト裁判言渡ヲ爲シタリ
 原檢察官ハ右裁判ニ對シ上告ヲ爲シタリ其要領タルヤ被告等ハ竊盜ヲ

犯スノ目的ヲ以テ門戸ヲ踰越シ人ノ邸宅ニ忍入リタルモ意外ノ障礙ニ
 因リ其目的ヲ遂ケ得サリシモノナレハ竊盜未遂犯ヲ以テ論スヘキ者
 トス然ルニ原裁判所カ人ノ住居ヲ侵ス罪ト爲シ刑法第七十二條ヲ
 適用シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナルヲ以テ之カ破毀ヲ求ムト云フニ在
 リ
 本院檢事池上三郎ハ原檢察官上告ノ趣旨頗ル其當ヲ得タルヲ以テ原
 裁判ヲ破毀シ適法ノ言渡アランコトヲ希望スト陳述セリ仍テ之ヲ審接
 スルニ
 抑モ竊盜罪ノ未遂犯ヲ構造セシハ三個ノ條件具備スルヲ要ス第一竊
 盜ヲ犯スノ決意第二其執行ニ着手シタルコト第三意外ノ障礙ニ因リ其
 目的ヲ遂ケサルコト是ナリ本案被告事件ニ付原裁判所カ認視シタル事
 實ニ就テ見ルニ被告竹次郎末吉ノ兩名ハ共謀シテ被害者宅ニ於テ竊
 盜ヲ犯サントシ其煙出窓ノ繩締ヲ切斷シ夫ニ忍入リ財物ヲ得テ逃

走スルノ便ニ先ツ表戸ヲ開置カント手配中表ノ方騒シキニ驚キ財物ヲ得スミテ逃走シタルモノニシテ其所爲ノ竊盜ヲ犯スノ念慮ニ出テタルヲ明確ナル而已ナラス其執行ノ方法ハ竊盜ヲ犯スニ頗適切ニシテ意外ノ障礙ニ因ルニ非サレハ犯罪ノ目的即チ物品ノ竊取ヲ遂ケ得ヘキヤ必然タリ果シテ然ハ被告等カ所爲ハ竊盜罪ノ未遂犯ニシテ其罪質構成ノ諸原素具備セシヲ多辨ヲ要セスシテ明ナリ故ニ原裁判所カ右ノ事實ヲ認視シナカラ之ヲ人ノ住居ヲ侵ス罪ト爲シ刑法第三百七十二條ニ問擬シタルハ上告論旨ノ如ク擬律ノ錯誤ナリトス又被告松次郎初次郎ノ所爲ハ竹次郎等カ竊盜ヲ犯スノ情ヲ知テ戶外ニ瞭望シ其執行ヲ容易ナラシメタル者ナレハ正犯ト爲シ竊盜未遂犯ヲ以テ論セサル可カラス凡ソ從犯トハ犯罪ノ着手以前豫備ノ所爲ヲ以テ其成就ヲ容易ナラシムルモノヲ謂フ其執行中幫助ヲ爲スモノハ如キハ則チ正犯ニシテ從犯ト謂フヲ得サルナリ松次郎等カ犯罪ヲ幫助シタル

所爲ハ其執行中ニ係ルヲ以テ正犯ト爲シ竹次郎等ト共ニ其責メニ任スヘキモノトス然ルニ原裁判所カ從犯ヲ以テ論シ刑法第七十二條及第九條ニ照シ處斷シタルハ是亦擬律ノ錯誤ナリトス右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ基キ原裁判ヲ破毀シ本院ニ裁テ直チニ裁判ヲ爲ス左ノ如シ

佐々竹次郎

小川末吉

小島松次郎

橋本初次郎

被告等カ犯罪ノ事實ハ原裁判所ノ認定ト各証憑トニ據リ明確也トス因テ刑法第三百六十八條第三百六十七條ヲ適用シ二人以上共ニ犯シタルヲ以テ刑法第三百六十九條ニ依リ一等ヲ加ヘ未遂犯ナルヲ以テ同法第三百七十五條第一百十二條ニ照シ一等ヲ減シ重禁錮五月十八日

竊盜ノ罪

以上四年八月七日以下ヲ以テ本刑ト爲シ竹次郎ハ其範圍内ニ於テ重禁錮一年ニ處シ末吉松次郎初次郎ノ三名ハ犯時十六歳以上二十歳未滿ナルヲ以テ刑法第八十一條ニ依リ一等ヲ減シ四月六日以上三年六月五日以下ノ範圍内ニ於テ末吉ハ重禁錮十月ニ處シ松次郎初次郎ハ各重禁錮六月ニ處シ仍ホ刑法第三百七十六條ニ照シ竹次郎ハ十月末吉ハ八月松次郎初次郎ノ兩名ハ各六月ノ監視ニ付スル者也

但シ犯罪ノ用ニ供シタル小刀壹箇并ニ袋繩ハ刑法第四十三條ニ依リ官ニ沒收ス

大審院ニ於テ檢事池上三郎並會宣告ス

明治十六年十二月十五日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 小村壽太郎
判事 伴 正 臣 判事 薄井龍之
判事 園田 弘 書記 香田能興

(要領) (一)事實ニ關スル認定ハ特リ原裁判官ニ屬スル職權ナリ

(二)處斷上ノ證據ハ治罪法第三百五十二條ノ規則ヲ履行シ之ヲ

被告人ニ示シテ其辨解ヲ爲サシメサル可カラス然ルニ此式

ヲ踐マス突然判決上ノ用具ト爲セシハ越權ノ處分ニ係ルモ

ノトス

住所身分職業畧之

大輪 八代吉

年齡畧之

同

福田 忠平

同

右兩名カ官林盜伐被告事件ニ對シ明治十五年十二月二十八日朽木輕罪裁判所於テ刑法第三百七十二條第三百七十一條第三百七十六條

竊盜ノ罪

ニ照シ各重懲罰二月ト監禁六月ニ處シ仍ホ八代吉ハ伐木代金五十錢
 三厘忠平ハ同三十二錢二厘ヲ賠償ス可シト言渡タル裁判ニ服セス上
 告セリ因テ本院於テハ式ニ從ヒ專任判事伴正臣ノ報告ヲ聽クニ被告
 等カ上告ノ要領ハ曾テ被告カ伐採シタル小木ハ自己所有地内ニ生立
 モノニシテ決テ官ノ所有ニアラサルナリ良シ又之ヲ官有ナリト假定
 スルモ該所ハ從前被告カ土功ヲ爲スノ責アレハ其害ト爲ルヘキ草木
 ハ被告カ自由ニ伐採シ得可キノ權理アリ然ルチ原裁判所ガ濫リニ被
 告ヲ罪ニ坐セシハ抑失當ニシテ服シ能ハスト云ニ在リ仍ホ其代言人高
 橋一勝ヲ以テ呈シタル追申書ヲ要スレハ蓋シ其被告カ伐木セシヤ固
 ヨリ自己ノ所有ト確信スルニ因ル故ニ倘シ夫レ之ヲシテ追テ官有ナ
 リト決スルモ其犯スヤ當時罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラサル者ニ付須シ
 刑法第七十七條ニ基キ之ヲ不問ニ付スヘキナリ况ヤ未ダ果シ其官有
 ナルノ証左確學セサルニ於テホヤ加旃其官有ナルト認メテ之カ理由

ヲ欠キ且被告カ自己所有地内ノ伐木セシトノ供述ヲ反テ不利ノ証ト
 爲シ或ハ民事原告人タル朽木縣廳ノ申立ヲ採テ以テ斷罪證據ト爲シ
 タルハ渾テ違法ノ處分ナリト云ニ在リ
 今又代言人高橋一勝カ當廷ノ辨論ニ於ケルモ仍ホ此意ヲ擴充スルニ
 歸着セリ

本院檢事池上三郎ハ其上告ノ理由ナキ旨逐一辨駁シ而テ之ニ附帶ノ
 上告ヲ爲ス要領ハ原判文ニ(云々)即チ官有ニ係ル處ノ擲木類數本ヲ撞
 ニ伐採シ云々)トアリテ之ニ刑法第三百七十三條ヲ適用シアリト雖モ
 抑該條ハ其之ヲ竊取セシモノヲ罰ス可キ法律ニシテ其盜意ナク唯撞
 ニ之ヲ伐採スルカ如キハ決テ該條ノ問フヘキ所ニアラスシテ或ハ同
 法第四百十九條ノ制裁ヲ受クヘキ場合アリ然ルニ原裁判所カ其竊取
 セシト云ハヌシテ撞伐ノ語ヲ用ヒシハ漠トシテ其擬律適否如何ヲ得
 テ知ルニ由ナク結局事實ノ理由ヲ付セサルモノト云ハサルヲ得ス故

ニ被告ノ上告ハ棄却シ附帶上告ノ旨趣ヲ採用シテ原裁判ヲ破毀シ更ニ他ノ裁判所ニ移サレソコヲ希望スト云ニ在リ
 代理人高橋一勝ハ其附帶上告ノ至當ナル旨答辨セリ
 因テ之ヲ審按スルニ被告カ主張スル其伐採セシ樹木ノ官有ナルト否ト其之ヲ知テ犯セシト否トノ點ニ就テハ純ラ事實上ニ關スルヲ以テ之ヲ認定スルハ特リ原裁判所ノ權内ニ屬シ又民事原告人ノ申立ヲ採リ云々非難スレハ箇ハ原判文ニ書載ナシ尙ホ其官有アリト認メシ理由ヲ付セスト論難スルモ原判文ニ其官有ニ係ル云々明示シアレハ敢テ瑕瑾アリト云テ得ス然レハ凡ソ事實ヲ認定スルニハ必スヤ其材料タル証憑ナカル可カラズシテ今原裁判所カ被告ヲ罪ニ坐セシモ亦該判文ニ據ルハ則チ二個ノ証憑アリ其一ハ被告ノ白狀其二ハ相當官吏ノ調書是也而シテ其法律上白狀ナルモノハ乃チ自由任意ニシテ自己ノ不利トナルヘキコト自陳スルモノチ云フ然ルニ公判始末書等ヲ閱

スルモ未ダ曾テ被告カ其罪ヲ犯シタリトノ供述ナシ夫レ其ナキ白狀ヲ証ト爲シタル耳ナラス其相當官吏ノ調書ニ於ケルモ之ヲ處斷上ノ証据ト爲スニハ治罪法第三百五十二條ノ規則ヲ履行シ之ヲ被告ニ示シテ其辨解ヲ爲サシメ以テ不測ノ害ヲ蒙ラシメサルヘカラサルニ更ニ此式ヲ踐マサリシハ公判始末書ニ徴シテ分明也而之ヲ突然判決上ノ用具ト爲セシハ實ニ爲ス可カラサルコト爲シタルモノニシテ越權ナルヲ免シス又原判文ニ之ヲ擅ニ伐採シ云々ト耳記載シテ其竊取ニ係ル手將ク毀損ノ意ニ止マル手判然明示セサルハ則チ本院檢事附帶上告ノ如ク擬律上最モ緊要タル事實ノ理由チ欠クモノニシテ要スルニ治罪法第四百十條第九項及ヒ第十一項ニ適當セシ上告ノ理由アリトス

判決

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ更

ニ適法ノ裁判ヲ受シメノ爲メ本件ヲ浦和輕罪裁判所へ移スモノ也
大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年十二月廿六日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 伴 正 臣

判事 薄井 龍之 判事 園田 弘

判事 上山 惟清 書記 山本 信善

〔要領〕(一)既ニ收穫シテ耕地ニ安置セル稻束ヲ竊取シタルモノハ刑法

第三百七十二條ニ依リ處斷ス可キモノトス

(二)新舊法ヲ比照スルニ舊法ノ正條ヲ明示セズ又數罪俱發セシ
ニ每犯各別ニ事實ノ理由ヲ付セズ且刑法第百條ニ依リ一ノ
情狀重キモノヲ揭示セズ又刑ノ言渡ヲ爲スニ一切ノ証憑ヲ
掲ケサルハ治罪法第四百十條第九項乃至第十一項ノ場合ニ
適當スル被毀ノ原由アルモノトス

住所身分職業等之

國 宮 福 次 郎

年齡等之

明治十五年二月十三日米子輕罪裁判所ニ於テ右被告福次郎ハ明治十
四年十月中兩度各所ニ於テ田地ニ刈リ置タル稻七十把竊取シタル
贓金三圓四十八錢五厘ノ罪刑法第三條ニ照シ其輕キ刑法第三百七十
二條ニ依リ重禁錮五十日ニ處スト言渡セリ原裁判所檢事補土屋兼雄
ハ該裁判ヲ不當トシ上管爲シタル要領ハ本件盜取シタル稻ハ一個ノ
動産物ニシテ田野ニ生熟セル穀物業菓ノ類ト其性質ヲ異ニスル理由
ヲ論辨シ被告人ノ所爲ハ舊法ニ照セハ盜田野穀麥條ニ該リ新法ニ照
セハ刑法第三百六十六條ニ該ルヲ以テ刑法第三條末項及ヒ明治十四
年第八十一号布告ニ照シ重禁錮二月ニ處斷スヘキ者ナリト云フニ在
リ大審院檢事堀田正忠ハ本案ハ刑法第三百七十二條ノ罪アル者ト斷

竊盜ノ罪

定シタルハ相當ナリト雖モ茲ニ附帶上告ヲ爲スノ要點アリ其趣意ハ
 四條ニ分テ序述シテ曰其一凡ソ刑ノ言渡ヲ爲スニハ治罪法第三百四
 條ニ依リ一切ノ証憑ヲ明示セサル可カラズ然ルニ原裁判言渡書ニハ
 之カ証憑ヲ掲ケタルコトナシ是治罪法第四百十條第十一項ニ定メタル
 越權ノ處分ナリトス其二新舊法ヲ比照スルニハ必ス其正條ヲ掲ケサ
 ル可カラズ然ルニ原裁判所ハ舊法ノ正條ヲ明示セス是レ治罪法第四
 百十條第九項ニ定メタル法律ニ因リ理由ヲ附セサル者ナリ其三數罪
 俱發セシ被告事件ニ對シ原裁判所ハ各別ニ其犯罪ヲ證明セス是レ治
 罪法第四百十條第九項ニ定メタル事實ニ因リ理由ヲ附セサル者ナリ
 其四本訴ハ新法實施以前ノ數罪俱發ニ係ルヲ以テ新舊法ヲ比照シ新
 法ヲ適用スルニ方テハ刑法第百條ニ因リ一ノ情狀重キ者ニ從ヒ斷定
 セサル可カラズ然ルヲ原裁判所ハ單ニ刑法第三百七十二條ニ依リ刑
 ノ言渡ヲ爲シタルハ是レ治罪法第四百十條第十項ニ定メタル擬律錯

誤ノ裁判ナリトス以上ノ理由アルニ因リ治罪法第四百二十八條ノ規
 則ニ從ヒ判決アラソコト希望スト仍テ之ヲ裁判スルコト左ノ如シ
 被告人ノ所爲ハ田宮梅吉外二名ノ既ニ収獲シテ其耕地ニ安置セル稻
 束若干ヲ竊取シタル者ナレハ即チ其田野ニ於ル產物ナリトス然レハ
 其生熟セルト収獲セシトテ分テス刑法第三百七十二條ノ竊盜罪トシ
 處斷スヘキハ本條ノ精神ナリ故ニ原檢察官ノ上告ハ無效ナリト雖モ
 原裁判言渡書ニ舊法ノ正條ヲ舉示セサルハ法律ノ理由ヲ明示セサル
 者ナリ又被告事件ハ數罪俱發セシニ每犯各別ニ事實ノ理由ヲ付セス
 且刑法第百條ニ依リ一ノ情狀最モ重キ者ヲ指定セス又ハ治罪法第三
 百四條ノ規定ニ悖リタル等ハ治罪法第四百十條第九項乃至第十一項
 ノ場合ニ適當スル破毀ノ原由アル者ニシテ大審院檢事附帶上告ノ趣
 旨ヲ允當ナリトス
 右ノ理由ナルニ因リ治罪法第四百二十八條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ松

重懲罪裁判所ニ移シ更ニ審判セシムル者ナリ

四七二

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立會宣告ス

裁判長判事 大塚 正男

專任判事 山根 秀介

判事 土師 經典

判事 高木 勤

判事 昌谷 千里

書記 上岡 庸熙

○強盜ノ罪

(要領)強盜棍棒ヲ携帶シタルモノハ刑法第三百七十九條ニ照シ兇器ヲ携帶シタルモノヲ以テ論ス

住所身分職業畧之

左 高 龜 吉

年齡畧之

懲役人逃走外ニ在テ強盜ヲ犯シタル被告事件ニ付明治十五年三月廿三日愛媛重罪裁判所ニ於テ右龜吉カ明治十一年中竊盜三犯 科ニ依リ

懲役十年服役中當今所在不知渡邊庄平カ發意ニ從ヒ明治十四年十二月廿八日越獄逃走シ庄平俱々割木ヲ携ヘ森寅五郎宅外ニケ所へ押入財物ヲ強取シタル所爲ニ在ルヲ以テ刑法第三條末項ニ依リ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從ヒ刑法第三百七十八條ニ依リ輕懲役ニ處スヘキ處ニ人ニ以上共ニ犯シ且兇器ヲ携帶シテ犯シタルヲ以テ刑法第三百七十九條ニ照シ本刑ニ二等ヲ加ヘ有期徒刑十二年ノ處原諒スヘキ情狀アルニ依リ刑法第八十九條同第九十條ニ從ヒ本刑ニ二等ヲ減シ輕懲役八年ニ處シ仍ホ犯罪ノ用ニ供シタル割木ハ刑法第四十三條ニ從ヒ官ニ沒收ストノ裁判言渡ヲナシタリ

原裁判所檢事笠原半九郎ハ該裁判ヲ不當トシ上告爲シタル要領ハ被告ハ強取ノ際携帶セシハ割木ニシテ決シテ兇器ニアラサルナリ兇器トハ兵器ヲ云フ乃チ新律綱領ニ腰刀鐵槍弓銃トアル是ナリ佛蘭西刑法第三百八十一條以下ニ記載シタル表携及ヒ暗藏ノ兵器トアル亦

強盜ノ罪

四七三

兇器ナリ舊法中一切ノ棍棒等人ヲ殺傷スルニ堪ル者ハ皆兇器ヲ以テ論スト是レ棍棒ハ兇器ナラサルカ故ニ特ニ以テ論スト示シタルニ非スヤ舊法且然リ況ンヤ改良ノ新法ニ於テ他ノ兵器金刃ト均シク之ヲ兇器ノ一種ニ加フルノ理ナキニ於テヤ抑モ割木ハ人ヲ殺傷スルニ堪ルノ具ニ非ス夫レ兇器トハ体ナリ殺傷トハ用ナリ其体アルモノハ必ス其用アルヘシト雖モ其用アルモノ必スシモ其体アルニ非ス何ソヤ兵器金刃ハ特リ兇器ノ体ヲ具シタルノミナラス又常ニ殺傷ノ用ニ堪ルモノナリ割木ノ如キハ殺傷ノ用ニ堪ヘサルニ非スト雖モ然レモ是其用ハ變ナリ常ニ非ス固ヨリ体アルニアラサルナリ苟モ体用兼備スルニ非サレハ兇器ノ名稱ヲ下ス可カラス故ニ刑法ハ兇器ヲ携帯シテ犯シタル時ト明掲シ則チ日本刑法草案直譯第四百十四條第三項ニ（厄キ刃物ヲ所持セシキ）トアリ是此精神ニシテ一切棍棒ノ類ハ除去シタルヲ論チ俟タス要スルニ本件ノ判決ハ擬律ノ錯誤タルヲ免カレサ

ルニ因リ破毀ヲ求ムト云フニ在リ對手人左高龜吉ハ上告ノ趣意ハ最も同意ニシテ異論之ナク且自身中風ノ病ニ罹リ固ヨリ兇器ヲ携帯スルノ氣力ナク止マ一時渡邊庄平ノ勸誘ニ同シタル迄ナレハ其不幸ヲ愍諒シ仍ホ酌量減輕アラソコト望ムト答辨セリ

大審院檢事池上三郎ハ原檢察官ト全ク反對ノ意見ナル旨趣ヲ説明シテ曰棍棒ノ如キ固ヨリ法律上兇器ト見做サ、ルヲ得ス抑モ刑法第三百七十九條第二ニ掲ケタル兇器ヲ携帯シタル時トアルハ必ス兵器金刃ヲ限ルニ非ス夫レ兇器ニ物質ト使用トノ二類アリテ第一物質トハ刀鉞銃鎗ノ類ニシテ是等ノ器具ハ縱令暴行脅迫ヲ爲サ、ルモ之ヲ携帯スレハ即チ人ヲ畏懼セシムルニ足ルヘシ第二人ノ常ニ使用スル器具即チ小刀鎚鑿等ノ如キハ畏懼危險ニ非スト雖モ之ヲ以テ暴行脅迫ヲ爲ス時ハ兇器ト爲ル論チ俟タス如何トナレハ使用シテ初メテ人ノ畏懼危險ノ心ヲ生セシムレハナリ故ニ被告人カ携帯シタル割木即チ松

ノ木棒ハ人ヲ畏懼セシメタル所爲明確ニシテ已ニ兇器ノ性ヲ組織シ
即チ原裁判ノ如ク加重ノ罪ヲ免カレスト且内外國裁判事例等ヲ引證
陳辨セリ被告代言人伊東貫一ハ法律ニ掲ケタル兇器トハ全ク人ヲ殺
スノ用ニ供スヘキ銃器劔刃ヲ指稱スルモノニシテ棍棒ノ如キハ兇器
ニ非ス或ル場合ニ於テ人ヲ打撲シ又ハ殺傷スルコトアルモ是ハ變体ニ
シテ兇器トハ目ス可カラス況ンヤ被告人カ携帯セシ割木ハ人ノ畏懼
ス可キ物具ニ非ス又畏懼セシメサルニ於テチヤ然ルニ原裁判所カ兇
器ヲ携帯シタル者ト爲シ本刑ヲ加重シタルハ不法ナリト辨護セリ仍
テ判決スルコト左ノ如シ

上告ノ要點ハ被告人カ強盜ヲ犯スニ臨ミ携帯シタル物具カ割木ニシ
テ決シテ兇器ト名ク可キモノニ非ス果シテ然ラハ刑法第三百七十九條
二項ノ情狀アル者ニ非サレハ其本刑ヲ加重セシハ擬律ノ錯誤ナリト
云フニ在リ抑モ兵器金刃ノ兇器タルコトハ勿論縱令ハ鋸鑿棍棒等荷モ

社會ニ對シ其畏懼心ヲ惹起ナシムルノ類兵器金刃ト稱其性質ヲ異ニ
スルカ如クシト雖モ其使用上事實裁判官カ認メテ以テ人ヲ殺傷スルニ
堪ルル具ト判定シタル以上其斷定ハ容易ニ動ス可カラス況ンヤ法律
上ノ所謂兇器トハ必ス兵器金刃ヲ限ルニ非ルニ於テチヤ是某名稱ニ
拘泥セヌシテ事實ニ適施スルハ法律ノ活用ニシテ治罪法第百四十六
條二項ニ諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任從シタル所以ナリ依テ上告
ノ理由相立カズ者トシテ治罪法第四百二十七條ニ從ヒ之ヲ棄却スル者
也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年三月廿七日

裁判長判事 西岡 逾 明 專任判事 山根 秀 介

判事 大塚 正 男 判事 高 本 勤

判事 昌 谷 千 里 書記 飯 島 偉

強盜ノ罪

〔要領〕強盜ヲ爲スノ目的ヲ以テ被害者ノ門前ニ至リ門戸ヲ開カサレハ
放火ス可シト脅迫シタルハ既ニ強盜豫備ノ區域ヲ離レ決意ニ着
手シタルモノニシテ單ニ脅迫罪ニ止ル可キモノニ非ス
住所身分職業等之

落合宗次郎

年齢略之

脅迫被告事件ニ付明治十五年十月九日朽木輕罪裁判所ニ於テ檢事補
外島保信ハ本件強盜未遂犯ナリト思料シ既ニ豫審ヲ經タル者ニ付治
罪法第三百六十一條ニ依リ會議局ニ移スノ言渡アラソクテ求ムト云
フニ對シ本案ハ強盜未遂犯ニアラス單一ナル脅迫罪ナリトシ之ヲ棄
却スル旨言渡シタル裁判ヲ不法ナリトシ仍ホ上告セリ其要領ニ曰被
告ハ他ノ一名ト共ニ兇器ヲ携帯シ強盜ヲ爲サントシテ己ニ行ヒ未タ
遂ケ得カリシ重罪犯者タルヲ以テ輕罪裁判所ノ管轄ニ属セサルモノ

ト思料シ其旨申立シニ原裁判所ハ之ヲ單一ノ脅迫罪ナリトシ管轄違
ノ申立ヲ棄却シタルハ不法ナリト云フニアリ
對手人落合宗次郎ハ之ニ答辨セス

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審按
スルニ公判始末書豫審終結言渡及ヒ公廷ニ於テ已ニ調査ヲ爲シタル
豫審廷ノ調書並ニ被害者遂田友吉ノ調書ヲ閱スルニ被告ハ他ノ一名
ト謀リ強盜ヲ爲スノ目的ヲ以テ他ノ一名ハ斧被告ハ桐ノ棒ヲ携ヘ共
ニ被害者ノ門前ニ至ルモ戸締リ嚴重ニシテ輒ク開扉スルヲ得サルヨ
リ詐言ヲ以テ之ヲ開カシメント爲シタルモ亦應セス因テ開門セサレ
ハ放火スヘシト脅迫シタルニ被害者ノ家族騒動シテ其場ヲ逃走シタ
リトノ顛末明載アルヲ以テ之ヲ觀レハ其強盜豫備ノ區域ヲ離レ決意
ニ着手セシモノト云ハサルヲ得ス然ラハ則チ二人以上兇器(斧トアリ
又鉞トアル)モ其現物ニ就カサレハ直チニ以テ兇器ト云ヒ難シ假リニ

強盜ノ罪

兇器ノ字ヲ填スヲ務ヘ強盜ヲ爲サントシテ遂ケサルモノニテ其
罪刑法第三百七十九條以下ニ當該スル重罪ナリトス然ルモ原裁
判所ハ單一ノ脅迫罪ニテ則チ輕罪ナリトシ檢察官ノ請求ヲ棄却シタ
ルハ越權ノ處分ナリト判定ス因テ治罪法第四百二十八條ニ依リ已ニ
履行シタル公判ノ手續ヲ破毀シ更ニ適法ノ判決ヲ受ケシメン爲メ被
告事件ヲ水戸輕罪裁判所會議局ヘ移ス者也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年八月十日

裁判長判事 園田 弘 專任判事 鳥居 斷三

判事 兵頭 正 判事 土師 經典

判事 小村 壽太郎 書記 山本 信善

〔竝領未タ捕得セサルモノヲ共犯者ナリト論定シ之ヲ判文ニ明掲シタル
ハ越權ノ處分タルヲ免カレヌ又其判文ニ自首ニ係ルトノミ記載シ

テ法律ノ正條ヲ示サ、ルハ治罪法第三百四條ニ觸ル、不法ノ裁
判ナリトス

住所身分職業畧之

香 良 喜 之 助

年齡畧之

同

土 井 利 平 治

同

強盜被告事件ニ付明治十五年十月十二日兵庫重罪裁判所ニ於テ喜之
助カ犯罪ノ内皆森藤兵衛方ノ一次ハ自首ニ係ルモ他ノ二次ヲ以刑法
第三百七十八條及ヒ第三百七十九條ニ照シ十二年ノ有期徒刑ニ處ス
又利平治ニ於テモ刑法第三百七十八條及ヒ第三百七十九條ニ照シ十
二年ノ有期徒刑ニ處スト言渡シタル裁判ニ服セス各上告セル利平治

強盜ノ罪

カ陳述ノ要領ハ利平治ハ強盜ノ共犯人ニ非ス曾テ爲シタル賭博貸金ノ辨濟ヲ受ケンカ爲メ同伴ノ途中捕縛ヲ受ケ遂ニ共犯人トセラレタルハ不當ナリト又喜之助カ申立ハ福西仙太郎外二名ト共謀シテ強盜ヲ犯シタルニ渠等ハ處刑ヲ受スシテ却テ關係無キ利平治ヲ共犯人トセラレタルハ不當ナリト云フニ在リ
對手人檢事補三俣秀彦ハ上告ノ不理ニシテ其原由トナスニ足ラサル旨答辨セリ

大審院ニ於テ專任判事伴正臣ノ報告ニヨリ立會檢事加納久宣ノ意見上告代言人齋藤孝治ノ陳述ヲ聽クニ加納檢事ニ於テハ附帶上告ヲ爲シテ曰原裁判ノ文中ニ香良喜之助カ明治十五年三月四日福西仙太郎岡田米藏ト共謀シ兇器ヲ携ヘ攝津國八部郡下谷上村皆森藤兵衛方ヘ押入ル家内ノ者ヲ縛シ置キ物品奪取ルノミナラス追跡シタル皆森鶴松外二人ニ負傷セシメ猶又土井利平治姓不知直吉共謀シ兇器ヲ携ヘ

云々前犯罪ノ内皆森藤兵衛方ノ一次ハ自首ニ係ルモ他ノ二次ヲ以刑法云々ト有之所右利平治ヲ除クノ外福西仙太郎外二名ハ未ダ就縛ニ及ハサル者ニシテ果テ被告等カ同謀ノ強盜犯ナルヤ否確知スルニ由ナキニ既ニ之ヲ判文ニ明揭シテ強盜犯者ナリトセシハ越權ニ涉ル處分ナルノミナラス皆森藤兵衛方ノ一次ハ自首ニ係ルトアルモ原書類中其自首セシモノヲ見ス又假令自首セシモノトスルモ強盜犯ニシテ人ニ負傷セシモノナレハ其罪無キニ非サルニ付相當ノ刑ヲ適用スヘキニ措テ問ハサルハ不當ノ裁判ニ付之ヲ破毀シ他ノ裁判所ニ移サレシトテ望ムト上告代言人齋藤孝治ハ原判文中土井利平治ニ於テハ其犯罪ニ係ル事實ノ理由ヲ明示セサルハ治罪法第三百四條ニ抵觸スルモノナリ而又檢察官附帶上告ノ如ク被告喜之助カ鶴松等ニ負傷セシメタル點ニ於テ若シ之ヲ刑法第三百八十條ニ依テ問擬セラルハ片ハ其當ヲ失スルニ至ラン何トナレハ該喜之助カ所爲ハ強盜ヲ爲スニ關ス

強盜ノ罪

ルモノニ非スシテ同第三百三條ニ載スル所ノ行爲ニ係ルモノナレハ
 ナリ或ハ擬律錯誤ノ點ヲ以テ本院ニ於テ直チニ裁判アランカト思料ス
 ルニヨリ陳辨スト云ヘリ依テ之ヲ審按スルニ被告兩名ノ上告趣旨ニ
 於ルヤ一ハ受刑ノ共謀ニ在ツテ假令眞否ノ相違セルモ自己カ罪ノ有
 無且輕重ニ關係無ク一ツハ事實ノ認定ニ非難ヲ容ル、モノニシテ孰
 モ上告ノ効チ有セス又上告代言人ノ述フル利平治カ裁判ニ於ケルモ
 事實理由ノ揭示チ缺キシニ非スシテ其次第ヲ列擧シ以明示シアレハ
 治罪法第三百四條ニ抵觸セサルニ付是亦上告ノ原由ト爲ステ得スト
 雖モ檢察官附帶上告ノ如ク福西仙太郎外二名ハ未ダ捕得セサルニ拘
 ハラス之ヲ喜之助カ強盜共謀者ナリト論定シ其判文ニ明擧シタルハ
 越權ノ處分タルヲ免カラス加フルニ同人カ自首ニ於ルモ訴訟書類中
 之ヲ見サルノミナラス假令自首ニ相違非サルモ法律ノ正條ヲ示サス
 徒ラニ自首ニ係ルトノ記載シタルハ治罪法第三百四條ニ觸ル、不

法ニ裁判ニ付旁以テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ更
 ニ相當ノ裁判ヲ受クシメノカ爲メ大坂重罪裁判所ニ移スモノ也
 大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十月三十日

裁判長判事 島 居 斷 三 專任判事 伴 正 臣

判事 瀧 井 龍 之 判事 園 田 弘

判事 小村 壽 太郎 書記 香 田 能 興

要領 (一) 窃盜財ヲ得テ其取還ヲ拒シ爲メ兇器ヲ以テ威迫シタルハ強
 盜ヲ以テ論ス故ニ二人以上又ハ兇器携帶等加重ノ模様アル
 中ハ亦加重ノ例ニ從フ可キモノトス

(二) 盜品ノ取還ヲ拒キタル未到底逃ケ難キヲ察シ遂ニ盜品ヲ返
 還シテ其場ヲ立去リタル如キハ既遂犯タルヲ論テ俟タス

無 籍

姓不明徳五郎

年齢畧之

明治十五年八月九日山形重罪裁判所ニ於テ右徳五郎カ被告事件ヲ審判シ其竊取シタル物品ノ取還ヲ拒ク爲メ短刀ヲ以テ威迫シタルト他ノ竊盜ト二罪ノ内一ノ重キ刑法第三百八十二條及ヒ第三百七十八條ニ依リ犯時十六歳未滿ナルモ善惡ノ識別アリテ犯シタルモノト認メ同第八十條末項ニ照シ輕懲役ヨリ二等ヲ減シ二年六月ノ重禁錮ニ處シ仍ホ同第三百八十四條ニ照シ一年六月ノ監視ニ付シタル裁判ニ對シ同裁判所檢事納富利邦ハ上告セリ其主點ハ被告ノ所爲タル事主ニ追跡セラレ其盜品ノ返還ヲ拒ク爲メ短刀ヲ拔放シ威迫シタル者ナルヲ以テ刑法第三百七十九條第二項ニ照シ加重シテ重懲役ヨリ減輕スヘキ者ナルニ同第三百七十八條輕懲役ヨリ減等シタルハ不當ナリト云フニ在リ

大審院ニ於テ立會檢事林三介ノ意見及ヒ院長ノ職權ヲ以テ撰任セラレタル代言人藤井三郎ノ答辨ヲ聽クニ檢事ハ本件加重ノ論旨ハ全ク原檢察官ト同意ナルモ被告ノ所爲タル其威迫ヲ爲シタル末逃ケ去ラントシタル跡ヨリ大勢馳セ來ルヲ以テ該盜品ヲ返還シテ其場ヲ立去リタル者ナレハ強盜未遂罪ヲ以テ論スヘキヲ相當ナリト思料スル旨陳述シ代言人ハ刑法第三百八十二條ニ依リ強盜ヲ以テ論セラルヘキ本按ノ如キモノハ初ヨリ強盜ヲ犯スモノト異ナルニ付兇器ノ有無ニ拘ハラズ單ニ刑法第三百七十八條ノ輕懲役ニ止メ更ニ加重ス可キ者ニアラサルヲ以テ原裁判ハ相當ナリト開陳セリ依テ之ヲ審按スルニ原裁判言渡書ニ舉示シタル被告事實ノ要領ハ被告人ハ佐野村五十嵐佐藏宅軒端ニ乾シアル衣類ヲ竊取シ同村稻荷神社ノ近傍ニ至リ之ヲ袱ニ包ミタル處追跡シ來レル五十嵐サクカ今盜難ニ遭フタル連其袱包ヲ披キ見ス可シト手ヲ懸クルニ因リ懷中セシ短刀ヲ拔放シ威シ

強盜ノ罪

四八七

タレハ「サツ」ハ恐レテ手ヲ放ナタルニ付直ニ逃去ラントシタレトモ跡ニ
 リ大勢ノ男馳セ來ルヲ以テ到底逃ケ難キヲ察シ盜品ヲ返還シテ其場
 ナ立去リ而シテ又他所ニ於テ一ノ竊盜ヲ爲シタル者ナリ此第一ノ事
 實タル其盜品ハ後ニ至リ之ヲ返還シタリト雖モ其前ニ在テ一旦之ヲ
 盜取シ得而シテ其取還ヲ拒ク爲メ兇器即チ短刀ヲ以テ脅迫シタル者
 ナルニ付刑法第三百八十二條ノ支配スヘキ犯罪ハ充分成就シタル者
 ニシテ其後ニ返還セシヲ以テ效ヲ既往ニ及ホシ更ニ未遂罪ト爲スチ
 得サル者トス而シテ既ニ刑法第三百八十二條ニ依リ強盜ヲ以テ論ス
 ル以上ハ其犯狀ニヨリ二人以上又ハ兇器携帯等加重ノ模様アレハ亦
 加重ノ例ニ從フヘキハ所謂強盜ヲ以テ論ストアル範圍中ニ屬セリ依
 テ本案事實ハ刑法第三百七十九條第三項ヲ適用シ重懲役ヲ以テ本刑
 ト爲シ之ヨリ減等ヲ擬スヘキ者ナルニ原裁判玆ニ出テサルハ擬律ノ
 錯誤ナルヲ以テ之ヲ破毀シ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ本院ニ於テ

直ニニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

德 五 郎

三箇ノ被告事實ハ原裁判言渡書ニ據リ明確ナルニ付之ヲ法律ニ照ス
 ニ第一ノ所爲ハ刑法第三百八十二條ニ依リ同第三百七十九條第二項
 ニ照シ同第三百七十八條ノ刑ニ一等ヲ加ヘ重懲役ヲ以テ本刑ト爲シ
 其犯時十六歳未滿ナルモ是非ノ辨別アリテ犯シタル者ニ付同第八十
 條末項ニ照シ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ同第三百八十四條ニ
 照シ六月以上二年以下ノ監視ニ付スヘキ者第二ノ所爲ハ同第三百六
 十六條及ヒ第三百七十六條ニ依リ二月以上四年以下ノ重禁錮及ヒ六
 月以上二年以下ノ監視ニ該ルニ付同第一百條ノ例ニ依リ其重キ第一ノ
 罪ヲ以テ重禁錮二年九月ニ處シ監視一年八月ヲ附加スル者也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年十一月廿八日

強盜ノ罪

裁判長判事 山根 秀介 專任判事 高木 勤

判事 伴正 臣 同 昌谷 千里

同 園田 弘 書記 金井 丈夫

〔要領〕盜罪ノ目的ヲ遂ケン爲メ人ヲ故殺シ而シテ其目的ヲ遂ケザルモノハ刑法第三百八十條ニ依リ強盜人ヲ死ニ致シタルモノヲ以テ論ス

住所身分職業畧之

小野澤 トウ

年齡畧之

右トウカ被告事件ニ對シ明治十五年十二月十六日東京重罪裁判所ニ於テ被告ハ竊盜ノ目的ヲ遂ケンカ爲メ藤澤リカヲ故殺シタルモノト判定シ刑法第三百六十六條同第二百九十六條同第百條ニ依照シ死刑ニ處スト旨渡タル裁判ヲ不當ナリトシ小野澤トウニ於テ上告セリ其

要旨ハ被告カ藤澤立信ノ室ニ入り同人カ母リカヲ殺殺シ金圓ヲ持テ去タル所爲ハ故殺ト竊盜トノ二箇ノ犯罪タリ然ルチ原裁判官ハリカヲ殺シタルハ竊盜ヲ遂ケン爲メナリト判定セラレシハ事實ノ理由ニ齟齬アリ又假ニ之ヲ裁判官ノ判定セシ事實ナリトセハ被告カ犯罪ハ刑法第三百八十條ニ該當スヘキモノナルニ同法第三百六十六條第二百九十六條ニ依據セラレタルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在リ大審院刑事公庭ニ於テ上告代官人大井憲太郎ハ上告ノ趣意ヲ擴張陳シ立會檢事池上三郎ニ於テハ上告ニ對スル意見ヲ陳述セリ因テ之ヲ審按スルニ原言渡書ニ證據物件各証人ノ証言等ヲ舉示シ而シテ被告ハ金圓ヲ盜ニ取ラン爲メ立信ノ室内ニ立入り又其所爲ヲ遂ケン爲メリカヲ故殺シタルモノト認定ストアリテ毫モ其理由ニ齟齬アルコトナシ又犯罪ノ事實ヲ推究シテ之ヲ認定スルハ承審官ニ任テスル處ノ特權行シテ其職權ヲ以テ判定セシ事實ハ他ニモリ之ヲ非難シ得ルカラサズ以テ強盜ノ罪

テ上指第一ノ點ハ獨立ナルモノナリ且告第二ノ旨趣ヲ知ク刑法第
 三百八十條ヲ適用スルヲ當然ナルニ刑法第三百六十六條同第二百九
 十六條同第三百條ヲ該當シタルハ法律適用ヲ誤タル不法ノ裁判ナリト
 ヲ御刑法第二百九十六條ニ重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ云々人
 故殺シタル者ハ死刑ニ處スルハ一般ノ重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル
 爲メ故殺シタル者ヲ罰スルノ法章ナルモ盜罪ノ目的ヲ遂ケン爲メ人ヲ
 殺シ而シテ其目的ヲ達シタル如キハ即チ強盜罪タルヲ勿論ニシテ之
 ヲ罰スルノ法章ハ刑法第三百八十條ニ強盜人ヲ傷スル者云々死ニ致
 シタル者ハ死刑ニ處スト特條ヲ明設シテアリテ盜罪ヲ便利ナラシムル
 爲メ人ヲ殺シタル者ハ其第二百九十六條ノ支配スル者ニテアリテ
 カル明白ナリ右ノ理由ナルヲ以テ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ
 裁判スル左ノ如ク

小野澤トシ

前ニ辨明スル如クナルヲ以テ被告カ犯罪ノ事實ハ原裁判官ノ確認ス
 ル處ニ據リ刑法第三百八十條ニ照シ死刑ニ處スルモノナリ
 但犯罪ノ用ニ供シタル蚊帳ヲ釣紐ハ所有主ニ還付シ公訴裁判費
 ハ凡テ被告ニ負擔セシム

大審院檢事池上三郎宣會宣告ス

裁判長與事 石井忠恭 專任判事 土師經典

判事 西岡逾明 判事 大塚正男

判事 高木 勳 書記 味岡禮實

(要領) (一)共ニ謀テ強盜ヲ爲スニ一名カ兇器ヲ持スルハ他ノ一名ハ
 之ヲ持セサルモ共ニ刑法第三百七十九條ニ照シ其罪ヲ加重
 ス可キモノトス

(二)又現場ニ臨ミ一名カ其事ヲ行ヒ他ノ一名ハ自ラ手ヲ下セ
 ルモ共ニ正犯タルハ論ヲ俟ズ

強盜ノ罪

住所身分職業略之

德 富 峯 吉

年齡略之

全

蘭 德 次 郎

年齡略之

右被告兩名カ被告事件ニ付明治十五年七月十二日長崎重罪裁判所ニ於テ被告共カ犯罪ノ事實ヲ審理シ刑法第三百七十八條同第三百七十九條ニ照シ峯吉ハ輕懲役ニ一等ヲ加ヘ仍ホ同法第八十一條ニ依リ一等ヲ減シ輕懲役六年德次郎ハ刑法第九條ニ從ヒ輕懲役ニ一等ヲ減シ重懲罰四年仍ホ同第三百八十四條ニ依リ監視一年六月ノ刑ヲ宣告シタル裁判ニ對シ同裁判所檢事松山彪ニ於テ上告ヲ爲セル要旨ハ被告ハ正從犯ニアラス兇器ヲ携帶シテ犯シタル共謀者ナレハ刑法第三

百七十八條第三百七十九條ニ依リ輕懲役ニ二等ヲ加ヘ有期徒刑ニ該ルヘキモ峯吉ハ二十歳未滿ナルヲ以テ本刑ニ一等ヲ減輕スヘキモ之ヲリ之ヲ假ニ正從犯トセハ峯吉ハ加重セシ重懲役ヲ本刑トナシ宥恕減輕シ德次郎ハ其本刑即チ重懲役ヨリ從犯ニ付減輕スヘキモノナルニ原裁判玆ニ出テサリシハ共ニ擬律錯誤アル不當ノ裁判ナリト云フニ在リ被告兩名ニ於テハ原裁判ヲ至當ナリト思量スル旨答辨シ被告代理人下村四郎ハ峯吉カ事主ヲ脅迫シ財物ヲ奪取スル場合ニハ德次郎ハ恐怖心ヲ生シ構内便所ノ脇ニ潜居シ峯吉カ奪取タル物品ヲ接遞セシ者ナレハ共犯者ニアラスノ正從犯タル勿論ナルヲ以テ原裁判ハ適當ナリトノ旨趣ヲ陳述セリ因テ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審按スルニ刑法第九條ニ曰ク重罪輕罪ヲ犯スコトヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス下ア其從犯タルハ身自

強盜ノ罪

テ其事ヲ行ハスシテ他人カ罪ヲ犯スル情ヲ知リ間接ニ其事ヲ幫助スル者ニシテ其所爲ヲ共謀シ共ニ其場ニ臨ミ一名カ其事ヲ行ヒ他ノ一名ハ自ラ手ヲ下タサスト雖モ二名共ニ正犯者タルコトハ論ヲ俟タスシテ明ラカナリ又刑法第三百七十九條ニ強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一等ヲ加フ一二人以上共ニ犯シタルハ三兇器ヲ携帯シテ犯シタル時トアリテ現ニ二人以上ニテ強盜ヲ爲セシモ一名カ兇器ヲ持スルハ假令他ノ一名ハ兇器ヲ持セサルモ共ニ同法第三百七十九條ニ該ル輕懲役ニ二等ヲ加重シ有期徒刑ニ該ルハ說明ヲ要セスシテ瞭然タリ今原裁判言渡書ニ依レハ本件被告兩名カ犯罪ノ事實ハ共ニ強盜致スヘシト協議シ明治十五年五月十一日夜森永タマ方締テ外シ共ニ家屋ニ立入り德次郎カ携帯セシ鑿ヲ峯吉ニ渡シ同人ハ之ヲ以テタマヲ脅迫シ尙ホ奪取リシ刀ヲ抜キ金錢差出スヘシト申威ス場合ニハ德次郎ハ構内便所ノ脇ニ潜居シ峯吉一名ニテ金員物品ヲ強取シ

而テ其盜用シタル物品ヲ共々携ヘ逃走セシ者共ナリト承審官ニ於テ確認スル處ナリ然レハ則チ德次郎ハ峯吉カ脅迫シテ金員ヲ強取スル場合ニ至リ一旦其場ヲ外スト雖モ即チ共謀シテ其場ニ至レハ正犯タルハ無論ニシテ從犯ヲ以テ論スヘキモノニアラス故ニ峯吉德次郎カ所爲ハ刑法第三百七十八條第三百七十九條ニ照シ輕懲役ニ二等ヲ加重シ有期徒刑ヲ本刑トシテ峯吉ハ十六歳以上二十歳未滿ナルヲ以テ本刑ヨリ一等ヲ減輕シテ處斷スヘキモノナリ然ルチ原裁判ハ峯吉ヲ強盜ノ正犯トシ德次郎ヲ其從犯者トナシタルハ勿論峯吉カ宥恕減輕法ニ依リ減等シタル輕懲役ヲ本刑トシ德次郎ヲ其輕懲役ヨリ一等ヲ減輕セシハ共ニ法律適用ヲ誤リタル不當ノ裁判ナルヲ以テ之ヲ破毀シ治罪法第四百二十九條ニ法リ本院ニ於テ直ニ裁判スル左ノ如シ

德 富 峯 吉

德 次 郎

右ニ辨明スル理由ナルヲ以テ被告兩名カ犯罪ノ事實ハ原裁判官ノ確認スル處ニ依リ刑法第三百七十八條同第三百七十九條ニ照シ本刑ニ二等ヲ累加シ有期徒刑ニ該ル處峯吉ハ二十歳未滿ナルヲ以テ同法第八十一條ニ從ヒ宥恕シテ一等ヲ減シ德次郎ハ原諒スヘキ情狀アルヲ以テ同第八十九條第九十條ニ從ヒ酌減シテ一等ヲ減シ各重懲役十一年ニ處シ犯罪ノ用ニ供シタル蠶ハ沒收シ贓品現在ノ分ハ被害者ヘ還給スル者也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 土師經典

判事 山根秀介 判事 高木勤

判事 昌谷千里 書記 岩田鍊

○家資分散ニ關スル罪

要領家資分散ノ際虛偽ノ負債ヲ増加セシメ爲メ無實ノ証書ヲ他人ニ與

ヘ置キタルモ其証書ノ如キハ絶テ權義ノ生ス可キナキ虛無ノ其書ナルヲ以テ固ヨリ偽造証書ノ罪アルモノニ非サレハ單ニ虛偽負債増加ノ一罪ヲ以テ處斷ス可キモノトス

住所身分職業畧之

平 頁 松

年齡畧之

右松カ家資分散虛偽負債増加ノ被告事件ニ付明治十五年六月十六日沖繩縣裁判所ニ於テ刑法第三百八十八條同第二百十條及ヒ同第二百十二條ニ照シ二罪俱發スルヲ以テ同第一百條第三項ニ依リ同第二百一十條第一項ニ照シ處斷スヘキ處同第八十九條同第九十條ニ依リ二等ヲ減シ重禁錮二月附加罰金貳圓監視六月ニ付ストノ裁判ニ對シ同裁判所檢事補緒形維則カ上告爲シタル要領ハ本犯松カ家資分散ニ關シ不正ノ利益ヲ得ルノ目的ニテ証書ヲ偽造シ已ニ其施行ノ所爲ヲ盡ス

強盜ノ罪 家資分散ニ關スル罪

ト雖意外ノ理由ニ因リ其成功ヲ妨ケラレ未タ証書面金額ヲ受取ラセ
ル内ハ該證ノ性質ニ據テ見レハ之ヲ行使スルトハ證面ノ金額ヲ收メ
タルトニアルヲ以テ未タ犯罪ノ全部ヲ遂タルモノト云フヲ得ス是レ
則犯罪ノ遂ケサルモノナルニ之ヲ既遂トシテ判決ナシタルハ不當ナ
リト云フニアリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ依リ立會檢事ノ意見ヲ聽シニ原檢察
官カ未遂犯罪ヲ以テ處分スヘキトノ理由ハ相立タスト雖該証書偽造
ノ點ハ原裁判ヲ破毀スヘキモノト思量スルニ依リ茲ニ附帶上告ヲナ
シタリ其要旨ハ抑刑法第二百十條ノ如キ其偽造シタル証書ヲ以テ己
レカ義務ヲ遁レ或ハ爲メニ不正ノ權利ヲ裝フ等ノ所爲ヲ罰スルノ法
意ニシテ本案事件ノ如ク被告カ甲債主ニ對シ身代限ノ處分ヲ受クル
ノ際虛偽ノ負債ヲ增加セン爲メ無實ノ証書ヲ乙丙等ニ與ヘ置キタル
モノナレハ該証書ノ如キハ絶テ權義ノ生スヘキナキ虛無ノ文書ナルヲ以

テ刑法第二百十條ノ精神トハ全ク異ナリ畢竟如此文書ハ即虛偽ノ負
債ヲ增加セント欲スルノ一點策ニシテ刑法第三百八十八條ノ管理ス
ル所ナルヤ明ケシ因是觀之ハ本案事件ハ單ニ虛偽ノ負債ヲ增加シタ
ル一點ヲ以テ處斷スヘキヲ至當トス然ルチ原裁判玆ニ出ス偽造証書
ノ罪アリトシ數罪俱發ヲ以テ處斷シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリト云
フニアリ因テ判決スル左ノ如シ

原檢察官於テハ刑法第二百十條ニ云フ偽造証書行使ノ未遂犯罪ナリ
ト論告スレモ被告ノ口供中ニ偽造証書ハ分配金御下渡ノ際ニ臨ミ發
覺ストアツテ該金額ヲ得ルノ目的ハ達シ得サルモ業已ニ偽証書ノ行
使タルハ明瞭ナルニ非スヤ然レモ本院檢事附帶上告ノ如ク本案ニ對
シテハ其同第二百十條ノ未遂既遂ニ抱テ同條ト數罪俱發ヲ以テ論
スルノ限ニアラス何ントナレハ該文書タルハ虛偽ノ負債ヲ增加セン
トスルノ一策ニ止リ偽造証書授受ノ双方間ニ在ツテハ權義ヲ生スルニ至

ヲサレハ也。因テハ虛偽負債増加ノ一罪ヲ以テ處斷スヘキモノナルニ
原裁判玆ニ出テサリシハ擬律錯誤ノ判定ナルヲ以テ治罪法第四百二
十九條ニ則リ之ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決スル左ノ如シ

平 良 松

裁判所カ認定シタル事實ニ據リ刑法第三百八十八條ニ照シ家資分散
ノ際云々又虛偽ノ負債ヲ増加シタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁
錮ニ處ストアルニ依リ重禁錮二月ニ處スルモノ也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十月一日

裁判長判事 中島 盛有 專任判事 石井 忠 恭

判事 伴 正 臣 判事 土師 經 典

判事 高木 勤 書記 味岡 禮 質

○詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

〔要領〕人ヲ欺罔シテ証書ヲ騙取シタルモノト爲スモ其証書ノ有効無効

ヲ判定セサレハ刑法第三百九十條ニ問擬ス可キ犯罪ノ基礎タル

事實ノ理由ヲ付セサルモノニテ即チ治罪法第四百十條第九項ニ

適當スル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業略之

島 澤 金 次 郎

年齡零之

明治十五年二月廿五日東京輕罪裁判所ニ於テ右島澤金次郎ニ對シ長
兼太郎ナル者ヲ欺罔シテ証書ヲ騙取シタル者ト認メ而シテ該証書ノ有
効ナルト無効ナルトヲ問ハス証書ナリト認メ刑法第三百九十條ニ照
シ重禁錮二月ニ處シ罰金四圓ヲ附加シ同第三百九十四條ニ依リ監視
六月ヲ附スル旨宣告セシ處右金次郎ニ於テ上告ヲ爲ス要旨ハ該証書
ノ文詞ハ全ク無効ノ文詞ニシテ何等ノ効用ヲ爲サ、ルモノナレバ他
詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

人ノ權利ニ害アルコアラズ然ル上ハ之ヲ詐取スルモ刑法第三百九十條ニ掲グル証書類トハ大ニ異ナル處アルヲ以テ原裁判所ニ於テ該條ニ問擬セラレタルハ擬律ノ錯誤ナリトノ旨趣ヲ以テ上告ヲ爲シタリ原檢察官檢事補菊池武夫ニ於テハ該証書ハ長兼太郎ノ爲メ最モ効用アル証書ナルニ依リ原裁判ハ相當ナリトノ旨趣ヲ以テ答辨ヲ爲シタリ上告代言人中島又五郎ハ上告ノ趣意ヲ擴張スルノ辨論ヲ爲シ本院檢事加納久宣ニ於テハ原裁判所カ証書ノ有効無効ヲ判定セス刑法第三百九十條ニ問擬シタルハ事實ノ理由ヲ附セサル不法ノ裁判ナリトノ旨趣ヲ陳辨シタリ依テ判決スル左ノ如シ

原裁判所ノ宣告ニ該証書ハ到底無効ニ歸スルト有効ニ屬スルトハ茲ニ判定スヘキニ非ス苟モ証書ナリト認メタルハ以テ刑法第三百九十條ニ依リ詐欺取財ノ罪ト爲シ云々トアリテ該証書ノ有効無効ヲ判定セサルモノナリ有効無効ヲ判定セサレハ刑法第三百九十條ニ問擬

スヘキ犯罪ノ基礎タル事實ノ理由ヲ付セサルモノナリ即チ治罪法第四百十條第九項ニ適當セル不法ノ裁判ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ横濱輕罪裁判所ニ移シ更ニ裁判セシムルモノナリ

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十五年十二月十二日

裁判長判事 岡内 重俊 專任判事 木付 義路

判事 大塚 正男 全 兵頭 正慈

全 小村 壽太郎 書記 松本 正利

(要領)他人ノ所有スル物件ヲ以テ將ニ自己ノ所有ニ歸ス可キモノト偽リ之ヲ借金ノ抵當ニ充テタルモノハ刑法第三百九十三條ニ依リ處斷ス可キモノトス

住所身分職業等之

詐欺取財ノ罪及ヒ受済財物ニ關スル罪

年齢畧之

右捨五郎カ借受ノ人力車ヲ費消セシ事件ニ對シ熊谷輕罪裁判所ニ於テ裁判シタル顛末ハ被告カ川口玉吉ヨリ賃借シタル人力車ヲ明治十五年二月廿五日外兩日青木權兵衛方ノ宿泊飲食代金二圓八拾錢其他借金合セテ五圓ノ抵當トシテ右車ヲ預ケタリ而シテ此金ノ償却方チ父兄ヘ謀リ兄松五郎ニ於テ之ヲ權兵衛ヘ示談シタル等ノ証蹟ニ因リ推窮スレハ被告ハ一時金融ノ爲メ借用ノ車ヲ抵當ト爲シタルモ之ヲ費消スルノ意思ニ非スト認定シ之ヲ法律ニ照スニ罰ス可キノ正條ナキヲ以テ刑法第二條ニ從ヒ無罪ト判決シ其収監ヲ放免セリ同裁判所檢察官高木昆要ニ於テ右裁判ヲ不當ナリトシ上告セリ其旨趣ハ被告ノ所爲ハ刑法第三百九十五條ニ據リ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處スヘキモノナリ而ルヲ原裁判所ハ被告カ所爲ハ一時金融ノ爲メ借車

ヲ抵當ト爲シタルモ費消スルノ念アルニ非ストシ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリト云フニ在リ大審院檢事ハ其意見ヲ陳述シテ曰シ原裁判ハ擬律ノ錯誤アルモノナレハ原檢察官カ刑法第三百九十五條ヲ適用ス可キトノ論旨ハ相當ナラス云々被告ハ他人ノ車ヲ以テ吾所有ニ歸スルモノト偽リ之ヲ抵當ニ差入レタルモノナレハ刑法第三百九十三條ニ據リ處分スヘキトハ當然ニシテ要スルニ無罪ト言渡シタルハ擬律ノ錯誤ニ出テタル不適當ノ裁判ナリト云フニ在リ玆ニ公式ヲ履行シ裁判スルノ理由ハ一件書類ニ就テ事實ヲ鑑査スルニ被告ハ川口玉吉カ所有ノ人力車ヲ以テ將ニ自己ノ所有ニ歸スヘキモノト偽リ青木權兵衛ヘ借金ノ抵當ニ充タルモノ之ヲ法律ニ照スニ刑法第三百九十三條ニ他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ストアリ詐欺取財ノ罪即刑法第三百九十條ニ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

價以下ノ罰金ヲ附加ストアリ刑法第三百九十四條前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ストアリ被告ノ刑ハ此ノ如キナルニ原裁判所カ之ヲ無罪ト言渡シタルハ疑律錯誤ノ裁判ナリトス因テ原裁判ヲ破毀シ治罪法第四百二十九條ニ據リ本院ニ於テ直ニ裁判スル左ノ如シ

林 捨五郎

前理由ノ筋合ナルニ付刑法第三百九十三條ニ依リ同第三百九十四條ニ照シ二月ノ重禁錮ニ處シ四圓ノ罰金ヲ附加シ仍ホ同第三百九十四條ニ據リ六月ノ監視ニ付ス

大審院ニ於テ檢事澄川摺三立會宣告ス

明治十五年十二月廿八日

裁判長判事 中島 錫胤 專任判事 關 義 臣

判事 鳥居 齋三 同 山根 秀介

同 昌谷 千里 書記 中西 眞 淑

〔要領〕人ノ借用証書ヲ偽造シテ債主ヨリ金圓ヲ受取リタルモ債主其情ヲ知テ協議上受授シタルニ於テハ私書偽造ノ罪アリト爲スモ詐

欺取財ノ罪ハ成立タサルモノトス

住所身分職業畧之

岡 崎 百 吉

年齡畧之

右百吉カ被告事件ニ對シ明治十五年四月十九日米澤輕罪裁判所ニ於テ被告百吉ハ父武次郎カ曩キニ宮澤淺次ニ証書差入金五十圓借用シアルヲ幸トシ明治十四年三月四日武次郎ノ他行中同人ノ証書押印ヲ爲シ金八拾圓ノ借用証書ヲ偽造シ右淺次ヨリ金三拾圓ヲ受取リタルモノトシ舊法ノ輕キニ從ヒ賊盜律詐欺取財條ニ依リ二等ヲ酌減シ懲役七十日ニ處ス但シ明治十四年第八十一號布告第十一條ニ照シ族ヲ

詐欺取財ノ罪反ヒ受寄財物ニ關スル罪

五〇九

除セストノ言渡ヲ爲シタリ檢事西村實ハ右ノ裁判ヲ不當ナリトシ上
 告スルノ要旨ハ該証書ノ成立タルヤ債主淺次ト被告百吉トノ協議ニ
 出タルモノニシテ被告ハ毫モ債主ヲ欺罔シタルニ非ス且ツ被告ハ父
 武次郎カ他行中家事ヲ代理シ該金ハ其家事ニ使用シタルモノナレハ
 私文書偽造ノ罪ハアルモ詐欺取財ノ罪ハ成立サルモノナリ故ニ宜シ
 シ舊法例第二百四十六條ヲ適用スヘキニ原裁判ノ此ニ出テサルハ不
 法ナリト云フニアリ本院檢事加納久宣ニ於テハ前顯土告趣意ノ如ク
 原裁判ノ不當ヲ認ムルノミナラス仮リニ被告ハ父ノ印影ヲ盗用シタ
 ル者ト爲スホハ債主淺次モ其証書製造ノ幫助ヲ爲シタル者ニ付共犯
 者タルヲ免カレス而シテ其証書ハ未タ以テ父武次郎ニ對シ其催促等
 ヲ爲サ、ル間ハ是レ未タ行使セサルノ豫備犯ニシテ法律上刑ヲ科ス
 ヘキモノニアラス就テハ原裁判ハ其證據ノ事實ト言渡ノ理由ト齟齬
 アルモノニシテ治罪法第四百十條等九項ニ相當スル上告ノ原由アル

モノニ付同第四百廿八條ニ依リ破毀ノ上他ノ裁判所ニ移サレノ一ヲ
 希望スルトノ意見ヲ述ヘタリ
 乃チ之ヲ審按スルニ原裁判所ノ言渡書ニ被告カ借用証書ヲ偽造シタ
 ルト金三拾圓ヲ受取リタルト明示シ以テ事實ノ理由ト爲シタレハ
 其証書ハ偽造ニ係ルモ三拾圓金ハ欺キ取リタルニ非スシテ協議上授
 受シタルヲ知ルヘク就テハ法律上ノ詐欺取財ト爲スヘキモノニ非サ
 ルヲ多辨ヲ要セス且其証書果シテ偽造ニ係ルナレハ此ヲ社ソ偽造証
 書ノ各本律ニ照シ行使未行使ヲ分チ相當ノ裁判ヲ爲スヘキニ其裁判
 ヲ爲サスシテ却テ單ニ詐欺取財條ニ問擬シタルハ是レ事實ト法律ト
 前後其理由ノ齟齬アルノミナラス又其理由ノ附セサルモノアリ因テ
 治罪法第四百十條第九項ノ場合ニ適當セル不法ノ裁判ナリトシ同第
 四百廿八條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ若松輕罪裁判所ニ移シ之ヲ審判セ
 シムルモノ也

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年一月十九日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 木付義路

判事 大塚正男 同 兵頭正懃

同 小村壽太郎 書記 松本正利

〔要領〕罪ノ成否ニ緊要ナル事實ノ理由ヲ明示セスシテ刑ヲ言渡シタル

ハ治罪法第三百四條ニ背反シタル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

高谷源五郎

年齡畧之

同

佐竹濟治

同

同

佐々木圓四郎

同

明治十五年三月十八日磐井輕罪裁判所ニ於テ右源五郎ハ他人ノ家屋
ヲ冒認シテ販賣シタル者ナリトシ所犯新法施行前ニ在ルヲ以テ新舊
ノ法ヲ比照シ其輕キ刑法第三百九十三條第三百九十條ニ依リ重禁錮
三月ニ處シ償金百圓ハ被害者ニ還ス可シ濟治圓四郎ハ源五郎カ冒認
販賣ノ所爲ヲ容易ナラシメタル者ト爲シ新舊ノ法ヲ比照シ其輕キ刑
法第三百九十三條第三百九十條第九條及第八十九條第九十條ニ依
リ而シテ濟治ハ二等ヲ通減シ重禁錮一月半ニ處シ圓四郎ハ三等ヲ通
減シ重禁錮一月ニ處ストノ言渡ヲ爲シタル同裁判所檢事補福島小太
郎ハ之ヲ不當トシテ上告セリ其要旨ハ被告人カ冒認ノ罪証ハ到底充
分ナラス而シテ原裁判上認定シタル事實ノ理由ハ被告人源五郎カ村

詐僞取財ノ罪及ト受寄財物ニ關スル罪

役場印鑑簿ニ在ル菊助ノ實印ト相違セシ押印ノ証書ヲ以テ該建家
 ヲ買得シタル證據トナシ之ヲ他へ賣却シタルハ即チ冒認販賣ノ事實
 ナリトスルナリ然ラハ被告人ノ所爲ハ不完全ノ証書ヲ以テ完全ノ証
 據ナリト誤認セシニ原因シタル者ニシテ故意ノ所爲ト謂フ可カラス
 是事實ノ理由ニ齟齬アル不當ノ裁判ナリト云フニ在リ本院檢事加納
 久宣ハ其印影ノ異ナルコトハ果シテ買主ノ詐術ニ係リタルカ果テ賣主
 ノ稍狡手段ニ出タルカチ問ハス單ニ印影相違ノ廉ヲ以テ冒認ノ罪ア
 リトシ輕卒ニモ被告等ヲ刑法第三百九十三條及ヒ該從犯トシテ處斷
 シタルハ言渡ノ理由ノ不備ナル裁判ナリトノ意見ヲ陳述セリ依テ判
 決スル左ノ如シ

訴訟書類ヲ閱スルニ被告事件ハ源五郎ニ於テ曾テ千葉菊ノ所有ノ家
 屋ヲ買受ケタリトシテ取毀テ他へ之ヲ賣渡シ濟治園四郎ハ其事ニ立
 會タル者はナリ而シテ原裁判言渡書ヲ見ルニ前段偏ニ被告人カ辯護

ノ理由ナキコト買得証書ノ無効ニ屬ス可キ旨ヲ排列シ其末忽チ村役
 場ノ印鑑簿ト相違セシ印影ノ証分ヲ以テ已ニ建家ヲ所有セシ證據ト
 ナシ而シテ之ヲ吉助ニ金六拾圓ニ賣却シタルハ被告人ニ於テ當時逃
 亡菊助ノ家屋ヲ冒認シテ之ヲ吉助ニ販賣シタル事實ナリト認定ス
 斷言シタリ之ヲ約言スレハ印影相違ノ証書ヲ以テ該家屋ヲ所有セシ
 證據ト爲シ他へ賣却シタルハ即チ冒認販賣ノ事實ナリト云フニ外ナ
 ラスシテ其事實ヲ認定セシ所ノ証憑ノ何タルヲ明示セサルハ即チ事
 實ノ理由ヲ付セザル者ナリ且ツ本院檢事ノ意見ノ如ク該証書面印影
 ノ相違ハ果シテ源五郎ノ所爲ニ出テ源五郎ハ之ヲ誤信シテ領收シ置
 キタルカ是等ノ事由ハ本案罪質ノ組成スルト否ニ付頗ル緊要ノ點ト
 ルニ原裁判上更ニ之ヲ審明舉示セサルハ事實ノ理由ニ不備アル者ト
 ハ又濟治園四郎ニ對スル原裁判言渡ニ於ケル事實ノ理由ヲ付セザル
 コト不備ノ點ハ亦猶前ニ辨明シタル旨ト同一ナリトス

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ被告事件ヲ仙臺輕罪裁判所へ移シ更ニ審判セシムル者也
大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年四月十二日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 高 木 勤

判事 大塚 正男 判事 山根 秀介

判事 昌谷 千里 書記 飯 島 偉

〔要領〕他人ヨリ借受ケタル物品ヲ物主ニ返還セスシテ擅ニ携帶逃走シタルハ携帶ノ所爲ニシテ費用受寄財産ニ非ス

住所身分職業畧之

西 本 熊 太 郎

年 齡 畧 之

明治十五年三月三十一日 高梁治安裁判所ニ開キタル岡山輕罪裁判所

ニ於テ西本熊太郎カ被告事件ヲ審判シ受寄ノ財物ヲ費用セシ罪アリトシ新法施行前ノ犯罪ナルヲ以テ新舊ノ法ヲ比照シ舊法ニ從ヒ費用受寄財産條ニ依リ賍金三圓五十錢坐賍ヲ以テ論シ一等ヲ減シ懲役十日ノ刑ヲ言渡シタリ檢察官岡山縣警部補小島直尋ハ其裁判ニ對シ上告ヲ爲シ其要旨ハ被告人カ他人ヨリ借用セシ大鋸ヲ携帶シテ逃走シタルハ携帶ノ所爲ニシテ即チ詐欺取財ヲ以テ論ス可キ者ナルニ原裁判所カ受寄ノ財物ヲ費用セシ者ト爲シ處斷シタルハ錯誤ノ裁判ナリ若シ之ヲ適當トスル時ハ費用受寄ノ賍タル坐賍ヲ以テ論シ一等ヲ減スヘキ者ナレハ賍金五圓以下ハ減盡シテ無科ナルヘシ之ヲ要スルニ誤斷ノ甚シキ者ナリト云フニ在リ大審院檢事加納久宣ハ被告人ノ所爲ハ携帶ヲ以テ論ス可キ者ニ非ス原裁判所カ費用受寄財産律ニ據シタルハ不當ニ非サルモ其賍金五圓以下ナルニ因リ減盡シテ無科ト言渡スヘキニ懲役十日ニ處斷シタルハ擬律ノ錯誤ナリトノ意見ヲ陳述

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

シタリ依テ之ヲ審案スルニ被告ノ携帶シタル大銀ハ森岡房造ヨリ貸
興シテ營業ヲ爲サシメタル者ナレハ即チ借用セシ物品ニシテ寄託ヲ
受ケタル財物ニ非ス其借用物品ヲ物主ニ返還セヌシテ擅ニ携帶逃走
シタルモノナレハ携帶ノ所爲ト謂ハサルヲ得ス然ルニ原裁判所カ費
用受済財産條ニ依リ處斷シタルハ擬律ノ錯誤アル不法ノ裁判ニシテ
上告ノ旨趣正當ナリト判定ス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ノ成規ニ從ヒ原裁判言渡
ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ裁判ヲ爲スコト左ノ如シ

西本熊太郎

右西本熊太郎カ他人ヨリ借用セシ大銀ヲ携帶逃走シ終ニ之ヲ賣却費
消シタル所爲ハ原裁判言渡書ニ其事實証憑ヲ明示セシニ因リ他人ノ
所有物ヲ携帶シタル罪アル者ト確認ス所犯新法施行前ニ在ルヲ以テ
刑法第三條末項ニ依リ新舊ノ法ヲ比照スルニ新法ニ在テハ刑法第三

百九十五條ノ末文ニ若シ騙取携帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財
ヲ以テ論ストアルニ依リ同第三百九十條ニ照シ二月以上四年以下ノ
重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加シ仍ホ同第三百九十
四條ニ依リ六月以上二年以下ノ監視ニ付スヘキ者タリ舊法ニ在テハ
賊盜律詐欺取財條ニ依リ窃盜ニ準メテ論シ贓金一圓以上懲役六十日
ニ該ル者ニシテ舊法ノ刑期新法主刑ノ短期ニ等シキヲ以テ新法ニ從
ヒ二月ノ重禁錮ニ處スルモノナリ

但明治十四年第八十一号布告第六條第十條ニ從ヒ罰金監視ヲ附加
セス

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

裁判長判事 大塚 正男 專任判事 昌谷 千里

判事 山根 秀介 同 主師 經典

同 高木 勤 書記 飯島 偉

詐欺取財ノ罪及ヒ受済財物ニ關スル罪

〔要領〕民事上被告ノ位置ニ立テ巧ニ辨護ヲ爲シ其義務ヲ免レタルモ故
テニ詐術詭計ヲ作爲シテ人ヲ欺罔シ以テ財物若クハ証書類ヲ騙
取シタルニ非サレハ詐欺取財ヲ以テ論ス可キモノニ非ス

住所身分職業畧之

室 塚 米 吉

年齢略之

右米吉カ被告事件ニ係ル豫審ノ故障ニ付明治十五年九月二十一日七
尾輕罪裁判所會議局於テ故障申立ハ理由ナキ者トシ豫審判事於テ被
告ハ刑法第三百九十條ニ依リ罰セラルヘキ者トシ治罪法第二百二十
六條ノ規則ニ從ヒ七尾輕罪裁判所ニ移ストノ言渡ヲ認可スル旨判決
シタル處被告米吉ハ上告ヲ爲シタリ其主旨ハ被告於テ中谷(キソ)ニ借
金ナキノミナラス更ニ証書差入タル覺ナク(キソ)ニリ原裁判所ヘ提供
シタル証書ハ何人ノ偽造ニ出ル者ナリ故ニ民事詞訟ノ際該証書ハ被

告ノ自筆ニ非ス自印ニ非サル旨ニテ被告ハ返金ノ義務ナキ者ト判決
セラレタルニ非スヤ然ルニ豫審判事於テ被告ヲ詐欺取財者ナリトシ
七尾輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタルハ事實理由ノ阻礙ナルノミ
ナラス擬律ノ錯誤ナリ將越權ノ處分ナルニ付原裁判所會議局ヘ故障
爲シテ該言渡ノ破毀ヲ請求シタル處同會議局於テ治罪法第二百四十
六條三項ニ定メタル故障ノ理由ナキ者トシ豫審判事ノ言渡ヲ認可シ
タルハ不當ナリト云フニ在リ原裁判所檢事補枸杞杖太郎ハ會議局ノ
判決相當ニシテ上告ノ理由ナキ旨答辨セリ玆ニ專任判事ノ報告書ニ
依リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審案スルニ原裁判所會議局ニ於テ故
障ヲ爲スノ理由ナキ者トシテ認可シタル豫審終結言渡書ニ舉示シタ
ル被告ノ事實ハ(己)ニ取受ケタル証文面記載ノ金額ヲ勸解及民事ノ詞
訟ニ於テ巧言以テ事實ヲ欺隱シ正價ノ義務ヲ脱シタルト云ニ過キス
尙訴訟書類中中谷(キソ)ノ告訴狀ヲ參照スルニ亦是被告ハ勸解廷及ヒ
詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

民事訴訟ニ於テ証書ハ差入タル覺ナシ印影モ相違セリト答辨シ而シテ遂ニ裁判上該証書ヲ斥ケラレ原告曲者タルノ判定テ下サレタリトシテ狀況ニ外ナラス然ハ止テ民事上被告ノ位置ニ立テ巧ニ辨護ヲ爲シ其義務ヲ免レタル者ニシテ故ラニ詐術詭計ヲ作爲シテ人ヲ欺罔シ以テ財物若シハ証書類ヲ騙取シタルニアラサルヲ以テ詐欺取財罪ヲ構造スヘキ性質ヲ具備セサル者トス然ルニ終結言渡ニ於テ右舉示シタル事實ハ是レ人ヲ欺罔シテ財物ヲ騙取シタルト同一ナリト擬斷シ刑法第三百九十條ヲ以テ罰セラルヘキ者ト爲シタルハ專恣即チ越權ノ處分ナルヲ免レサルニ因リ原會議局ニ於テハ當然前終結言渡ヲ取消シ而シテ該事實ハ更ニ罪トナラサルヲ以テ治罪法第二百二十四條ニ照シ直チニ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キ者ナルニ處分茲ニ出テサリシハ乃チ法律ノ適用ヲ誤リタル不法ノ判決ナリトス依テ治罪法第四百二十八條及七第四百二十九條ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁

判スルコ左ノ如シ

室 塚 米 吉

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第二百二十四條第二項ニ照シ免訴且放免スルナリ

於大審院檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月二日

裁判長判事 中島 盛有 專任判事 石井 忠 恭

判事 土師 經典 判事 高木 勤

判事 黒岩 直方 書記 黒田 鍊

〔要領〕(一)重抵當ノ罪アリト斷定シ其書入質証書ノ有効無効ヲ審明セ

サルハ治罪法第三百四條ニ背反シタル不法ノ裁判ナリトス

(二)刑事ノ裁判ニ先テ民事ノ裁判ヲ爲シタル場合ト雖モ單純ナ

ル民事ノ裁判ニ係ルハ治罪法第六條ニ抵觸スルモノニ非

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

住所身分職業等之

高橋平四郎

年齡等之

重典物犯罪被告事件ニ付明治十五年十月二十三日秋田輕罪裁判所ニ於テ右高橋平四郎カ所爲ニ對シ刑法第三百九十三條ニ依リ同第三百九十條ニ照シ重禁錮三月罰金十圓ニ處シ仍ホ刑法第三百九十四條ニ從ヒ監視一年ヲ附加セリ

被告高橋平四郎ハ之ヲ不法トシ上告ヲ爲シタル趣旨三項ナリトス其一債主ノ要求ニ依リ止ヲ得ス演劇場ヲ二重抵當ト爲シタル者ニシテ其所爲欺隱ニ出テタルニアラサレハ詐欺取財ヲ以テ論セラル可キ者ニアラス其二證書ハ地主ノ奥印ヲ缺キタル者ナレハ固ヨリ書入質ノ効ナキ者ナリ其無効ノ證書ヲ以テ二重抵當ト判定セシハ不當ト云ハ

サル可ラス其三民事ノ裁判ヲ先ニシ刑事ノ裁判ヲ後ニシタルハ治罪法第六條ノ規則ニ抵觸スル者ナリ以上ノ理由ニ由リ原裁判ノ破毀ヲ求ムト謂フニ在リ

對手人檢事補上倉繁藏カ答辨ノ要領ハ原裁判ハ事實證據ニ依リ適法ノ處斷ヲ爲シタル者ニシテ實ニ其當ヲ得タル旨ヲ開陳セリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ依リ檢事加納久宣ノ意見ヲ聽クニ上告論項中其第一第三ノ趣旨ハ不相當ト雖モ其第二ノ陳辨スル處ノ建物書入ノ證書タル一モ地主ノ奥書アルニアラサレハ裁判所於テ之カ裁判ヲ爲サントセハ必ス先ツ該證書ハ明治八年第四百四十八號布告第二條ニ原キ書入質ノ効アリヤ否ヲ審理セサル可ラス若シ此證書ニシテ書入ノ効ナキ者トセハ重抵當ト言フヲ得ス既ニ重抵當ト言フヲ得サレハ被告人ノ所爲ハ刑法第三百九十三條第二項ヲ以テ論ス可ラサル者ノ如シ抑建物書入規則ノ如キハ一般人民周知スル處ニシテ就

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

中是等權利者ハ常ニ宜ク注意スヘキ必要ノ事項ナリト云フ可シ然レハ則被告ノ所爲亦未タ必ス債主ヲ詐欺シテ金圓ヲ騙取シタル者ナリト言フ可カラズ然ルニ原裁判官ハ該証ノ効力有無ヲ攔キ詐欺取財ヲ以テ處斷シタルハ即チ治罪法第四百十條第九項ニ相當スル破毀ノ理由アル者ト考量スル旨ヲ辨明セリ依テ裁判スルノ如シ

本件上告趣意書第一項ハ單ニ事實ヲ辨駁シテ原裁判ノ認定如何ヲ論難シ第三項ハ治罪法第六條ニ公訴私訴並起ル時云々トアルヲ誤解シタル者ニシテ單純ナル民事ノ裁判ヲ先後爲シタル場合ヲ指摘シタル律意ニアラサレハ俱ニ上告ノ理由不相立者トス然リ而シテ其第二項ニ論辨スル處ノ地主ノ奥印ナキ書入質ノ證書ハ明治八年第四百八號布告諸建物書入質ノ規則第二條ニ照シ其効チ有スルヤ否ヤハ本案最モ審理ヲ盡ス可キ要點ニシテ其事實ノ理由ヲ明示セサル可カラズ然ルチ原裁判官ハ是等必要ノ點ヲ説明セス輒シ刑法第三百九十三條

第二項ニ原キ詐欺取財ヲ以テ論斷シタルハ治罪法第三百四條ニ背戻シタル裁判ニシテ治罪法第四百十條第九項ニ相當スル上告ノ理由アル者トス依テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ更ニ山形輕罪裁判所酒田支廳ニ移シ審判セシムルモノ也

於大審院檢事林三介立會宣告ス

明治十六年八月十九日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 山根 秀介

判事 石井 忠恭 判事 高木 勤

判事 園田 弘 書記 津田 重熙

〔要領〕負債ノ抵當トシテ他ニ書入アル貸金証書ヲ騙取シタルモノト判
定シ其欺罔シ騙取シタル手續ヲ示サハルハ治罪法第三百四條
ニ違背シタル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

詐欺取財ノ罪及ヒ受害財物ニ關スル罪

明治十五年十月十二日福岡輕罪裁判所ニ於テ右貞太郎ノ所爲ハ負債ノ抵當トシテ他ニ書入アル借金證書ヲ騙取シタル者ト爲シ刑法第三百九十四條同第三百九十四條ヲ適用シ重禁錮一年六月罰金二十圓ニ處シ監視一年ヲ附加スト宣告セリ

被告上野貞太郎ニ於テハ右ノ裁判ヲ不法ナリトシ上告ヲ爲シタリ其要領ハ被告人カ曩キニ所有金ヲ出シ他ニ貸與シタル證書ヲ以テ抵當ト爲シ同社員吉村利平等ト談合シ同人ヲ借主ト爲シ塚本安次ヨリ金圓ヲ借入シタリ其後被告人ハ塚本安次ニ談シ右抵當ノ證書ヲ借り受ケ其証書面ノ負債主ニ對シ貸金ノ返辨ヲ請求シ其内金返辨セシメタルモノナリ故ニ抵當ノ證書ヲ騙取シタルモノニアラスト云フニアリ大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ判決スル

ト左ノ如シ

凡欺同誑騙ノ所爲ハ其意思ヲ措キ結果ノミヲ推測シテ直ニ犯罪ノ成立タル者ト爲ス可ラス即チ被告事件ノ如キ場合はナリ抑被告人カ曩ニ古賀久太ヨリ領置シタル借金證書ヲ抵當トナシ社員吉村利平等ト謀リ同人名義ヲ以テ塚本安次ヨリ金員ヲ借り入シタリ其後右抵當ノ證書出訴ニ付入用ノ旨ヲ以テ安次ヨリ借受ケ直ニ久太ニ對シ民事訴訟ヲ起シ和解ノ上該証書面金額ノ幾分ヲ收受シテ其殘額ノ權利義務ヲ解除シタル事蹟ハ原裁判言渡書及ヒ詞訟書類ニ付テ判然タリ而シテ被告人カ安次ヨリ証書ヲ借受タルニ際シ其意思ノ如何ハ固ヨリ推測ノ及フ處ニアラス又其結果ニ至テモ自ラ意思ニ臆胎シ未ダ之ヲ證明ス可ラサルニ原裁判官ハ被告人上野貞太郎ハ曾テ吉村利平ト共有金千三百拾四圓古賀久太ヘ貸シ付アル證書ヲ抵當トシ利平ノ名前ヲ以テ塚本安次ヨリ金圓借用シ追テ該抵當証書自己ノ名前ナルヲ幸ト

詐欺取財ノ罪及ヒ受済財物ニ關スル罪

明治十五年三月中右安次チ欺罔シ其証書ヲ騙取シタル者ト判定ス
トノミアリテ其欺罔シ騙取シタルノ手續ハ毫モ之ヲ明示セサル者ナ
リ是治罪法第三百四條ノ規則ニ背戾シタル不法ノ裁判ニシテ治罪法
第四百十條第九項ニ定メタル破毀ノ原由アル者トス
右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ更
ニ佐賀輕罪裁判所ニ移シ審判セシムル者也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年九月十四日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 山根 秀介

判事 大塚 正男 判事 高木 勤

判事 昌谷 千里 書記 上田 庸熙

〔要領〕元訴ノ言渡ニ對スル上告ハ成立タサルモノトス

住所身分職業畧之

中山 米 吉

年齡畧之

他人ノ田地ヲ冒認セシ被告事件ニ付明治十五年八月廿六日高知輕罪
裁判所會議局ニ於テ豫審終結ノ言渡ヲ認可シ其故障申立ヲ棄却スル
旨判決シタルニ服セス米吉ハ上告セリ其要領ハ曾テ西尾嘉平ノ田地
ヲ冒認セシ事ハ之無ク全ク買得セル事實ナルニ拘ハラス冒認セシモ
ノト爲スノミナラス其言渡ニ於ル事實並ニ法律ニ因リ其理由ヲ付セ
サルハ治罪法第二百廿八條第一項ノ規則ニ背戾セリ而該事實ハ未ダ
被告ノ辯論中ニ係リ確固ナラサルニ既ニ終結シタルハ越權タルヲ以
テ服從スル能ハス依テ會議局ニ故障申立ヲ爲シタルニ被告ノ故障ニ於
テ治罪法第二百四十六條ノ場合ニ止マリ免訴ノ言渡ニ對シテハ故
障ヲ爲スヲ得ヘキ明文ナキニヨリ棄却スト言渡サレタレト會議局ニ
於テハ豫審終結ノ言渡シタル果テ越權ニ係ルヤ否ヲ覆審シテ判決ス

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

へキニ偏へニ治罪法ノ明文ニ拘泥シテ故障ノ申立ヲ棄却シタルハ不服ナリト論辨シ猶其代言人畠中猛治ハ上告辨明書ヲ呈シテ前上告ノ趣意ヲ擴張シ加フルニ豫審判事ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ以處斷セサルヘカラス而其言渡ニ其明文且檢察官ノ氏名ヲ掲ケサルノミナラス被告人ノ職業モ亦記載セス且該言渡書ニ治罪法第十條ヲ引用セルモ全ク本案ニ關係ヲ有セサルモノニテ總テ違法ナリト云フニ在リ
檢察官檢事補布野萬長ハ右上告ノ不理ナルヲ逐一辨駁シテ該判決ハ至當ナリト答辨セリ

大審院ニ於テ專任判事伴正臣ノ報告ニ據リ立會檢事池上三郎ノ意見被告代言人武山助雄ノ陳述ヲ聽キ以判決スル左ノ如シ

治罪法第二百四十六條ヲ見ルニ被告故障ヲ爲スヲ得ヘキハ其第三項ニ掲グルノ點ニ止マルモノナレハ原裁判所會議局カ豫審終結ノ言渡ヲ認可シタルハ不相當ニ非ナリナリ而被告ハ豫審終結ノ言渡ニ對シ

事實ヲ論難スルモ總テ事實ヲ認定スルハ事實判官ノ權内ニ屬スルモノニテ敢テ之ニ侵入スルヲ得ス何ントナレハ治罪法第二百四十六條第二項ニ被告人ノ自狀官吏ノ檢証調書証據物件証人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ストアレハナリ然而其言渡ノ文中及ヒ審訊ノ間ニ於テ仮令規則ニ反スルノ點アルモ治罪法第四百十一條ノ明文アル上ハ被告ニ於テ本案ノ上告ハ爲スヲ得ヘカラスモノニ付其上告ハ成リ立タサルモノトス
右ノ如クナルヲ以治罪法第四百廿七條ニ從ヒ上告ヲ棄却スルモノ也
大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年九月十八日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 伴 正 臣

判事 薄 井 龍之 判事 園 田 弘

判事 小村 壽太郎 書記 篠原 安津志

詐欺取財ノ罪及ラ受寄財物ニ關スル罪

要領金錢ナシテ飲食スルモノハ一概ニ詐欺取財ヲ以テ論シ難シト雖モ當初ヨリ詐欺ノ念慮ニ出タルト明確ナルニ於テハ其罪ヲ問フ可キモノナルニ其心情如何ヲ推究セズシテ輒シ無罪ヲ言渡シタルハ事實ノ理由不備ニ係ル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

宇治川庄吉

年齢略之

詐欺取財被告事件ニ付明治十五年九月二日行本輕罪裁判所ニ於テ被告ガ無代價ニテ飲食シタル所爲ニ對シ刑法第二條ニ依リ無罪ノ言渡ヲナシタリ

原檢察官ハ右判決ニ對シ上告ヲナシタリ其ノ要領ハ凡ソ旅亭ニ於テ飲食スル者ハ即時其ノ代價ヲ交附スルヲ以テ一般ノ習慣トナス故ニ飲食ノ代價ヲ拂ハスシテ逃走スル者ヲ以テ負債辨償ノ義務ヲ逸レシ

ル者ト謂ヲ得サルヤ論ヲ俟タス又刑法第三百九十條ノ欺罔トハ其意義頗ル汎クシテ無實ノ希望ヲ生セシメ人ノ財物ヲ騙取スル所爲即チ被告事件ノ如キ無論之ヲ包含スル者ナリ然ルニ原裁判所カ被告ニ對シ無罪ノ言渡ヲナシタルハ失當ノ裁判ナルヲ以テ之カ破毀ヲ求ムト云フニアリ茲ニ本院檢事ノ意見ヲ聞キ判決スル左ノ如シ

金錢ナクシテ飲食スル者ハ一概ニ詐欺取財ヲ以テ論シ難シト雖モ當初ヨリ詐欺ノ念慮ニ出テタルト明確ナルニ於テハ其ノ罪ヲ問ハサルヲ得ス抑モ被告ハ金錢ナク旅亭ニ投宿シ妄ニ飲食シタル后其代價ヲ償フノ目的ナキヲ以テ名ヲ金策ニ托シ外出シ即時歸ルト偽リ其儘逃走シタル者ニシテ詐欺ノ形跡顯然タルモノ、如シト雖モ被告カ心情如何ヲ推究シ果ソ當初ヨリ無代價飲食スルノ念慮アリシヤ否ヤヲ判定スルハ原裁判所ノ特有スル權内ニ屬スヘキ者トス然ルニ原裁判カ被告ニ於テ故サテニ偽名ヲ用井又ハ身分ヲ詐稱スル等詐欺ノ情狀ナキ

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

ヲ以テ其罪ヲ不問ニ措クノ理由ト爲シ被告カ心情如何ニ論及セズ
輒シ無罪ノ言渡ヲナシタルハ事實ノ理由不備ニ係ル不法ノ裁判ニシ
テ法律適用ノ當否ヲ鑒スルニ由ナキモノトス因テ治罪法第四百二十
八條ニ基キ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ浦和輕罪裁判所熊谷支廳ニ移
シ更ニ審判セシムルモノ也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年九月二十七日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 小村 壽太郎

判事 伴 正 臣 判事 薄 井 龍 之

判事 園 田 弘 書記 香 田 能 興

〔要領〕土地ニ附属シテ生立中ノ樹木ハ固ヨリ不動産ト認ム可キモノナ
レハ之ヲ重テ典賣シタルモノハ即チ重典賣ノ刑ハ免ル、チ得
ス

新法實施前後ニ涉ル數次ノ犯罪ヲ單ニ新法ノミニ依リ處斷シタ
ルハ擬律ノ錯誤タルノミナテス法律ノ理由ヲ付セサル不法ノ裁
判ナリトス

住所身分職業略之

川 西 清 三 郎

年 齡 零 之

重典賣犯罪被告事件ニ付明治十五年十月九日奈良輕罪裁判所ニ於テ
右被告人ハ畑地ニ生立スル桐樹ヲ他ニ抵當トナシ借金シタル後擅ニ
伐採シ又他ニ賣却シタル者ト判定シ刑法第三百九十三條同第三百九
十條同第三百九十四條ニ依リ重禁錮一月罰金二圓ニ處シ監視六月ヲ
附加スト宣告セリ

被告川西清三郎ニ於テハ右ノ裁判ヲ不法ナリトシ上告ヲ爲シタル趣
旨ハ本案ノ桐樹ハ擅伐シタルニ非ス債主來田庄三郎後見人來田庄作
誹欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

ノ許諾ヲ得テ伐採シタル者ナリ其証ハ債主ノ土地ト該木ノ生立スル畑地トハ隣接シ之ヲ明治十四年ヨリ同十五年三月迄ノ間數次ニ伐採スルニ未タ曾テ故障ヲ爲サ、ルノミナラス一言ノ啄ヲ容レサリシハ撞伐ニアラスシテ其許諾ヲ得タルヲ昭々タル可シ且原裁判ハ刑法第三百九十三條ヲ適用シ其第一項ニ該ルヤ第二項ニ該ルヤテ明記セサレハ法律ノ理由ヲ附セサル裁判ナリ加之元來桐樹ハ動産ナルヤ不動産ナルヤノ事實ヲ明示セサル可カラス果テ動産トスル時ハ刑法中自己ノ動産ヲ抵當トナシ重テ賣却スル者ヲ處スヘキ正條ナキヲ以テ到底被告人ハ無罪ニ歸ス可キ者ナリト云フニ在リ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ依リ檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ判決スルヲ左ノ如シ

原裁判所ニ於テ判定シタル事實ニ因リ上告事件ヲ審案スルニ上告人川西清三郎カ犯罪タル曾テ抵當ト爲シタル桐樹ヲ明治十四年ヨリ明

治十五年三月迄ノ間數次ニ伐採シタルニ在リ而シテ上告人カ該樹ヲ伐採シタルハ債主ノ許諾ヲ得タル者ナルヤ將テ撞伐ナルヤノ論旨ハ上告人カ辨スル如ク明治十四年ヨリ明治十五年三月迄ノ間數拾本ヲ伐採シ殊ニ其生立スル土地タルヤ債主所有ノ土地ニ接近シタル場所ニシテ債主ニ於テ其伐採スルヲ知ラサルノ理ナク之ヲ知テ故障ヲ爲サ、ルハ何等ノ原由ナルヤノ點ハ覆審ノ理由トナス可キモ上告ノ原由ト爲ス可カラス又土地ニ附属シテ生立中ノ樹木ハ固ヨリ不動産ト認ム可キ者ナレハ重典賣ノ刑ハ免ル可ラサルヲ以テ其申立ハ不相立ト雖モ被告人ノ所爲タル新法施行ノ前後ニ涉ルヲ以テ其施行後即チ明治十五年中ノ犯罪ハ單ニ新法ニ依リ處斷スヘキモ其施行前即チ明治十四年中ノ犯罪ハ刑法第三條及明治十四年第八十一號布告ニ照シ新舊法ヲ比照シ舊法ニ在テ果テニ重典賣ヲ爲シタル者トスルハ詐欺取財條ニ依リ其贓數ヲ明示シ刑期ヲ定メ而シテ新舊法ノ輕重ヲ鑒別

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

スヘキ者トス然ルヲ原裁判ハ單ニ新法ノミニ依リ處斷シタルハ擬律ノ錯誤アルノミナラス法律ノ理由ヲ附セサル者ニシテ治罪法第四百十條第九項及第十項ニ該ル破毀ノ理由アル不法ノ裁判ナリトス依リテ治罪法第四百二十八條ニ從テ原裁判ヲ破毀シ京都輕罪裁判所ニ移シ更ニ審判セシムル者也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年十月十九日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 山根 秀介

判事 大塚 正男 判事 昌谷 千里

判事 小村 壽太郎 書記 上田 庸熙

要領 欺罔ノ手段ニ因リ得タル証書ヲ以テ金圓ヲ詐取セントセシ行爲ニ對シ証書騙取ノ罪及ヒ財物騙取ノ未遂犯ナリトセシハ一罪中ノ行爲ヲシテ二罪ナリト誤斷シタルモノナリ

又不正ニ得タル証書ト認メサルモノヲ沒收シタル擬律錯誤ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

鹽井・作次郎

年齡畧之

詐欺取財被告事件ニ付明治十五年十一月三十日高田輕罪裁判所カ之ヲ二罪ナリトシ一ツノ重キ刑法第三百九十條同第三百九十四條ニ依リ三年ノ重禁錮ニ處シ二十圓ノ罰金ヲ附加シ一年ノ監視ニ付スト言渡タル裁判ニ服セス上告セリ其要領ハ被告作次郎ニ於テ瑣國讓ノ依頼ヲ受ケ其代人トナリ勸解廷へ出願セシコアルニアラス果シテ其代人トシテ出頭セシモノナレハ其代人タルノ委任狀寫シ代人願一件限リナル受書此三通ヲ差出アルヘキ筈ナルニ是カ取調ヲモ爲サス代人トシテ出頭シタルモノトセラレタルハ審理不盡ナリト云ヒ而シテ上告追伸書ヲ以テ申立ル其第一ハ平野鉄十郎ノ申供ハ正實ニアラス

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

トノヲ第二証人下鳥喜七ノ陳述ハ被告人ノ罪ヲ斷スル証トスヘキ効力ナシトノヲ第三丹羽氏繁ノ陳述ハ被告人反對ノ証ヲ舉ケテ消滅スヘキ答ナリトノヲ第四國讓ハ普通証人トナスニ足ラス而シテ反對ノ証ヲ舉ケタルニ消滅セシメサリシトノヲ第五竹俣得乘ノ陳述ハ如何ナル理由ニヨリ被告人ノ罪ヲ斷スル効力アルヤ否ヤノヲ第六証據書類トハ貸金証書ノ三通ヲ指シタルヤ然ラハ則事實ニ齟齬アリトノヲ以上ノ如ク不法ノ裁判ナルニ因リ破毀ヲ求ムト云フニアリ

對手人檢事補堀小太郎ハ原裁判所當ナリトノ趣旨ヲ答辨セリ

大審院ニ於テ專任判事鳥居斷三ノ報告ニ因リ上告代言人池田有恒ハ上告及ヒ追伸書ノ趣旨ヲ擴張辨明シ立會檢事加納久宣ニ於テハ上告趣旨ノ理ナキヲ述ヘ續テ附帶上告セシ其要點ハ被告作次郎カ國讓ヨリ日當料トシテ金一圓五十錢ノ證書ヲ受取リタルモノナリト認メテカ多刑法第四十三條ニ依リ三通ノ證書ヲ沒收スト宣渡タルハ擬律錯

誤ナリト考量セリ加ルニ被告人カ得乘ヨリ受取リタル金二十圓八十錢ノ證書國讓ヨリ受取リタル金六圓五十錢ノ證書ハ共ニ欺罔ノ手段ヨリ得タルモノニテ刑法第三百九十條ノ罪ヲ成立セシモノナルニ原裁判所ハ却テ其末ニ就キ財物騙取ノ未遂犯ニマテ論究セシハ是亦擬律錯誤ナリト云フニアリ因テ之ヲ審按スルニ

上告ノ理由トスル處國讓カ代人トシテ勸解廷へ出頭シタルヲアルニアラサルニ原裁判所ハ其緊要トスル取調ヲ爲サス且追伸書第一ヨリ第六ニ至ル不服ヲ唱フルニアリト雖原裁判所ノ特任スル事實認定ニ侵入シ探證ノ當否ヲ論難スルニ過キサレハ破毀ヲ求ムルノ理由ト爲スナリ得ス何ントナレハ治罪法第四百十六條ニ被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ懲憑ハ裁判官ノ判定ニ任ストアレハナリ

附帶上告ノ理由ニ付訴訟書類ヲ見ルニ被告作次郎カ得乘ヨリ受取

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

ル金二十圓八十錢ノ證書及國讓ニテ受取タル金六圓五十錢ノ證書ハ欺同ノ手段ニ因リ得タルモノナリト見ルモ前ニ國讓ユリ日當料トシテ受取リタル證書ハ欺同ノ手段ヲ以テ得タルモノナリトモ見ルニ由シナク裁判言渡ヲ見ルモ其不正ニ得タルモノナリト認メタルニアラス突然外二通不正ニ得タル證書ト共ニ沒收シタルハ擬律錯誤ナリトス又被告作次郎カ得乘及ヒ國讓ニテ受取タル二通ノ證書ハ欺同ノ手段ニ出テタリト認メ刑法第三百九十條ヲ適施シタルハ尙當ナリト云フモ其得タル證書ヲ以テ金圓ヲ詐取セントセシ行爲ニ對シ財物騙取ノ未遂犯ナリト論及セシハ一罪中ノ行爲ヲシテ二罪ナリト誤認シタルモノニテ即チ證書騙取又ハ財物ヲ騙取セントセシモ共ニ刑法第三百九十條ノ支配スヘキ事實タル法文上明晰タレハ是亦擬律錯誤ニ係ル治罪法第四百十條第十項ニ該ル上告ノ原由アル裁判ナリト判定ス

右ノ如ナルヲ以テ治罪法第四百二十七條ニ依リ上告ヲ棄却シ附帶上告ニ付治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判ノ全部ヲ破毀シ直ニ裁判スル左ノ如シ

鹽井作次郎

原裁判言渡ニ認メタル事實ノ理由及ヒ證據ニ依リ詐欺取財ノ罪ヲ犯シタルヲ明白ナリ即チ此ノ事實ヲ罰スル法律ハ

刑法第三百九十條人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス同第三百九十四條ニ前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタルモノハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ストアルニ該ル

因テ被告鹽井作次郎ヲ重禁錮二年六月ニ處シ罰金二十圓監視八月ヲ附加シ竹俣得乘ヨリ受取タル金二十圓八十錢ノ證書及ヒ國讓詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

ヨリ受取タル金六圓五十錢ノ證書ハ之ヲ沒收シ外一通ハ被告佐次郎ニ還付スル者也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十二月二十一日

裁判長判事 伴 正 臣 專任判事 鳥居 斷 三

判事 溝 井 龍 之 判事 園 田 弘

判事 小村 壽 太郎 書記 宮 部 時 雍

〔要領〕詐欺取財ノ罪ヲ組成スル元素ノ具備セサル事實ヲ認メナカラ之ヲ有罪トシテ刑ヲ言渡シタルハ擬律ノ錯誤ニ係ルモノトス

住所身分職業畧之

笹川 四郎 兵衛

年齡畧之

同

吉田 市 兵衛

同

右兩名カ被告事件ニ對シ明治十五年十二月十八日大阪輕罪裁判所ニ於テ被告等ハ詐欺取財未遂犯ナリトシ刑法第三百九十條第三百九十七條第百十二條ニ依據シ仍ホ同法第八十九條第九十條ニ從ヒ各一月十日ノ重禁錮ニ處シ罰金三圓ヲ附加スト言渡シタル裁判ヲ不當ナリトシ被告兩名ハ上告ヲ爲シタリ其要旨ノ第一ハ事實ノ審理不盡ナルヨリ言渡ノ理由ニ齟齬アルトノ事第二ハ上告人等カ不實ノ告訴ヲ爲スモ不實ノ自首狀ヲ呈出スルモ他人ニ對シ害惡ヲ爲ス所爲ニアラス又其結果ニ至ルモ不正ニ物品ヲ己レニ入ルヲ得ヘカラサレハ不能犯ニ到底罪トナルノ事實ニアラスト第三假リニ罪アリトスルモ事發覺前官ニ自首セシヲ以テ宥恕減輕ヲ與ヘラルヘキニ減輕法ヲ適用セラレカリシハ不當ナリト云フニ在リ原裁判所檢事補 戶田 荒太郎

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

ハ原裁判至當ニシテ上告ノ非理ナル旨ヲ答辨セリ玆ニ大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ立會檢事竹内維積ハ上告ニ對スル意見ヲ陳述シ且ツ附帶上告ヲ爲スノ要旨ハ被告共ノ所爲ハ自家ノ損失ヲ恐レ已成ノ賣買ヲ破壞セントスルノ意思ノミニシテ詐欺罪ヲ作成スルニ必要ナル原素則チ特別ノ惡意アルヲ見ス又假リニ惡意アリトスルモ不實ノ自首詐欺ノ告訴ヲ爲シタルノミニシテ未タ現物ノ要求ニ至ラザレハ豫備中ノ行爲ニシテ已ニ其事ヲ行フタル者ニアラス然ルニ原裁判ハ詐欺取財ノ未遂犯ト爲シタルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在リ依テ之ヲ審檢スルニ承審官ニ於テ被告共カ所爲ノ事實ヲ判定スル處ニ依レハ被告笹川四郎兵衛吉田市兵衛ハ先ニ市兵衛ヨリ米三拾石笹川四郎兵衛へ賣渡シ四郎兵衛ハ右買受米ト我カ所有米ト合セ七拾貳石四斗ヲ明治十五年三月中内藤寅三郎へ賣渡シタル處寅三郎ヨリ右米代ノ内六圓六十二錢ヲ拂渡シタル地殘金六百七十五圓ヲ拂ハス然

ルニ四郎兵衛ニ於テ寅三郎カ身代限ヲ爲ス可クト妄想シ爲メニ米代金ノ損失ニ至ルヲ恐レ米三十石代金ノ受取り得サルニ至ルノ恐アルヨリ笹川四郎兵衛吉田市兵衛トモ田畑榮太郎ノ教唆ニ從ヒ右ノ七十石四斗ヲ元來笹川四郎兵衛ノ吉田市兵衛ヲ欺キタル所ノ賍物トナシ内藤寅三郎ヨリ取戻サンカ爲メ右七十二石四斗ハ悉ク明治十五年一月十五日一月三十日二月五日ノ三回ニ米着次第代金可仕拂約定ニテ吉田市兵衛ヨリ笹川四郎兵衛へ買受ケシモノニ虛構シ其旨趣ヲ以テ調製シタル買端書ヲ笹川四郎兵衛ヨリ吉田市兵衛へ渡シ置キ而シテ笹川四郎兵衛ハ明治十五年三月四日大坂會根崎警察署へ右ノ七十二石四斗ヲ吉田市兵衛ヨリ詐キ取リタル旨ノ自首狀ヲ呈出シ吉田市兵衛ハ同年三月七日同署へ該七十二石四斗ヲ四郎兵衛ニ詐取セラレシ旨ノ告訴狀ヲ呈出シ其審理中笹川常吉ヨリ右ノ自首并ニ告訴トモ不實ナル旨告發ニ及ヒ笹川四郎兵衛吉田市兵衛ハ終ニ目的ヲ遂ケサ

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

リテ者ト判定ストアリ抑詐欺取財ノ未遂犯タルヤ第一惡意ヲ以テ人ノ財物ヲ騙取セントノ決意第二人ヲ欺罔シ其目的ニ着手シタルノ第三意外ノ障礙ニ因リ其目的ヲ遂ケ得サリシトノ三原素ヲ具備スルヲ要スルモノナリ本件被告兩名カ所爲タルヤ前ニ掲ケタル事實ナレハ他人ノ財物ヲ騙取スルノ意思アルヲ見スシテ唯自己ノ損失ヲ豫防セントノ意思ニ出テ已成ノ賣買ヲ破壞セントシタルニ過キス假ニ之ヲ詐欺取財ノ意思アルモノト爲スモ不實ノ自首虛構ノ告訴ヲ爲シタル迄ニシテ其目的トスル財主ニ對シ毫モ欺罔シタル等ノ所爲アルニアラサレハ其決意ニ止リテ未ダ執行ニ着手セサルハ明カナルヲ以テ詐欺取財未遂ノ罪ハ未ダ成立サルモノナリ然ルニ原裁判官ハ此事實ヲ認メナカラテ刑法第三百九十四條第三百九十四條ヲ適用シ刑ノ言渡シヲ爲シタルハ即チ擬律ニ錯誤アル不當ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノトス其他被告兩名カ上告ノ旨趣ハ數項ニ涉ルト雖モ本件ノ緊

要ナル點ハ前ニ説明テ詳悉スルヲ以テ逐次ノ辨明ハ與ヘサルナリ右ノ理由ナルニ依リ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スル左ノ如シ

笹川四郎兵衛

吉田市兵衛

右兩名カ所爲ハ刑法上罰スヘキ正條之ナキヲ以テ治罪法第三百五十八條第二百二十四條ニ從ヒ無罪放免スル者也

大審院ニ於テ檢事武内維積立會宣告ス

明治十七年三月十二日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 土師經典

判事 石井忠恭 判事 兵頭正慈

判事 小村壽太郎 書記 笠慎三郎

(要領)事實罪ト爲ラサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シタルハ擬律錯誤ノ裁判詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

住所身分職業畧之

岡田安太郎

年畧之

明治十六年一月二十日千葉輕罪裁判所ニ於テ右岡田安太郎ニ對シ明治十五年五月中千葉始審裁判所扣所ニ於テ使丁賃金拂方ニ差支ユル逆同所辨當賄方鈴木喜太郎ヨリ金五十錢ヲ借受ケ右金ハ変米三ヨリ金三圓受取ル約束アルニ因リ之ヲ以テ返濟ニ充ツ可シト欺罔シテ金圓ヲ騙取シタル者トシ刑法第三百九十條ニ依リ重禁錮一年罰金十圓ニ處シ刑法第三百九十四條ニ從ヒ監視八月ヲ附加セリ

被告岡田安太郎ハ該裁判ニ對シ上告ヲ爲シタル趣旨ハ一時使丁賃金ニ差支ヘ鈴木喜太郎ヘ示談ヲ遂ケ金五十錢ヲ借用致シ返濟方ハ変米三ヨリ金三圓借用ス可キ約定アルヲ述ヘ四五日間ノ期限ニテ借用

シタルニ相違ナキモ該金ハ約定通り返辨致シタルハ決テ騙取シタルニアラス其後明治十五年五月十一日ニ至リ変米三ヘ差入タル証書ト云フハ右三ヨリ申スニ過日辨當賄方鈴木喜太郎ヲ以テ金三圓受取ニ遣シタルハ如何ノ心得方ナルヤノ旨談判ニ及フニ因リ曾テ借用ノ約束アル旨ヲ答ヘタルハ右様約定致シタル覺ヘ無之ニ付証書ヲ可差入トテ三ニ於テ擅ニ相認メ自分無學ナルヲ以テ印形ヲ渡シ之ニ押捺セシメタル者ニシテ此証書ヲ以テ犯罪ノ証具ト爲シタルハ不法ナリト謂フニ在リ

對手人檢事補山本辰六郎カ答辨ノ要旨ハ本件ノ起因ハ変米三ナル者犯罪アリ千葉縣警察官家宅搜索ヲ爲スニ當リ被告人カ右三ヘ宛タル諾書アルヲ發見シ該官ノ告發ニ係ル者ニシテ其事實ハ鈴木喜太郎ニ變米三方迄使ノ者雇方ノ周旋ヲ依頼シタルハ第一騙取ノ手段ニシテ變米三ノ名義ヲ假リタルハ信用ヲ確メン爲メナシタル第二ノ手段ナ

詐欺取財ノ罪及ヒ受害財物ニ關スル罪

ソハ詐欺取財ノ罪ニ該ツヘキヲ相當ナリト謂フニ在リ
大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ程式ヲ履行シ判決スルコト左ノ
如シ

本案被告事件ハ被害者鈴木喜太郎ノ訴ヘタルニ非スシテ
事件ニ係リ同人家宅搜索ノ際警察官ニ於テ被告人カ明治十五年十一月
月中差入タル謄書ナル者ヲ發見シタル末終ニ公訴ノ手續ヲ經タル者
ナルコトハ公判始末書及ヒ檢察官カ答辨書ニ明揭セリ而シテ被告人カ
喜太郎ヨリ借用セシ金五拾錢ハ數日ナラスシテ返濟シタルコトモ亦訴
訟書類ニ判然ヨリ抑詐欺取財ノ罪ヲ構造スルニハ意思及ヒ行爲ト結
果トナカル可ラス本件ノ如キハ貸借ニ成立返濟ニ結了ノ己ニ被害者
アルニ非ス仮ニ鈴木喜太郎ヲ被害者ナリトシ原裁判書ニ依テ之ヲ見
ルモ被告人ハ一時金圓ニ差支ユルヨリ
喜太郎ヨリ受取ル可キ金圓ヲ
リト言フ喜太郎ヨリ金五拾錢ヲ借用セシ者ナリ此場合ニ於テ設ヒ他

人ヨリ受取ル可キ金圓ヲモ被告人ト喜太郎トノ間ハ對談上ノ貸借
ニシテ之ヲ返濟スレハ可ナリ敢テ刑法ニ關涉スヘキ限ニ在ラス況ン
ヤ
喜太郎三カ家宅搜索中ニ得タル謄書ナル者ハ被害者ト被告人トニ關
スル者ニアラスシテ全ク喜太郎ト被告人トノ私事ヲ發キタル者ニ過
キカレハ被告事件ノ證據ト爲ス可キ者ニアラスナルニ於テチヤ依テ本
案被告人ノ所爲ハ罪ト爲ル可キ事實ナキ者ナルヲ原裁判所カ刑ノ言
渡ヲ爲シタルハ擬律錯誤ノ裁判ニシテ治罪法第四百十條第十項ニ定
メタル上告ノ原由アル者トス

岡田安太郎

前ニ辨明スル如クナルニ因リ刑法第七十七條ニ依リ其罪ヲ論セズ
大審院ニ於テ檢事澄川拙三立會宣告ス

明治十七年三月十二日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 山根秀介

詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

判事 大塚 正男

判事 山本 昌行

判事 薄井 龍之

書記 金井 丈夫

○ 贓物ニ關スル罪

要領 贓物タル情ヲ知リ之カ運搬ヲ爲シタルモノハ即チ贓物ノ寄藏者タルヲ免レサルナリ

住所身分職業畧之

渡 邊 勘 三 郎

年齡畧之

右勘三郎カ官林盜伐ノ樹木タル情ヲ知テ其運搬ヲ爲シタル事件ニ對シ明治十五年十月二十一日福岡輕罪裁判所ニ於テ右所爲ハ法律上罰スヘキ正條ナキモノトシテ刑法第二條ニ依リ無罪ノ言渡ヲ爲シタルヲ同裁判所檢事補井上計之助ハ之ヲ不當トシテ上告ヲ爲シタル旨趣ハ被告ハ當初渡邊與三郎カ雇ヲ受ケ同人カ官林ニ於テ盜伐シタル杉

木タルヲ知テ運搬中官林巡視ニ差押ヘラレタルモノナレハ刑法第三百九十九條及ヒ同第四百條ヲ適用スヘキモノナルヲ原裁判茲ニ出テサルハ擬律錯誤ノ裁判ト云フニ在リ而シテ被告人ハ其答辨書ヲ差出サス爰ニ本院ニ於テ專任判事ノ報告ニ依リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審按スルニ被告カ犯罪ノ事實ハ原裁判官ノ認定スル處ニ據レハ既ニ竊盜ノ贓物タル情ヲ知リ之カ運搬ヲ爲シタルモノナレハ即チ贓物ノ寄藏者タルヲ免レス然ルヲ原裁判所ハ法律上罰スヘキ正條ナキモノトシテ刑法第二條ニ照シ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナルヲ以テ之ヲ破毀シ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ本院ニ於テ直ニ裁判スル左ノ如シ

渡 邊 勘 三 郎

右ハ前ニ辨明スル通り其事實ハ原裁判官ノ認定スル處ニ據リ刑法第三百九十九條ニ依リ一月ノ重禁錮ニ處シ三圓ノ罰金ヲ附加シ尙ホ同

贓物ニ關スル罪

法第四百條ニ照シ六月ノ監視ニ付スルモノ也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年十一月七日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 土師經典

判事 中島盛有 判事 鳥居斷三

判事 薄井龍之 書記 東野秀彦

○放火失火ノ罪

〔要領〕刑法第八十條ヲ適用ス可キ不諭罪ノ場合ニハ治罪法第三百五十八條第二項ニ從ヒ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス

住所身分職業畧之

武井德次郎

年齡畧之

明治十五年一月廿五日熊ヶ谷輕罪裁判所ニ於テ右德次郎ニ宣告シタ

ル裁判ニ對シ同裁判所檢事中川忠純ニ於テ該裁判ハ刑法第四百九條ニ因リ仍ホ全第八十條二項ニ照シ輕減シテ處斷スヘキモノナルニ其不諭罪ノ所斷ヲ爲シタルハ不法ノ裁判ナリトノ旨趣ヲ以テ上告ヲ爲シタリ本院檢事喜多千頴ニ於テハ原裁判所檢事ノ上告ヲ不當ナリトシ而シテ原裁判ハ治罪法第三百五十八條ニ從ヒ無罪ノ言渡ヲ爲ス可キモノナルニ止テ不諭罪ノ旨ヲ明示シ該條ヲ適用セカリシハ不法ノ裁判ナリトノ旨趣ヲ以テ治罪法第四百十三條ニ因リ附帶ノ上告ヲ爲シタリ依テ判決スル左ノ如シ

刑法第四百九條ニ(火ヲ失シテ人ノ家屋財産ヲ燒毀シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス)トアリ同第八十條ニ(罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿カル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審察シ辨別ナシシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス)トアルニ因リ被告人德次郎カ所爲ハ原裁判所ニ於テ辨別ナクシテ犯シタルモノトシ全條第一項ニ

贓物ニ關スル罪 放火失火ノ罪

照シ不論罪ト判決セシモノナリ治罪法第三百五十八條第二項ニ又第
二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲スヘシトアリ
同第二百二十四條ニ豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シト
アリ其第六項法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時トアルヲ觀レハ免訴ノ言
渡ヲ爲ス可キモノナリ然リト雖到底被告人徳次郎カ所爲ハ原裁判所
ニ於テ辨別ナクシテ犯シタル所爲ナリトシ其罪ヲ論セサルノ點ニ付
テハ不當ニ非サルニ因リ治罪法第四百廿七條ニ照シ主タル上告附帶
上告共ニ棄却スルモノ也

大審院ニ於テ檢事喜多千頴立會宣告ス

明治十五年七月十八日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 關義臣
判事 鳥居斷三 同 兵頭正慈
同 昌谷千里 書記 森田忠雄

(要領)甲乙二人ノ中孰レカ犯人ナルヤ詳明ナラサルニ其一人ニ對シ刑
ヲ言渡シタルハ事實理由ノ齟齬アル裁判ナリトス

住所身分職業畧之

石井ツ子

年齡畧之

明治十五年一月二十五日福島輕罪裁判所ニ於テ右ツ子ニ對シ火ヲ失
シテ人ノ家屋ヲ燒毀シタル罪アリトシ刑法第四百九條ニ照シ罰金二
圓ヲ宣告シタリ同裁判所檢事補秋田政徳ニ於テハ被告人ツ子カ事未
タ發覺セサル前ニ官ニ自首シタルモノナルニ依リ刑法第八十五條ニ
照シ本刑ヲ減輕スヘキモノナルニ其減輕ヲ爲サハルハ不當ナリ則チ
治罪法第四百十條第九項ニ依ルモノナリトノ旨趣ヲ以テ上告セリ對
手者ツ子ニ於テハ失火ノ所爲ヲ自首シタル後チ父善平ヨリ出火ノ屈
ヲ出シタルモノナリトノ旨趣ヲ答辨シタリ本院檢事林三介ハ原裁判

放火失火ノ罪

所ノ裁判宣告中ニ被告ハ其罪ヲ自首スルト雖モ戸主則チ實父石井善平ヨリノ届書ニ據レハ自ラ失火ノ本人タリト官ニ告ルモノ、如シ仍テ刑法第八十五條ヲ適用スルノ限ニアラストストノ宣告ハ失火ノ主ツチニアラスシテ善平ニアルカ如シ然ラハ則チ失火ノ主其ツチナルカ善平ナルカノ點ニ就テ審明セサル可カラス依テ原裁判ヲ破毀シ相當ノ裁判所ニ移サレ審理ス可キモノト思料シ治罪法第四百十三條ニ從ヒ附帶ノ上告ヲ爲ストノ旨趣ヲ陳述シタリ仍テ判決スル左ノ如シ

原裁判所ノ宣告書中ニ石井善平ヨリノ届書ニ據レハ自ラ失火ノ本人タリト官ニ告ルモノ、如シ因テ刑法第八十五條ヲ適用スルノ限ニアラストアルヲ觀レハ本案失火事件ツチノ所爲ナリヤ將タ善平ノ所爲ナリヤヲ詳明スル能ハサルモノナリ其所爲詳明ナラサル者ニ對シ刑法第四百九條ノ刑ヲ宣告シタルハ事實理由ノ齟齬アルモノト謂ハサルヲ得ス依テ治罪法第四百二十八條同第四百三十三條ニ照シ福島輕

罪裁判所ニ於テ石井ツチニ宣告シタル裁判ヲ破毀シ更ニ白河輕罪裁判所ニ移シ裁判セシムルモノ也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十五年七月廿七日

裁判長判事 岡内 重俊 專任判事 昌谷 千里

判事 關 義 臣 同 鳥居 顯 三

同 山根 秀 介 書記 澤野 潜藏

〔要領〕常ニ人ノ住居シタル家屋ニ接続スル工役場ニ火ヲ放サタルハ刑法第四百四條ニ云フ廢屋柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ニ放火シタルモノト同視ス可キモノニ非ス又放火ノ際偶々人ノ在ラサルモ常ニ人ノ住居ヲ可キ家屋ニ係ルハ刑法第四百三條ノ人ノ住居セサル家屋ニ放火シタルモノト爲スヲ得ス

住所身分職業畧之

年齢畧之

放火及ヒ囚徒逃走ノ被告事件上告ニ付専任判事鳥居斷三ハ上告人橋吉之助カ上告ノ趣旨ヲ擴張シ其工場へ火ヲ放テタル所爲ハ常ニ人ノ住居スヘキ家屋ニアラサレハ刑法第四百四條ニ該リ其第六番監舎ニ放火セシハ現ニ人ノ居ラサルノミナラス何人カ既ニ放火シ置キタル其火ヲ消滅セサラシメノヲ慮リ更ニ放火セシモノニテ刑法第四百三條ニ適當スヘキモノナリトノ旨ヲ詳細辨明シ加フルニ京都重罪裁判所ハ治罪法第百八十二條ニ記載アル無能力者ノ供述ヲ証トシテ罪ヲ斷セラレタルハ共ニ不當ナリト更ニ追申ヲ爲シタリ大審院檢事堀田正忠ニ於テハ京都重罪裁判所檢事曾根誠藏ノ答辨ノ如ク工役場ハ常ニ人ノ居住シタル即チ看守詰所ト其棟ヲ接續シ又第六番監舎ハ現ニ人ノ住居シタルモノニテ放火ノ際偶々人ノ居ラサルモ人ノ住居セ

サル家屋ト云フヘキニアラストノ趣意ヲ辨明シ將又追申ノ如キハ其証憑ヲ難スル趣旨ナルモ其証憑ニ據ルト據ラサルハ事實裁判所ノ權内ナル心證判斷ニ屬スルモノニテ治罪法第百八十二條ハ同第四百十條第四項ニ關係スヘキ明文アラサレハ原裁判ハ允當ニシテ却テ上告ノ趣旨不當ト思考スルニ因リ上告ヲ棄却アラントテ望ムト陳述セリ茲ニ刑法第四百二條第四百三條第四百四條ニ照シ裁判スル左ノ如シ一上告第一ニ工役場ニ放火シタルハ刑法第四百四條ニ該ル云々申立ルト雖モ上告人吉之助カ自供中ニ(堀之助ハ硝子燈ノ火ヲ取り藁業場ニ持行放火シ藁ノ燃ヘタルヲ以テ西ノ方へ馳行キ初メ付ケタル處ノ燃ヘ揚ラサルニ付藁ノ括リ目ヲ解キ燃ヘ揚ラシメ云々)トアリ證人三宅信環供述中ニ(第四看守所ハ藁工業場ト棟續ナル云々)トアリ而シテ現場圖面ヲ閱スルニモ同棟ニ非ルモ棟續キタル明了ナレハ刑法第四百四條ニ云フ廢屋柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ト同一視スヘキモノニアラ

放火失火ノ罪

ルナリ上告第三ニ六番監舎ニ放火セシハ刑法第四百三條ヲ適用ス
 ハテ所爲ナリト云フモ其監舎タル常ニ在囚ノ場所タルハ三宅信環ノ
 證言ニテ明了ナリ果シテ上告趣旨ノ如ク其放火ノ際現ニ囚人ノ解放
 後ニ係ルニモセヨ其囚人ノ在ラサルハ偶然ノコトナレハ何ソ刑法第四
 百三條ノ人ノ住居セサル家屋云々トノ明文ニ適當スト云フヲ得ヘケ
 ンヤ第三追申ノ趣旨ニ係ル原裁判証憑云々ハ檢察官陳述ノ如ク事實
 裁判所ノ權内ナル心証判斷ニ係ルモノニテ毫モ不當ト云フヘキナク
 到底原裁判ノ刑法第四百二條ニ依リテ罪ヲ斷シルハ允當ノ裁判ナリ
 トス

右ノ理由ニ原キ明治十五年六月二十八日京都重罪裁判所カ極吉之助
 ニ宣告シタル裁判ハ破毀ノ原由ナキニ因リ治罪法第四百二十七條ニ
 依リ上告ヲ棄却スル者也

大審院 於テ檢事堀田正忠立會宣告ス

明治十五年八月廿六日

裁判長 判事 坂本 政均

專任判事 鳥居 斷三

判事 關 義 臣

判事 山根 秀介

判事 昌谷 千里

書記 澤野 潛藏

〔要領〕(一)原裁判言渡書ニ當惑ノ餘リ理非ヲ計較スルノ念慮ヲ失シ云

々ノ文字アルモ直チニ其實實ハ知覺精神ヲ喪失スルノ所爲

ニ係ルモノト推定スルヲ得ス

(二)法律ニ於テ自首ヲ許サ、ルハ謀故殺者ニ限リ放火ノ犯者

ニ自首ヲ許サ、ルノ法文ナキ上ハ固ヨリ自首ニ依テ減罪ス

ルハ當然ナリトス

住所身分職業畧之

濱 名 權 太郎

年齢略之

放火失火ノ罪

放火被告事件ニ付明治十五年八月二十三日群馬重罪裁判所ニ於テ刑法第四百二條第八十五條第八十七條第八十九條第九十條ニ依リ重懲役九年ニ處スト言渡シタル裁判ニ對シ檢事石川重玄ハ之ヲ不當ナリトシ上告セル要領ハ刑法第四百二條火ヲ放テ人ノ居住シタル家屋云々トアルハ身体財産ニ對スルノ義ヲ著ハシ其目的人ノ性命ヲ保護スルノ法條タルヤ知ルヘクシテ同第四百三條ノ單ニ對スルモノトハ異レリ而シテ被告ノ所爲ハ刑法第四百二條ニ正當セル犯罪ナレハ本刑テ酌量減輕スルハ格別同第八十五六七條ヲ採用シ財産ニ對スル罪ト同シク自首ノ一等ヲモ加ヘテ減等テ與ヘタルハ不當ナリト云フニアリ

對手人濱名權太郎ハ上告ノ不當ニシテ原裁判ハ適當ナリト答辨セリ被上告濱名權太郎代理人林和一ハ明治十六年十一月十九日附テ以テ附帶上告ヲ爲ス其要畧ハ原裁判所ハ當惑ノ餘リ理非ヲ計較スルノ念

慮ヲ失シ竊ニ幸吉宅ノ軒端ニ火ヲ插ミ遂ニ燒燬ニ至ラジメタルモノト判定セリ然ハ則刑法第七十八條ニ問擬スヘキモノナルヘシ何トナレハ理非ヲ計較スルノ念慮ヲ失スルハ是非ヲ辨別スルノ知覺精神ヲ喪失スルニ因スルニ非スシテ他ニ原由アルコトナケレハ能力ハ犯時全ク亡失セシト信認セシモノナリ然ルチ自首ノ原由ニ據テ刑法第八十七條第八十九條第九十條ニ問擬シ重懲役九年ニ處斷シタルハ全ク擬律錯誤ナリト思量スルチ以原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ刑法第七十八條ニ依リ不倫罪ノ言渡アラシクテ請求スト云ヘリ

大審院ニ於テ專任判事伴正臣ノ報告ニ據リ立會檢事林三介ノ意見代言人林和一ノ陳述ヲ聽クニ林檢事ニ於テハ原檢察官上告ノ趣旨ハ固ヨリ律文中放火ニ自首ヲ許サ、ルノ明文無キ限リハ其原由ト爲スニ足ラス又代言人林和一カ附帶上告ハ原判文中當惑ノ餘リ理非ヲ計較スルノ念慮ヲ失シトアルチ以當時被告カ知覺精神ノ喪失セシチ認メ

タルニ因ルモノトノ論辨アリトイヘ凡本犯程ノ犯罪者カ其惡事ヲ行フニ當リ幾分カ本心ノ狂ハサルハ無シ是即理非計較ヲ失念セルモノニシテ即其手續ヲ示スノ文ナレハ必スシモ知覺精神喪失ノ者ト觀ルヲ得ス然ハ則原裁判ハ完全無缺ニシテ至當ナリト云ヘリ代理人林和ハ附帶上告ノ趣意ヲ反覆辨論シ原判文ニ掲クル所ノ當惑ノ餘リ理非ヲ計較スルノ念慮ヲ失シトアルハ取モ直サス知覺精神喪失ノ者タル理由ニシテ苟モ原裁判官ニ於テ既ニ認メタル上ハ之ヲ動スヲ得サルニ付刑法第七十八條ニ依リ處斷スヘキハ相當ナルニ原裁判ノ爰ニ出サリシハ擬律錯誤ナリト云ヘリ依テ判決スル左ノ如シ

原檢察官上告ノ趣意ハ被告ノ犯罪ニ於ル刑法第四百二條ニ正當セルニ付或ハ酌量減輕スルハ格別固ヨリ自首ヲ許スヘキ罪ニ非サルニ同第八十五六七條財産ニ對スル罪ト同シシ自首ニヨリテ減等ヲ與ヘタルハ不當ナリト云ト雖夫レ法律ニ於テ自首ヲ許サ、ルハ謀故殺者ニ限り

放火ノ犯罪者ニ於テ自首ヲ許サ、ルノ法文無キ上ハ其自首ニ依テ減等セシハ當然ニシテ決テ不法ニ非サルニ付上告ノ旨趣相立ストス又代理人林和ハ附帶上告ニ付原裁判言渡書ヲ閱スルニ被告入濱名權太郎ハ一朝ノ怒リニ乘シ妻ヲ離別スルモ老父ノ看護幼兒ノ養育ニ指支ヲルニヨリ妻ノ父佐藤幸吉宅ニ至リ自ラ其過ヲ悔ヒ再縁ヲ乞フニ幸吉カ承諾セザルヲ恨ミ當惑ノ餘リ理非ヲ計較スルノ念慮ヲ失シ窮ニ幸吉宅軒端ニ火ヲ挿ミ遂ニ燒燬ニ至ラシメ後ヲ幸吉ニ對シ首服シテ仍ホ妻ノ再縁ヲ懇願シタルモノト判定ストアリテ此全文ニヨツテ見ルモ前後聊モ知覺精神喪失ノ文意無シ畢竟代理人ノ論スル所單ニ當惑ノ餘リ理非ヲ計較スルノ念慮ヲ失シトアルニ依ルトイヘ判文即當惑ノ餘リトアリテ其困難ニ際シ所謂理非ヲ辨別スルニ及ハスシテ正當ヲ計ルノ念慮ヲ失シ暴舉以テ放火スルニ至ルモノナリ此行爲タル一時ノ憤怒ニ起ルモノニシテ固ヨリ常人ノ境カレ難キ通患ナ

レハ理非ヲ計較スルノ念慮ヲ失シノ文字アルヲ以直ニ該事實ハ知覺精神ヲ喪失スルノ處爲ニ係ルモノト推定スルヲ得ス然ハ則前述ノ如ク判文中其意アルヲ見サレハ原裁判所カ刑法第四百二條第八十七條第八十九條第九十條ニ依リ處斷シタルハ不相當ニ非サルニ付附帶上告モ亦相立サルモノトス右ノ如クナルヲ以治罪法第四百二十七條ニ照シ原檢察官上告及ヒ代言人附帶上告共棄却スルモノ也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年十二月四日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 伴 正 臣

判事 園 田 弘 判事 上山 惟 清

判事 小村 壽太郎 書記 香田 能 興

○家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

〔銀領〕建造物ニ附着スル壁或ハ二階梯子段等ハ即チ建造物ノ一部分ナ

レハ之ヲ毀壞シタルモノハ刑法第四百十七條ニ依リ處斷ス可キモノトス

住所身分職業畧之

宇 都 宮 鶴 松

年齡略之

右鶴松カ被告事件ニ付明治十五年八月十八日大洲治安裁判所ニ開キタル松山輕罪裁判所ニ於テ被告ハ今長谷學校ノ段梯子ノ裏板ヲ蹴破リタル者トシ刑法第四百二十一條ニ照シ重禁錮十五日ニ處シ罰金五圓ヲ附加スト言渡シタル裁判ニ對シ同裁判所檢事代理警部補村上政行カ上告ヲ爲スノ要旨ハ刑法第四百二十一條ニ依照スルルハ重禁錮又ハ罰金ノ内ヲ單ニ適施スヘキ法章ナルニ重禁錮十五日ニ處シタル上仍ホ罰金ヲ附加セシハ不當ナリト又本院檢事加納久宣ハ上告ニ對スル意見ヲ陳述シ且附帶上告ヲ爲シタリ其旨趣ハ被告カ所爲ハ刑法放火失火ノ罪 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪 五七三

第四百十七條ニ該當スルモノニシテ之ニ同第四百二十一條ヲ適用シタルハ擬律錯誤アル裁判ナルヲ以テ破毀ヲ求ムト云フニ在リ因テ之ヲ審按スルニ刑法第四百十七條ニ曰ク人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ストアリテ其建造物ニ附着スル壁或ハ二階梯子段等ノ如キハ即建造物ノ一部分ニシテ之ヲ毀壞スル片ハ本條ノ支配スル處ナリ今承審官カ確認スル被告事件ノ事實ニ於テハ本院檢事附帶上告旨趣ノ如ク刑法第四百十七條ヲ適用スヘキヲ至當ナリトス然ルニ原裁判玆ニ出テス刑法第四百二十一條ヲ適用セシハ不當ナルノミナラス該條ヲ適用シナカラ罰金ヲ附加シタルハ共ニ擬律ノ錯誤アル裁判ナリト判決ス

右ノ理由ナルヲ以テ原裁判ヲ破毀シ治罪法第四百二十九條ニ法リ本院ニ於テ更ニ裁判スル左ノ如シ

宇都宮 鶴松

被告犯罪ノ事實ハ原裁判官ノ認定スル處ニ依リ刑法第四百十七條ニ照シ重禁錮一月以上五年以下罰金貳圓以上五拾圓以下ノ範圍内ヲ以テ處斷スヘキ處酌減スヘキ情狀アルヲ以テ刑法第八十九條第九十條及ヒ同第七十條ニ依照シ本刑ニ二等ヲ減輕シ重禁錮十五日ニ處シ罰金貳圓ヲ附加スルモノ也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月三十日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 土師經典

判事 中島盛有 判事 兵頭正慈

判事 黒岩直方 書記 笠愼三郎

(要領) (一)人ノ所有スル萱場ニ放火シ其萱草ヲ燒毀シタルモノハ刑法

第四百十九條ニ依リ處斷ス可キモノトス

家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

(二)會議局ハ檢察官ノ實地臨檢ヲ請求シタル場合ト雖モ之ヲ必要ナラスト思料スルトハ必ス其請求ニ應モサル可カラサルノ義務アルコトナシ

住所身分職業略之

前 田 龜 次

年齢略之

明治十五年七月三十日宇都宮輕罪裁判所會議局ニ於テ右龜次カ萱場ニ放火シタル被告事件豫審終結言渡ニ對スル故障ノ判決ヲ爲シ刑法第二條ニ照シ免訴且放免セリ同裁判所檢事補鶴見時一ハ右判決ヲ不法トシ上告ヲ爲シタリ其要領ハ第一原會議局ハ被告人カ寺澤友三郎所有ノ萱場ニ放火シタル所爲ハ証憑充分ナリト爲シタリ果テ然ハ刑法第四百十九條ヲ以テ罰ス可キ犯罪ナリ彼ノ萱草ノ如キハ人家必需ノ植物ニシテ其價額ハ竹木ノ小ナル者ヨリ却テ高貴ナル者ナリ而テ之ヲ

毀損スルニ火ヲ用ユルモ鎌刀ノ類ヲ以テスルモ其方法ニ依テ罪ノ有無ヲ判スヘキニアラス第二被告人カ放火シタル事實ハ只萱場ノミニ止マラスシテ平林ヲ燒毀シタルコトハ明治十五年三月十五日太田原警察署鳥山分署警部代理巡查福原鐘太郎カ爲シタル臨檢調書及ヒ圖面ニ徴シテ明カナリ加之右萱場中ニハ竹木ノアリタル旨捜査上探知シタルニ依リ果シテ然ハ刑法第四百六條ヲ適用スヘキ罪犯ナルニ付實地臨檢ヲ爲サスシテ漫ニ裁判シタルハ專横ノ處分ナリト云フニ在リ依テ本院檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審案スルニ治罪法第二百五十三條ニ會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ云々トアルニ依リ其必要ト思料シタル場合ニ於テハ更ニ豫審ヲ爲シ臨檢處分マテモ爲サシムルコトアリト雖モ之ヲ必要ナラスト思料シタル場合ニ於テモ會議局ハ必ス檢察官ノ請求ニ應シ臨檢處分ヲ爲サ、ル可カラサルノ義務アルコトナシ又同法第一百五十八條第二項ニ檢事ノ請

家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シトアルモ是固ヨリ豫
 審判事ニ命シタル職務ナルコ付之ヲ以テ會議局ヲ制裁スルヲ得ス故
 ニ上告第二ノ論旨ハ相立ヌスト雖モ上告第一ノ理由ニ付原判決書ニ
 舉示シタル事實ヲ見ルニ被告人ハ明治十五年三月十二日下野國那須
 郡南野上村寺澤友三郎所有ノ萱場ニ放火シタル者トス此所爲ニシテ
 果シテ相違ナキカ即チ人ノ需用ノ植物ヲ毀損シタル犯罪ヲ免カレサ
 ル者ナルヲ以テ上告論旨ノ如ク刑法第四百十九條ヲ適用ス可キ事件
 ナリトス然ルニ原會議局ハ右ノ事實ヲ認視シテカカラ之ヲ罰スヘキ正
 條ナシト爲シ免訴シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリト判定ス依テ之ヲ破
 毀シ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス
 左ノ如シ

前 澤 龜 次

右被告人カ人ノ所有ノ萱場ニ放火シ其萱草ヲ燒毀シタルコトハ原會議

局判決書ニ掲ケタル事實及ヒ証憑ヲ以テ明確ニシテ此所爲ハ刑法第
 四百十九條ニ依リ罰スヘキ輕罪ナリトス依テ公判ヲ受ケシムル爲メ
 朽木輕罪裁判所守都宮支廳ニ移ス者也
 大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年十一月廿八日

裁判長判事 大塚 正 男 專任判事 高 木 勲

判事 山根 秀 介 同 昌 谷 千 里

同 上山 惟 清 書記 上 田 庸 熙

諸條例規則違犯之部

○新聞紙條例違犯

〔要領〕新聞紙條例第十六條ハ上書建白ノ完備セシ一篇ノミヲ指シタル
 ニ非ス其字句用語ノ増減變更アルモ其主意事由ノ變換セサル限
 リハ亦上書建白ト同視ス可キモノトス

家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪 新聞紙條例違犯

住所身分職業畧之

宮崎 璋 藏

年齡畧之

新聞紙條例違犯ノ被告事件ニ付東京輕罪裁判所ハ明治十五年二月二十八日右璋藏ニ對シ新聞紙條例第十六條第十五條ニ依リ明治十四年第七十二号布告ニ照シ輕禁錮一月ト裁判言渡シタリ宮崎璋藏ハ之ヲ不法ナリトシ上告セシ要領ハ明治十五年一月九日發行東京日々新聞第三千二十号へ北京創定建議ト題シ其翌日發行第三千二十一号へハ北京創定建議略ト掲載シタル所ノ文篇ハ今記臆セヌ某ヨリ日報社へ寄セタル投書ニ就キ行文措辭増減變換ヲ爲セシモノニテ信太歌之助カ元老院へ差出セシ建白書トハ關係ヲ有セサルモノナリトノ趣旨ヲ以テ縷々陳辨シ再ヒ辨明書ヲ差出シ前意ヲ擴張セリ對手人檢事補鹽野宣健ハ假令文篇ニ少シク節畧アルニモセユ正シク歌之助カ建白書

ト同一ノモノタルヲ明了ナリト其証ヲ舉ケ辨答セリ茲ニ大審院檢事堀田正忠ノ意見ヲ聽キ裁判スル左ノ如シ

新聞紙條例第十六條ニ曰院省使廳ノ許可ヲ經スシテ上書建白ヲ載スルヲ得ス犯ス者ハ罰前ニ同シ之ヲ解釋スレハ上書建白ノ完備セシ一篇ノミヲ指シタルニアラス其字句用語ノ増減變換アルモ其主意事由ノ變換セサル限りハ即チ上書建白ト同一視セラル可キ律ノ精神ナリトス然ラハ則チ今璋藏カ被告事實ノ如キ新聞紙上信太歌之助ノ建議又ハ建議畧ヲ掲載發行シ記臆セサル某ノ投書ニ係ルモ其主意タル歌之助カ建議ニ符合セシ文篇ナレハ新聞紙條例第十六條ニ違犯セシモノニテ其法律ノ制裁ハ免カレ得可カラサルモノナリトス其他事實當否ニ係ル申立ハ治罪法第四百十條ノ上告ノ原由トナスニ足ラサレハ一々之カ辨明ヲ與ヘス

右ノ理由ニ基キ治罪法第四百二十七條ニ依リ上告ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立會宣告ス

五八二

明治十五年十月十四日

裁判長判事 中島錫胤 專任判事 鳥居斷三

判事 山根秀介 同 黒岩直方

同 昌谷千里 書記 森田忠雄

〔要領府會ノ建議案ハ上書建白ト同視ス可キモノタルヲ以テ之ヲ擅ニ

新聞紙ニ掲載シタルモノハ新聞紙條例第十六條ニ違犯スルモノ

トス

住所身分職業畧之

中 林 潔

年齡畧之

右潔カ被告事件ニ付明治十五年八月五日東京輕罪裁判所ニ於テ被告

ハ明治十四年七月八日刊行東京日々新聞第二千七百三号全廿日刊行

第二千八百八十三號ニ東京府會議長ヨリ内務卿ニ差出スニケノ建議

按テ掲載シタル所爲ニ對シ刑法第五條一項ニ依リ新聞紙條例第十六

條ヲ以テ罰ス可キモノト雖モ所犯明治十四年第七十二號布告頒布前

ニ在ルヲ以テ刑法第五條二項ニ依リ同法第百條ニ照シ數罪俱發ノ例

ヲ用ヒ一ノ重ニ從テ科スヘキモノトシ新聞紙條例第十六條ニ據リ同

第十五條ニ照シ仍ホ刑法第八十九條及同法第九十條ニ從ヒ情狀ヲ酌量

シ二等ヲ減シ罰金五十圓ニ處スト裁判言渡シタル所被告潔ニ於テ右

裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲セリ其要旨ハ第一新聞紙條例第十六條

ニ上書建白ヲ載スルニハ其筋ノ許可ヲ經ヘシトアルモ公然傍聽ヲ許サ

レタル府會議案ノ如キモ仍ホ其筋ノ許可ヲ經ヘシトハ法律ノ命令セ

サル所ナレハ刑法第二條ニ依リ之ヲ罰スルコト得ス第二建議案ト議

案トハ其名稱異ナルモ其實毫モ異ナラス通常一般ノ府會議案ト同一

ナリ第三議案ト建議トハ名稱ノ同シカラサル而已ナラス其性質モ亦

新聞紙條例違犯

五八三

大ニ異ナルモノトス第四原裁判所ニ於テ該建議一ハ内務省ニ差出ス
 ヘシト決シ一ハ既ニ差出シタルモノナレハ掲載ノ當時ニ在テハ復タ
 之ヲ議案ト云フヲ得スト裁決セラレタルモ議案ハ之ヲ議決シ了リタ
 ルニ依テ其性質ヲ變スルモノニアラス其差出シタルト否トニ於テモ
 亦然リ况ンヤ上告人ニ在テハ既ニ其筋ニ差出シタル建白ノ寫ヲ掲載
 シタルニアラス即チ公然開カレタル府會議案ヲ傍聽シタル儘登錄シ
 タルニ過キサレハ刑法第二條ニ違背シタル原裁判ヲ破毀シ無罪ヲラシ
 メテ請願スト云フニ在リ茲ニ專任判事ノ報告ニ據リ立會檢事ノ意見
 ナ聽キ之ヲ按スルニ被告ニ於テ該建議案ハ東京府會ノ議案ニシテ公
 然ノ資格ヲ有スル議會ノ建議ニ係レハ所謂通常一般ノ府會議案ト同
 一視ス可キモノタルコトハ勿論傍聽ノ儘新聞紙ニ登錄シタルモノナル
 ナ以テ新聞紙條例第十六條ノ制裁ヲ受ク可キモノニアラサル旨論告
 スト雖モ抑モ建議ナルモノハ議會ノ建議ニ係ルモノ一個人ニ係ルモ其

建議タルニ於テ毫モ異ナルコトアルナシ而シテ該建議ノ如キハ正ニ一
 篇ノ文章ヲ爲シタルモノニシテ即チ上書建白ト同視スヘキモノタル
 ヤ著明ナリ之ヲ如何ソ通常ノ府會議案ヲ掲載シタルモノト云フヲ得
 シヤ由是觀之原裁判官カ新聞條例第十六條ヲ適用シタルハ固ヨリ至
 當ノ裁判ニシテ上告ノ原由ナキモノトス前ニ辨明スル理由ナルニ依
 リ治罪法第四百二十七條ニ從ヒ上告ヲ棄却スル者ナリ

大審院ニ於テ檢事澄川拙三立會宣告ス

明治十六年三月廿三日

裁判長判事 土師經典 專任判事 石井忠恭

判事 西岡逾明 同 高木勤

同 昌谷千里 書記 味岡禮質

○酒造稅則違犯

〔要領檢査ヲ受ケサル酒造ノ桶ヲ所持スルモノハ酒造稅則第廿七條ニ

新聞紙條例違犯 酒造稅則違犯

違犯セシモノナレハ同則第三十四條ノ罰金ヲ科ス可キモノトス
 酒造稅則罰令ノ如キ沒收ニ係ルモノハ各條故ラニ明揭シタルニ
 由リ再ヒ刑法ノ總則ニ從ヒ沒收ヲ附加スルノ限ラニ非ス
 清酒濁酒ノ納稅ハ共ニ差違ナキヲ以テ其罰金モ亦造石稅ニ應
 テ科ス可ク清濁ヲ分別シテ科ス可キモノニ非ス

住所身分職業畧之

伊藤源藏

年齡畧之

明治十五年二月十五日木更津輕罪裁判所ハ右源藏ニ對シ酒造稅則違
 犯者ナリトシ酒造稅則第四章第卅一條第三十二條第三十三條ニ照シ
 處斷セシテ不當ナリトシ木更津輕罪裁判所檢事補江村忠一郎カ上告
 セシ理由ハ源藏カ檢査ヲ受ケサル桶ヲ所持セシハ酒造稅則第二十七
 條ニ酒造ニ屬スル諸器械ヲ管廳ニ届出ヘキ制規ニ違背スルヲ以テ同

第三十四條ニ依リ罰金ヲ科シ加ルニ刑法第四十三條ニ依リ犯罪ノ用
 ニ供シタル桶及ヒ無檢査ノ桶ハ沒收ス可キモノナルニ原裁判之ニ論
 及セサルハ不法ノ裁判ナリト云フニアリ對手人伊藤源藏ハ檢査官ノ
 上告ニ對シ別ニ上申スヘキ意見之ナクト答辨シ大審院檢事堀田正忠
 ニ於テハ酒造稅則第二十七條ニ違反スルヲ以テ同第三十四條ニ依リ
 其罰金ヲ科スヘキハ原檢査官ト同意見ナルモ刑法第四十三條犯罪ノ
 用ニ供シタル物件トハ其犯罪ヲ容易ナラシムル性質アル器具ヲ指シ
 タルモノニテ酒造犯則者ノ桶等ニ論及スヘキ法律ニアラス而シテ原
 裁判ハ清酒濁酒ノ分別ナク合併シテ其罰ヲ科シタルハ共ニ事實理由
 ノ不備且艱難アル裁判ナレハ破毀シテ他ノ相當裁判所ヘ移サレシ
 ヲ望ムト附帶上告ノ趣意ト併セテ陳辨セリ茲ニ酒造稅則及ヒ刑法第
 五條ヲ參看シ判決スル左ノ如シ
 伊藤源藏カ酒造ノ桶等ヲ檢査ヲ受ケス所持セシハ自ラ供出スル處ナ

酒造稅則違犯